
斬魔の剣 十畳間にて

あやゑ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斬魔の剣 十畳間にて

【Nコード】

N4593D

【作者名】

あやゑ

【あらすじ】

ごく平凡な高校生、名後京介なしろきよすけの家に刺さっている一本の剣。未だ由来も知れぬこの剣と共に生活していたが、ある日この剣を奪わんとする「奪還者」と、それを迎え撃つ騎士「クアン」が京介の前に現れる。そしてこの剣を巡る戦いに京介は巻き込まれていく事になる。

斬魔の剣 十畳間にてゝプロローグ

適材適所という言葉がある。

それぞれにはそれぞれの相応しい場所というものがあるという意味で使われるが、確かにその言葉どおりで、ライオンが水族館で鑑賞出来るのはおかしいし、フランス料理のフルコースをドライブスルーでテイクアウトするというのもピンとこない。

やはりライオンは鑑賞するのであれば動物園に居るべきだし、フルコースはレストランで食べたいものだ。

では「魔剣か聖剣かは知らないけどとにかく凄そうな剣」という物は一体どこに存在していれば適所と言えるのか。選ばれた勇者しか入れない洞窟の奥の奥、もしくは神殿の祭壇なんていうのも良いし、何百年もその剣を守っている怪物の後というのも捨て難い。

そっちの方がその剣がいかに凄い物なのかって話になるし、それがファンタジーの定番ってもんだらう。

だが残念な事に今は現代。

そんな洞窟や神殿は無いし、怪物にだってお目にはかかれぬ。

となると、俺の家の十畳程の畳部屋。

ずっと茶の間として使っているこの部屋にそんな仰々しい剣が刺さっている、

というのは色んな意味でやっぱりおかしい話になるわけだ。

なんで俺の家にこんな物が刺さっているかなんて事はわからない。俺が小学校に上がるうかという時に、叔父にこの家を買ったと聞かされ、

叔父と共に住んでいたアパートから引越した時にはもう刺さっていた。

その剣を不思議がって見ていた俺を見て、食器の詰ったダンボールを持ったまま、得意げに叔父がこの剣の説明をしてくれた。

叔父が言うには、前の持ち主が住んでいた頃にはこんな物は存在しておらず、

その持ち主も去り暫らく経った時、売家にしようと保管担当者が内装工事の為に入ってみたら、この部屋に剣が刺さっていたという事だった。

その時から、この剣を色んな方法で撤去しようとしたらしいが、残念ながらびくともしなかつたらしい。

数人がかりでかかっても抜けず、ぐらつきさえもしなかつたそうだが、いつその剣ごと更地にしようと計画も立ったようだが、

撤去に携わった業者が体の不調を訴えてこの件から降りるといふ、いかにもな展開にもなつたらしい。

家にしても年季の入った古い日本家屋で、脆い部分がそこかしこにある位という事に目を瞑れば、広々としていて過ごしやすいし、郊外にあるといっても、それ程交通の便も悪くは無い掘り出し物の物件と言えたから、

不動産屋もそのままでも、更地にしても躍起になって売ろうとして

いたのも頷ける。

だがご覧の通り、見取り図に「剣」と入っているような家なんて普通は気味悪がるのが当たり前で、
買い手が無いから格安で……

と人伝に耳に入れた叔父はこれに喜んで飛びつき、なけなしの貯金をはたいて即刻買い取った。

そうでなくても職業柄どこの物かわからない木彫りの人形や仮面、骨董品のような物を偏執的に買い漁ってくる変わり者の叔父にした
ら、

一般人には気色の悪い物に見える剣が刺さっている家、これほど興味を注がれる物は無いんだろう。

叔父にとつて是ほどのご馳走はないだろうし。

俺自身も、叔父と同じ気持ちっていうわけではなかったけど、
初めてその剣を見た時から気味悪がったりという記憶はこれといっ
て無い。

叔父に色々と吹き込まれた結果

「この家を守ってくれる護神刀だから大事にするべき」
みたいな事を刷り込まれ、

自主的に毎朝毎晩ご飯をお供えしたり、拳句の果てには両手を合わ
せて拝んでいたりもしていたから、
寧ろ子供ながらに畏敬の念があつたのかもしれない。

それは十年経った今になっても日課にすらなっているのだから、
刷り込みと言う物は恐ろしい物だ。

それより気色の悪い物は叔父の怪しげな土産で事足りていて麻痺
していたからかもしれないけど。

引っ越して間も無く、

当時流行っていたアニメのプラモデルを手に持ちながらその部屋で遊んでいた俺は、

ふとした事で転んでしまい、手からプラモデルを離してしまった。

顔を上げた俺の目に映った物は、その剣を真ん中にして、両脇に綺麗に真つ二つになって転がっていたプラモデルだった。

その事を叔父に話し、色々実験をした結果、見た目には想像も付かない程の切れ味で、

スイカだろうが大根だろうが転がして剣に触れただけで真つ二つになった。

お陰で、小学校時代には工作の課題が恐ろしくはかどり、いつも一番乗りに近い速さで棚やら箱を完成させた事を覚えている。

だけど、俺が誤って触ったとしても毛筋程の切り傷も出来なかった。

最初は「この剣はきつとこことは違う世界から来た剣なんだ」

とゲーム機を通して映った画面に広がる【剣と魔法の世界】を見ながら想像した物だし、

もしこの剣が俺の物になったら何が出来るだろう…と考えてワクワクしたり、

恐ろしくなったりもした物だった。

だけど、業者の人と同様に、俺や叔父にもその剣を抜く事はおるか、動かす事すら出来なかった。

叔父も折角の研究対象と喜んでいたが、触る事は出来ても、

機材を持ち込んで調べた所で何一つ収穫が無かった事に落ち込んで、次第にこの剣に対して研究意欲を無くしていった。

俺もどうする事も出来ないと思いきらされてからは、

次第にそんな想像をする事も止め、
護神刀兼もしもの時の便利カッターという認識を持って生活する事
にした。

今もこうして頬杖をつきながらテレビを見ていても、
少し視線をずらせば何時も通りに刺さっている剣が視界に入る。

いつかこの剣が抜けるときが来るのだろうか。
その時が来た時には、何かが起こっているのだろうか。
何せこれだけ頑なに抜けない剣なのだ。

流星にこの世界の危機がだなんて不謹慎かつあぶなっかしい期待は
しちやいないが、

きつと何かが起こるはず
それ位の期待はしてもしょうがないと思う。

さて、その時は何時か、そして誰がその役目を担うのか

斬魔の剣 十畳間にてゝ1・日常

「ねえ名後君、明日の事なんだけど、ちゃんと忘れてないでしょうね」

もうすぐ本格的な夏に入ろうかと言う初夏、時間にして6月21日の午後三時半を少し回った頃。

市の外れに位置する公立東雲高校1年C組の教室では、ホームルームも終わり明日が土日という事もあって、

これからの事や、明日の事などを話し合っているようで教室内も騒がしくなっていた。

ご多分にもれず、帰宅の支度を始めた所をクラスメイトの女生徒に呼びかけられて、振り向いた少年が居た。

少年の名は名後^{なしろ}京介というが、彼はどこにでも居る高校一年生だった。

特に問題を起こすような性格でもなければ、教師の目に止まるような行為もしない。

成績も中位程度をそれなりにキープして、

苦手な科目では赤点にならないように一夜漬けをする程度の学力。

運動神経も優秀と言えるほどでもないが、悪いと言つ程の物でも無い。

良くも悪くも、周囲の目に付かない生徒。

ただ、たくましい少年ではあった。

両親とも幼い時に死別、親戚をたらい回しにされそうになった所を引き取ってくれた叔父も今は、

世界のどっかで遺跡の探検でもしているのだろう。
年に何日も帰ってくることは無い。

それ故一人暮らしの期間が数年も有るため、炊事洗濯を最低限に
こなし、

近くのスーパーで閉店間近に行われるタイムサービスに行っては、
目当ての商品を周りの海千山千のプロと言えるオバサン達の間を掻
い潜り、

ゲットする所帯じみた行動をする16歳。

それは嘆かわしいほどたくましいと言える。

「え?……明日?」

いきなりそんな事を言われても、当の京介には全く身に覚えが無
かった。

明日の予定と言っても、明日は近所のスーパーでトイレットペー
パーが安売りされていて、
それを買おうか……それ位な物だった。

「そつ、明日。まさか、覚えてないなんて言うんじゃないでしょ
うね……」

京介ににじりより、疑いの目線を送っている彼女の名前はクラスメ
イトの沢渡秋野。

どちらも苗字のようだが、しっかり「秋野」は名前である。
赤みかかった毛でショートカットの良く似合う、明朗快活な少女
だ。

スタイルも容姿も良く、結構男子には人気があるようだが、
少し勝気な部分もあり思った事をずばずば言う面もあるのが玉に傷
だった。

「覚えてないって言われても……土曜に何かあったか?」

その言葉を聞いて、呆気に取られた顔をする沢渡。

「はあ、やっぱり覚えてなかったのね。駅前のビル街で買い物するから、荷物持ちしてって話。

忘れてるかどうか確認しとこうと思ったけど、聞いたいて良かったわ」

「……ちよ、ちよつと待つてくれ沢渡。俺はそんな約束知らないぞ」
正しく寝耳に水の事だった。

そんな約束は残念ながらした覚えが無い。

彼女も京介が忘れていたという事は想定していたようだが、
そもそも知らなかったという事実は想定外だったようだ。

「はあ？知らないって……名後、聞いてないの？」
「聞いてない？一体何の話だよ？」

どうも互いの話が噛み合っていない事を訝しんだのか、暫らく考
える振りをした後に

「ふうん……そういう事ね……」
と呟き、ジト目で京介の席の後を見る。

京介もそれに促されるように自分の後ろを見た。

そこには、机に突っ伏して寝ている男子生徒が居て、
ぐうぐうと寝息も聞こえていた。

沢渡は京介の横からその生徒の横へと移動し、すうと一呼吸をし
て左手を高く上げる。

そして寝ている生徒の机を「バンツ！」と豪快に叩いた。

その音は教室内に万遍なく響き渡り、
教室内に残って騒いでいた生徒達も何事かと振り向く。

だが、その音の主が沢渡だという事と、寝ていた生徒に向かって
の事だとわかると、

またそれぞれ話をしたり、帰り支度を始めたりしだした。

寝ていた男子生徒も、その音と叩いた衝撃によって目が覚めたよ
うで、もそもそと顔を上げる。

「うん……前にも……言ったかもしれないが、もう少し優しく起こ
して貰えねえかな……」

眠たげな目のまま、沢渡に気だるい声で非難をしたこの男子生徒
の名は、辻村郁人。

性格的にも外見的にも京介とは真逆に位置する、良い意味でも悪
い意味でも目立つ少年だったが、

正反対さが逆に相性が良かったのか小学校から不思議と馬が合い、
親友と言っても差し支えない付き合いがある。

「あのねえ。辻村がこうやって起こされるような事をしなきゃいい
だけでしょ！」

そのまま辻村に食いかかる沢渡。今にも辻村の襟首に掴みかかる
うという勢이었다。

このやり取りもいつもの事で、C組内ではもはや風物詩のように
思われていた。

「名後に土曜の事話してないでしょう？あれだけちゃんと言ってい
てねって言ったのに！」

その言葉に反応したのかしていないのか一見わからないまま、
机に突っ伏したまま顔だけ上げた状態で暫しぼくと京介と沢渡を
見ていた。

「……？あゝ……授業終わったか？京介」

見当違いの事を聞いて来た。

「ああ。もう放課後だよ。それよりも、詳しい話を教えてくれない
か」

「ふあ……悪い悪い。まあ、そう言うことだから。明日駅ビルに集
合な。」

時間は秋野に聞いてくれ。じゃよろしく」

その適当振りに余程憤怒の川を渡ったのか、顔を真っ赤にする沢

渡。

京介も辻村に聞くよりも、直接沢渡に聞いたほうがいいと判断したのか、

「しょうがないな……なあ沢渡。なんで俺もなんだ？」

と聞く。だが、沢渡は急にしどろもどろになり、あらぬ方向を見て言葉を濁した。

「あ、いや……だからそれは……その……ああもう！ちょっと来なさいよ辻村！！」

誤魔化すかのようにいきなり辻村の腕を掴んで強引に引っ張り、立ち上がらせる。

「お、おいおい……もう少し男の扱い方ってのを勉強してくれよなあ。それじゃモテねえぞ」

「う、うるさいっ！バカッ！」

「なあ、なんで俺もなんだってば」

京介の疑問に答える事無く、さらに顔を赤くした沢渡は怒号と共に、

辻村を連れて教室から出て行った。

「なあ、おい。って……何だったんだよ一体」

ぼつんと取り残された京介は少しむすつとして辻村達が居なくなつた方を見ていた。

結局、二人の言う事から察して、明日駅ビルにて荷物持ちをする約束を、

辻村と沢渡の間で交わされていたらしいという事。

そして、何故か自分もそれに付き合う形になっているらしいという事。

その二点が分かった。

「まあ……いつか。特売を逃すのは惜しいけど、トイレトペーパーは日曜にすればいいだけだし」

京介自身も、流石に友人二人とトイレトペーパーを量りにかけるような事はしない。

予期しない予定が入った物だったが、
ここ最近では駅ビル街には行ってなかったので都合も良かった。
とりあえず、詳しい話もしたいから二人が帰ってくるまで待とう
かと机に向き直ろうとした時、
教室のドアから少し小柄な女生徒が不安げな顔をしてC組の教室内
を見回していた。

目が合い、互いに挨拶をする。

女生徒は少しほっとしたような顔をしてそのまま京介の所に駆け
寄ってきた。

ボブカットの滑らかな髪がさらさらと揺れる。

「名後君」

「や……やあ、日下部さん」

と京介はぎこちない笑顔を浮かべて挨拶をする。

彼女の名は日下部美咲。

京介達とは同じクラスではなく、隣のD組の生徒であったが、
こうして放課後や、昼休みになるとこのクラスへとやって来ては沢
渡と仲良くやっている女生徒だ。

小顔で少し垂れ目がちの目に、整った顔立ちをした実に柔和な印
象を与える少女だった。

美しさよりも、失礼かもしれないが小動物的な可愛らしさが全面に
溢れている。

「あの、秋野ちゃんが居ないみたいなんだけど……。名後君、知っ
てますか？」

と困った顔をして教室内を少し見回して聞く。

その仕草だけでも京介にはとても可愛らしく映った。

「あ、ああ。沢渡なら、さっき辻村と一緒に出て行ったよ」

「あれ……じゃあ、行き違いになっちゃったのかな」

「そうみたいだな。多分、すぐ戻って来るんじゃないか。いつもの

事だから」

「何か……あつたんですか？」

「いや、そんなに大袈裟な事じゃないんだけどさ。」

「なんか、沢渡が俺宛に伝言をするように辻村に頼んだらしいんだけど、」

「どうやら辻村が俺に伝えてなかったみたいで怒っちゃって……明日の事なんだけど」

その言葉を聞いて、日下部の動きがぴたりと止まる。

「……え……？明日……？」

「そう。沢渡が駅前に買い物に行きたいって言ってて、」

「それに辻村と俺が荷物もちに付き合っつていう約束なんだけどね」

「え？ええ？それじゃあ……ひよ、ひよっとして名後君も明日……」

「！？」

「あ、ああ。特に予定も無いし、付き合う事にしたけど……」

「日下部は口をばくばくさせ、見た目にも明らかにうるたえ始めた。」

「え、えええ……」

「ど、どうしたんだ日下部さん」

「え、あつ。なんでもないんです！なんでも……」

とそのまま俯いてしまう。

と、京介は今話していた日下部の言葉を思い返す。

「名後君【も】」

も？

「この言葉が付くと言う事は……」

京介は自分の中に生まれたほのかな期待感を押し殺して日下部に問い掛ける。

「ひよっとして……日下部さんも明日、行く予定だったのか？」

「……」

俯いたまま無言で頷く日下部。

その答えに京介は心の中でガッツポーズをした。

日下部とはこの学校に入学した時、最初のクラス発表の際に会話を交わしたのが初めてだった。

彼女の柔らかな物腰や、時折見せる可愛らしい笑顔は京介にとって魅力的に思えた。

内気で少々弱気な部分もあるが、それが又「守ってあげたい」と男性に思わせるには十分なポイントだった。

元々日下部と沢渡が仲がよく、沢渡と辻村が腐れ縁という事もあって、

次第に顔を合わせる機会も何度かあった事が幸いし、

三ヶ月近く経過した現在はそれなりに会話をする事が出来るような間柄にはなっていた。

初めて会った時、沢渡に紹介されて緊張した面持ちの彼女をみたその時から、

京介は日下部が少し気になっていた。

単純にこうしてぎこちないながらも会話という初歩的なコミュニケーションを、

休み時間の間に交わせるだけでも嬉しい物だった。

そんな日下部と買い物に行ける。

これは思っても見なかったサプライズであり、

俄然京介のモチベーションも上昇傾向になっていった。

が、京介の心境とは異なり、日下部の顔は明らかに動揺しており、さらに困ったような複雑な表情を浮かべていた。

自分が余りに浮き足立ち始めた事を感付かれたのかと思った京介は、

直ぐに体裁を直し、それと無く尋ねる。

「ど、どうかしたの日下部さ」

と言い掛けたところで、辻村と沢渡が戻ってきた。

辻村はまだ寝惚けているような表情をしていたが、足取りは確かだった。

沢渡は日下部を見ると、直ぐに詫びを入れながら駆け寄って来る。「美咲、ごめんねっ。待たせちゃった？」

「ううん。大丈夫だよ」

首を振って否定する日下部を見て、沢渡はほっとした表情を浮かべた。

「そう？なら良かった。どこかのバカのせいで待たしちゃってごめんね」

「なんだよ、日下部を待たしてたんなら、俺を連れ出すことも無かっただろうが」

しぶしぶとぼやく辻村を見て、沢渡はまた着火点に火がついたようだった。

「うっさいわね！元と言えばアンタがね」

「んだよその言い方は」
とほとぼりが覚めたと思っていた辻村までもヒートアップしかける。また口論が始まりそんな二人を日下部と名後が止める。

「ま、まあまあ……」

二人とも無然とした表情のままだったが、どうにか食い止める事が出来た。

「ね、ねえ秋野ちゃん。それよりも、明日の事なんだけど……」

そのままの流れを変えるかのように日下部が少しまごつきながら沢渡に聞いた。

すぐに沢渡はぎょっとした表情を浮かべて早々に話を切り上げる。

「！ま、まあその話は帰りにゆっくりね？ね！？じゃあ、私達先に帰るね。それじゃ行こっ、美咲」

と教室から出て行ってしまった。

「う、うん。それじゃあ名後君、辻村君。さようなら」

と強引に押し切られる形になってしまった。

何時もの笑顔で挨拶をし、手を小さくひらひらと振って沢渡に追うように教室を出ていった。

「あ、ああ。じゃあな」

「んじやな」

と終始ぎこちない態度で会話を終えた京介を見て、辻村は少し口元をニヤつかせて自分の机に座った。

「いやはや……まあなんとも初々しいお二人だったんでないの」

ニヤニヤを止めずに京介を横目で見る。

京介は馬鹿言うなという表情を浮かべた。

「あのなあ。それよりも、沢渡に大分絞られたみたいだけど、大丈夫か？」

「ん？いやなに、連れさらわれてガミガミ五月蠅く言われてただけだ」

やれやれ、と言ったジェスチャーをして辻村が溜め息を吐く。

「まあ一応約束事なんだし、沢渡は特にそういう事はちゃんとしてるから守ったほうが良かったな」

「ま、いいだろそんな事は。ちゃんとして伝えたわけだしさ。

さて、俺たちもそろそろ帰ろうぜ」

「そうだな、帰るか」

と、教室内にまだ残っていたクラスメイトに挨拶をして京介達も帰ることにした。

こうして友人達と平凡なりに充実した学校生活を終え、

少し気になっている女子ときこちない会話を交わし、

帰宅途中に辻村と別れてスーパーのタイムサービスに向かった後、そのまま自宅へと向かう。

今日手に入れたのは100グラム36円という破格の値段、

というよりも逆に怪しくて買う気も起こさせないような値段の肉だ

った。

最後のワンパックの争奪戦に見事勝ち取り、悔しそうな表情を浮かべたオバサンの顔が印象的だった。

勝敗の分かれ目は、オバサンよりも若干背と手の長さが勝っていた事だろう。

「ただいま……っ」と

気分良く玄関を空け、誰も居ないしんと静まり返った家の内へ挨拶をした後、二階の自室へと上がる。

鞆を適当にベッドの上に放り投げ、私服に着替えて一階の茶の間へと降りていく。

茶の間は十畳ほどの和室で、中央に座卓が置かれており、その上にはポットと急須が乗せられていた。

そして、その座卓から少し離れた所に、いつものように剣が刺さっていた。

柄に埋め込まれている透明の石が微かに煌き、京介の帰りを喜んでいるかのようだった。

京介はその剣に向かって挨拶をする。

「ただいま。今日も何事もなく刺さってましたか。って、返事するわけもないんですけど……」

少し苦笑して、茶の間の隅に置かれた27型程の少し型遅れしたテレビのスイッチを入れ、そのまま台所へと向かう。

通常、このように自分の家に物騒極まりない形で剣が刺さっているのなら、

普通は気味悪がったり、畏怖しなるべく近づかないようにする物だが、

この少年に到っては別段何も変わった事無く、気にする事も無く暮らしていた。

十年もの間、それこそ子供の時から見ていけば、案外慣れる物なのかもしれない。

冷蔵庫の中に今日の戦利品を詰め込み、茶の間に戻って一息つく。適当にチャンネルを回し、主婦向けの情報番組やアニメの再放送などを流し見るが、頭の中は明日の事を考えていた。

厳密に言えば明日の事ではなく、日下部の事だった。

だが、日常彼女の事を思い浮かべる時には何時ものあの優しい笑顔がまず浮かぶ物だったが、

今日に限っては京介も同行すると分かった時の、困惑した顔をした日下部だった。

どうやら、あの素振りからいって京介も参加していた事を知らなかったようだった。

「このまま行っても、なんか気を使わせるみたいだよな……悪いよな……」

と頬杖を付いて呟く。

まずもって、明日京介が付いていく事に対して日下部がどう思っているか。

少なくとも歓迎ムードか否か位はわかる。

あれはどうもあまり歓迎はしていないように思えた。

歓迎するのなら、あんな困った顔はしないだろうし。

となると、自分が行く事で日下部に余計な気を使わせたりするといふのは京介にとって望む事ではない。

一人だけ浮き足立ってはしゃいだところで他の友人たちが白けてしまうのが相場だろう。

京介なりの空気の読み方を総動員した結果、

断ろうか……と思うが、かといって断るのは沢渡にも悪いし、辻村一人に荷物持ちさせるのも忍びない。

そもそも約束を反故するという事は、人としてどうかと思う行為だと考えていた。

自分は一体どうするべきかという事を考え過ぎたせいか、毎食行っていた剣にもお供えをするという事を忘れたまま、食事を終えて入浴、適当に時間を潰してもやもやした心持ちのままベッドに入ってしまった。

梅雨時特有のじめっとした暑さも手伝ってか、中々寝付けずに居た。

しかも日下部の困った顔を思い浮かべてしまい尚更京介を苦しめる。

どうにか頭に浮かぶ日下部に土下座を繰り返し、帰って頂いた後、ようやく訪れた眠気の前、徐々に眠りに陥っていた。

こうして毎日毎日、薄いながらも積み重ねていった日常。

だが、京介の枕元に置かれた目覚し時計が指し示した時間にして深夜1時05分。

その日常を打ち砕く何かが、いかんとも形容し難い轟音を伴って現れた時、

京介の日常は変化する。

斬魔の剣 十畳間にてゝ2・邂逅

「うあっ！な、なんだ!？」

余りの轟音に京介は思わずベッドから半身を起こした。

最初は、大きな交通事故か何かか近所で起きたんじゃないかと思える程の衝撃音だった。

「事故か……何かか？」

京介はベッド際にあるカーテンに手をかけ、少し開ける。

外にはさして変化は見られない。

ご近所さん達が騒いだり、駆けつけてくるであろう警察や野次馬の気配も無かった。

少し息を潜めて待ってみたが、それを匂わせるような騒ぎが起こる様子は無かったし、

何時も通り外は静かな物だった。

どうやら交通事故の類では無さそうだ。

ならば余りにもリアルな夢を見た為、現実との境目がつかなくなっているのか。

そんな風にも思ったが、そんな夢を見た覚えは無い。

内心「何だよ……」と毒づいて寝なおそうかと思っただが、

何分急に起こされた為、妙に目が冴えてしまい今すぐ寝なおす気にもなれなかった。

「しょうがない。水でも飲むか」

部屋に備え付けてある蛍光灯のスイッチに結ばれた紐を手探りで探す。

だが、いつもの手に当たる感触が無い。

「ん……あれ？」

スカ、スカ、と空振る手。

おかしいと思い、蛍光灯のある天井を見上げると……。

京介は、全ての違和感を解決するに到った。

さっきの音は、夢じゃなくて、実際に起きている事なのだ。

そしてそれは紛れも無く自分の家、自分の部屋の床をぶち抜いて真下の茶の間に落ちたのだと。

蛍光灯は下に落ちた「何か」によって破壊され、

今はかるうじて壊れた天井から覗く月明かりのみで仄かに照らされている状態と言う事だ。

とはいえ、これであるほど納得出来るわけが無い。

天井と床に空いた穴を交互に見ながら、

この間レンタルして見た隕石が地球に次々と落下する映画を思い出す。

映画では隕石が落ちた瞬間的に大きな爆発が起きていたが、そんな兆候は見られなかった。

もちろんそれ程の爆発が起きるほどの大きさの物が降って来たわけではないという

事位は空いた穴の大きさでわかってはいたが。

我が家に降りかかった事態を理解する事が出来ずに困惑している
と、

かすかに階下から何かが居るような感じを受ける。

まるでテレビの副電源を入れっぱなしにしたままのような、むずむずする感覚が京介を襲う。

一度そう感じてしまうと、この床穴から漂ってくる違和感ばかりが際立つ。

今現在、この家の同居人と言えるのは、叔父ただ一人。

その叔父も今は居ないから、この家には京介一人だ。

となれば、家の中に自分以外の誰かが居るのなら鋭敏に察知出来る。

(……叔父さんが帰ってきた?)

確かに変人と言っても差し支えない叔父は、帰ってくる度に異様な趣向を凝らしてくる事はある。

とはいえ、これは流石にやり過ぎだし、こんな時間に帰ってきた事は無い。

(となると……泥棒か何か?)

京介は息を呑んだ。そうだとしたら大変だ。

家には大した物は無い、あるとすれば叔父の収集した妙なコレクションくらいな物だが、

それが盗られたとあつては京介自身が叔父に何をされるかわかったもんじゃない。

しかし、本当に泥棒なのかどうか。

泥棒がこんな天井から一階まで落下したのなら普通無事では済まない筈だろうし、

そんな間抜けな潜入をする泥棒も居ないんじゃないだろうか、マンガが何かじゃあるまいし。

となると、下には一体何が居るのか…。

そう思い首を伸ばして床穴から階下を覗き込もうとするが、下は闇に包まれており、何も見えなかった。

本来なら、微弱ながらも月明かりは階下にも届いていてもおかしくないはずなのに。

どうも、ただ事では無い気がする。

何か、人間がやった事じゃ無いような…。非日常的な何かがこの家で起きているような…。

とはいえ京介は特にオカルト信仰があるわけでもない。

だが、他の人よりはそういった方面に理解がある方だとは自覚している。

それも、茶の間に刺さっているあの剣と、

妙な物を土産として送りつけてくる叔父のお陰なのだが。

人の家に十年以上も正体不明の剣が刺さっているという事が有るのなら、

深夜寝ている時に急に何か落下してきて、屋根と二階の天井をぶち破って来る事だつてあるかもしれない。

とはいえ、十年以上も正体不明の剣が刺さっている家に、深夜何かが落下してきて、

屋根と二階の天井をぶち破っている。

というのは余りにも有り得ない。

……やはり一階に降りて直接確かめなければならぬのだろうか。

下に降りようか考えていたその時、

床の穴から「ギインッ！」という堅い物同士がぶつかり合う音が響く。

時代劇で耳にするような、刀と刀との刃競り合いのようにも聞こえた。

びくつと、身体を強張らせる京介。

反射的に首をすばめて隠れるような行動を取る。

そして徐々に首を伸ばして下を覗き込むが、

下で何が行われているかは依然としてわからない。

すると、もう一度。

さっきのような堅い音が京介の耳に入る。

……やっぱり、下に降りるしかないのか。

とはいえ、その手の事になんの取り得も無い自分が行ったところで、何が出来る筈でもない。

大体、下に居る何かの正体もわからないのだ。

強盗の類だったとしたら当然、返り討ちに会うのが関の山だし、最悪の場合、殺される事だって考えておかなければならない。

考えすぎかもしれないけれど。

と思つたが、もつと簡単な方法を思いついた。

警察に連絡すればいいんじゃないかという事に。

なんでこんな簡単な事が思いつかなかつたんだろうか。

ありえない事が立て続けに起きて冷静な判断が出来なかつたのか
もしれない。

こういう時もつとも頼りになるのは警察だ。

直ぐに机の上を探して携帯電話を取る。

そわそわしながら警察に繋がる番号を入力し、耳に当てる。

だが、幾ら待っても繋がる気配が無い。

耳には「プー」という音が続いているのみだった。

不思議に思い表示パネルを見ると…圏外になっていた。

「あれ……？」

別にこの部屋は圏外になるような環境ではない。

自室で友人達と電話を使って会話をした事だって当然ある。

だが、部屋中どの箇所に携帯を近付けても圏外のままだった。

こんな事は今までに無かった事だった。

最善の手段が使えない事に落胆を隠し切れない。
やっぱり自分が行くしかない。

京介は内心怯えながらも意を決して下に降りる事にした。
まだ恐怖心よりも、責任感とその中に微かに潜む好奇心が勝つて
いたからだろう。

念の為、護身用になるかと思い崩れた天井の木片を持つ。
握ると、少し手からはみ出して握りにくい。

最悪の場合、こいつが自分の生命線になりうるのだ。
とは言え、何とも頼りない物だった。

こういう時、茶の間のあの剣が使えれば。

と京介は考えた。

あの剣を使えさえすれば、どうにかこの場をやり切れるかもしれ
ないのに。

そんな事を考えても、自分には抜けもしなかった物なのだから無
意味だと分かっただけでも、

今現在不可思議な事が起こっているのだから、不可思議な存在にす
がりつきたいものだ。

あの剣が使えるとしても、どの道下の茶の間に行かなければなら
ないので同じ事なのだ。

自室の襖をゆっくりと開ける。

目の前には闇ばかりが広がり、窓から差し込んでくる月明かりだ
けでは正直心許ない。

何時もはこのような闇夜であってもトイレに行くのも平気な物だ
ったが、今日ばかりは違って見えた。

この闇の中に入ってしまつたら、自分はこの闇に飲み込まれ、二度と戻つては来れないかもしれない。

そんな得体の知れない恐怖感を覚える。

廊下に立ちすくんでいても先程と同じ堅い音がまだ響いており、一階に何者かが居て、まだ何かをやっているという事を確信させた。

すっかり口は渴き、唇はかさついている。

梅雨時特有のじめじめした空気と只ならぬ緊張の為、

京介の首筋にはもう幾筋もの汗が流れていた。

さつき手にしたばかりの木片にも京介の汗が染み付いている。

どうにか身体を動かす事に神経を総動員し、

そろりそろりと廊下をゆつくりと渡り、階段を目指す。

余りの暗さに階段のスイッチを入れようかとも思ったが、

下手に電気を付けたりすればまず間違ひなく階下に居る何かに気付かれるだろう。

それだけは避けなければならない。

長年住んでいる勘と、やっと慣れてきた夜目を頼りに階段を降りていく。

何時もの事とはいえ、この階段のきしみが今だけは煩わしい。

時折大きく軋む音を立てるだけで、京介の心臓は高鳴つてしまう。

普段の何倍もの時間をかけてどうにか無事に一階に降りる事ができた。

二階同様、闇が支配している一階を見回す。

茶の間に落ちた何かは、家の中をうろついたりせず、そのまま茶の間に居るようだった。

足音を立てず茶の間に向かって歩こうとしたその瞬間。

地の底から聞こえるかのような獣の如き咆哮が家中に響く。

その叫びから数秒もしない内、何か倒れるような音と微かな揺れを感じた。

その咆哮は京介を射すくめ、思わず握っていた木片にも力が入り、ささくれていた部分がぺきっと折れる。

今の音すら聞かれては居ないかと動きを止め、より呼吸を潜めて耳を澄ます。

一階に居る何かには聞こえては居なかったようだ。

(い、一体……なんだっていうんだ……?)

それでも逃げるわけにはいかない。この家に居るのは自分だけのだから。

最早、京介の中には得体の知れない出来事に対する使命感のような物が芽生え始めていた。

茶の間が見える場所まで辿り付いた時、

「……なっ！」

京介は、茶の間から差し込んでいる光を見て驚愕した。光。

二階から下を覗き込んだ時には、不自然なほど暗かったと言っのに、今では灯りを付けたかのように光っており、廊下まで照らされている。

だが、その灯りの色が、普段付けている蛍光灯の色とは異なり、青白い光になっていたからこそ、京介は驚愕していた。

う、宇宙人かな……?

思わず見当違いの事を考えてしまう。
いつそそうであつて欲しいと思ひながら京介はごくりと喉を鳴らす。

喉は渴いてくつついていた為、少し痛む。

更に慎重に歩みを進める。

心臓の鼓動がうるさい程に鳴っていた。

どうにか近づく事が出来た襖に背中をつけ、まずは一つ大きく息を吐く。

京介の脇、開けられた襖から差し込んでいる光に、何かが紛れていた。

その方向へと視線を動かすと、何か白い物：雪のような物がふわふわと舞っていた。

一見雪のようにも見えるそれは、一粒一粒がほのかに光っていた。その内の一粒をそつと掌に載せてみる。すると一瞬で消え、跡形も無くなった。

これは一体どういう事か。

京介は中に居る何かに気付かれないようそつと顔だけ覗かせる。

そして、目を見開いた。

……室内は、一種異様な雰囲気に包まれていた。

茶の間の備え付けておいた座卓はひっくり返り、茶棚も倒れていた。

そして件の雪のような物が大量に降り注いでいる。

天井から、というよりも空から降っているように見える。

その白い物の内幾つかは室外に漏れ、廊下にもちらほらと落ちていたのだった。

まるで茶の間だけが冬に入ってしまったかのような錯覚すら覚える。

そして、その中においてもなお、剣は畳に突き刺さっていた。
今この茶の間で起こっている事など知った事ではないと言わんばかりに。

再び茶の間内に目を戻すと、床に黒い人のような物が突っ伏しているのを見つけた。

一見人間にも見えるそれは、見た目からどこなくいびつさを感じさせる。

頭から顔、喉の辺りにかけて、白い布のような物が貼られており、その布には気味の悪い紋様が描かれていた。

床に投げ出された手足は、歪に折れ曲がり、人の間接では曲げる事が出来ない程ねじれていた。

まるで人形のような、空虚感すら漂ってくる姿だった。

体には何箇所か刺傷痕があり、黒い体から除かされている内部もやはり黒かった。

中でも人間で言う所の心臓部、胸部には更に大きい穴が開いており、既に息絶えているのか胸が動いている様子は無かった。

(し、死んでる……のか?)

京介が疑問符を浮かべるまでも無くこの者は生き絶えていた。

恐らく、この家に落下した犯人はこいつなのだろう。

あれだけの高さだ、大抵なら即死に値するダメージを受ける。

しかし落下した衝撃で死んだ、にしては胸部に空いた穴が気になる。

どう考えても自然に付いた物では無いだろう。

となれば……落下してから、何かが起こり、そして死んだ。

そう考えるのが自然だ。

やっぱり、胸部に空いた穴がトドメになったのだろう。

突如その者を蒼い炎のような物が包んだ。

炎は腕を、脚を、胴を、頭をあっというまに覆い隠し、

全身へと回った炎は身体を一瞬の間に灰へと変化させていく。

骨も残さずに燃える所を見ると、この炎は骨すら灰に変える高温なのか。

それとも、元々この者に骨と言う物は無かったのかもしれない。

不思議な事に、一瞬に血肉を灰へと変える程の高温と見られるこの炎から1・2メートル程度しか離れていないのに、京介の所にその熱が届く事は無かった。

危険を感じて腕で自分を庇ったものの、熱が来ない事を少し不思議に思った。

蒼き炎はまるで床に倒れていた者など最初から存在しなかったかのように、

跡形も無く消しさり、そして間も無く炎自体も消え去った。

始終呆気に取られていた京介。

やっぱり……これは夢なのだろうか。夢であって欲しい。

日常において、こんな事が起こるわけが無いと思うのが正常だ。

夢であると信じ込むほうが健全である。

だが、夢にしては随分と夕子の悪い夢だった。

だが、無情にも京介は妄想から突き放され、現実に戻される。

自分以外の誰かが放っている呼吸音が耳に入ったからだだった。

その呼吸音の主は、消えた人形のような何かよりも奥に居た事に気付く。

そこに居たのは一見、自分とさほど身長も変わらない人の影だっ

た。

まるでさつき消えたモノと先ほどまで対峙していたかのように構えたまま、

びくりとも動かない。

京介は、茶の間へと、光の中へとゆつくり入っていった。

入る瞬間、全身が不思議な感覚に襲われる。

だが、嫌ではなかった。

青白い世界、降り注ぐ雪。

場合が場合なら、神秘的な世界とも言える。

その世界へと脚を運んだ京介は、その人の影に近づくと。

その人物の姿形が視認出来る程の距離に近づいた時、京介は今日何度目かの驚愕に震える事となった。

その人物が、なんと形容し難い物に見えた為だった。

一件華奢に見えるその体には、主に曲線で形成された藍色に煌く鎧を着ていた。

その鎧の無駄の無い形からして、動きやすさ等の実用性を追求したもののだろう。

鎧に似せたメットのような物を被っている。

そして、そこから覗かせているその人間の容姿に到っては、その防具とはくらべ物にならないほど……おぞましかった。

木乃伊といっても過言では無い程に皮膚は変色し、濁いた古木のような印象を受ける。

目は在るのか無いのか、打ち抜かれたかのようにその眼には闇ばかりが広がっていた。

髪は白髪と言ってもいいほどで、小汚くばらけている。

唇のみに血が通っているのだろうか、鮮血を塗りたくったかのよ

うに真っ赤になっており、
それがまた気色悪さを倍化させる。

髪の毛の長さといい……鎧の下に着ている服からして、どうやら女性。

それも、京介と歳が似通った、少女と言える。

その少女が枯木のような手で持っていた槍は、見るもの問わずに虜にさせる程に美しく、

穂先は従来の槍よりも刀身が長い。槍と薙刀のあいこのこのような作りであった。

少女の身の丈よりも長いこの槍を、どうやって操っていたのかはわからないが、
目の前の少女が持つには似つかわしくない物であるのは間違い無かった。

その槍の刀身には血のようななにか黒ずんだ物が付いた。

その女性は、京介が居る事に今気がついたようだった。
ぼつかりと空いた両の瞳で京介を見つめる。

京介はこの少女を見ながら微動だにする事が出来なかった。

茶の間が丸ごと違う世界になってしまった状況と、
さつき消えてしまった人形のようなモノ。

それに目の前の少女。

それらが無い交ぜになり、京介の心はすっかり混乱していた。

少女が何か喋ろうと口をぎこちなく開く。

『キ……キヨ……』

京介に何かを伝えたかったのだろうか、

必死に開かれた口の周りの皮膚がぱらぱらと零れる。

だが、何かを喋ろうとする前に少女の体はぐら付き、ゆっくりと倒れて行く。

それと同時に茶の間を覆っていた青白い光は一点に収縮し、降り注いでいた雪のような物も淡く掻き消えた。

少女が倒れた時にはもう、再度夜が茶の間を包み、天井から差す月明かりで茶の間内が照らされる。

京介は暗くなった室内を見回した後、警戒しながら倒れた少女に近づく。

この人も……死んだのか？

さっきの奴と相打ちになっていたのだろうか。

アイツに空いていた穴。彼女が持っていた槍に付いていた血。

この人と……奴には何か関係があるのだろうか……。

となればこの人も又、同じように灰になってしまふのだろうか。

彼女がさっきの奴のように灰になってしまふ過程を想像して軽い吐き気を覚える京介。

警戒して、近づく事を止めてしまふ。

あの蒼い炎の巻き添えになる事を懸念しての行動だったが、その行動は間違いでは無かったようだった。

彼女の身体から、青い燐光が立ち昇る。

その燐光は徐々に少女の身体の上に集まっていく。

これ以上まだ何か起こるのか……と京介は勘弁してくれと言った顔を浮かべる。

少女から浮き出た燐光は、次第にバスケットボール大程の大きさになり、

少女の上で浮遊し続けていた。

その光はどことなく帰る家を失った迷い子のように、京介には感じられた。

途端にその光は爆発したかのように閃光を放つ。

「うわっ！」

余りの眩しさに、京介の視界は奪われる。

世界が全て白く覆われたように、京介は身動きも取れない。

その光は茶の間では飽き足らず、名後家すら覆わんばかりの光だった。

……どれくらい経っただろうか。

京介の視力が徐々に戻り、闇に目を凝らした時にはあの光も、少女の姿も無くなっていた。

「居なく……なった……のか……」

茶の間は、彼女達が居た形跡だけを残した。

彼女の顔が脳裏に思い浮かぶ。

彼女は……俺に何かを伝えたかったのだろうか。

それも今となってはわからない。

「一体、何だっただろう……」

この夜に起きた事。何もかもが分からないままで、置き去りにされたような気分になってきた。

呆然としたまま、京介は室内を改めて見回す。

「ん？なんだろ……これ」

何か、畳に光っている物が落ちていているようで、その輝きが京介の視界に入る。

何故か無性にそれが気になり、拾い上げる。

環状になっており、その穴の大きさからも、指輪と思われるそれを見回す。

こんなのは見た事が無い、消えた彼女の私物なのだろうか……。銀色の環に装飾が施されており、中心部には透明な石のような物が埋め込まれていた。

その石を見て、京介は既視感の正体に気がつく。すぐにそこに刺さっている剣と見比べた。

「何か……似てるな、この剣と」

剣に埋め込まれていた石と、この指輪の石が同じような物に見える。

この二つには、なんらかの関連があるのかもしれない。そう考えた。

ここへきて、あの剣と関係がありそうな物を見つけたが、残念ながらそれを確かめる術は無い。

持ち主と思しき少女は、目の前で消えたのだから。

とりあえず倒れた座卓を立て直し、指輪を座卓の上に置く。

一息付いて、辺りを見回す。

見上げれば、破壊された天井……それに屋根も。

倒れた茶棚の中も割れた皿や食器が散らばっている。

座卓も倒れたまま。

畳も、汚れてしまっている。

これも片付けなきゃならないんだよな……。

自分の身に何事も無く、何となくだが、今日はこれ以上何も起きないだろうと感じた途端にどっと疲れが押し寄せてきた。

もう一度、どこまでも深い溜め息をついた。

斬魔の剣 十畳間にてゝ 3 ・初めての日常

「ふぁ……あぁ……」

俺は、大きな欠伸を一つした。

眠い目を擦りながら、賑やかかつ騒がしい周囲の音に耳を預け、目の前を見る。

目の前には、老いも若きも男も女も関係なく、色んな人が歩いていた。

それぞれの目的の為、もしくは目的を見つける為に、
そういう事ならこの場所はうってつけだろう。

この駅ビル街……確か【鴻神ステーションモール】
みたいなありきたりな名前だった気がする。

大抵の物はこの辺りで見つける事が出来るらしい。

しかし、こうして賑やかな場所に居ても、昨日の事を思い出して
しまう。

昨日、我が家に起こった事。

青白い世界、雪。

人形のようなモノ……。

そして、消えた少女。

多分あんな事を体験した奴なんて、俺以外には居ないだろう。
これだけの人間が、こうやって生きているというのに。
なのに、あんな経験をしたのは自分だけ……。

この感情は優越感では無いと思う。

選ばれし者の恍惚だなんて気分には到底なれない。

こんな事で自分が特別だなんて思いたくは無い。

もし、ここを歩いている誰かが、代わってくれと言うのなら、喜んで変わって欲しい物だった。

いや、是非ともお願いしたい。

こんなもやもやとした、釈然としない感じはどうにも堪らない。

携帯電話をポケットから取り出し、今の時間を確かめる。

辻村からの連絡、メールは無し……と。

まあ、当たり前か。

約束の時間まではまだ大分時間があるわけだし。

一つ溜め息を吐いて、携帯を仕舞い再び目の前の通行人達を見つめる。

仲の良さそうな親子連れが目の前を通り、

両親に挟まれるような形で手を繋いでしゃぐ小さい男の子と目が合う。

何の気なしに笑って見せると、歯を出してにかつと笑い返してくれた。

その背中を見送ると、少しだけ気分が晴れた気がする。

「ふう……しかし、いい天気だな」

六月ももう終盤。

梅雨明けにはまだ程遠いが、この週末は幸運な事に晴れが続き、幾らか過ごしやすい。

雲ひとつ無い快晴と言える空を見上げ、薄手のジャケットの襟を正す。

結局、昨夜の件のお陰で満足に眠ることが出来なかった。

一人で家に居てもどうにも落ち着かない、
また、昨日のような事が起きるんじゃないかと不安になってしまふ。
情けない話だけど、今は待ち合わせ時間より相当早い時間だ。
家の片付けもそこそこに、こうして一人で辻村達の到着を待っている。

それでも一応家の屋根にはブルーシートを敷いて置いたから、急に雨が降っても安心だ。

屋根と床は業者さんが明日来てくれるみたいだし、それまで凌げればいいわけだし。

あの部屋で一人ぼつんとしているよりも、
このように大人数がひしめき合っている中に紛れていた方が幾らか安心出来るというものだ。

朝早くでも辻村の所にも上がりこんでしまえば良かったのかも知れないが、

昨日起きた事を話した所で信用してくれるわけが無い。

もし逆の立場だったら俺でも信用しない。

それに、そんな話をしたら、週明けには俺は不名誉なアダ名で呼ばれる事が決まってしまう。

愉快痛快な顔をする辻村と沢渡の顔が目には浮かぶようだ。

ふと、携帯電話をしまったポケットとは正反対のポケットをまさぐる。

取り出したのは、昨夜、消えてしまった彼女の代わりのように落ちていた指輪。

指輪。

勿論持ってくるつもりなんて毛頭無かった。

ただ、出かけ際に、どうしても気になって持ってきてしまった。持っていないければならないような……そんな気がしたから。

この指輪を見ると、昨日消えたあの人形のようなモノ……そして、あの少女の事で頭が一杯になる。

そしてこの指輪。

茶の間に刺さってる剣と見れば見るほど、触れば触るほど、同じように思えてくる。

その理由は見た目だけじゃなくて、初めてあの剣と出会った時に感じた、不思議と嫌じゃない感覚。

今はもうあの剣を見ても、慣れてしまったのか感じる事は少なかつたけど、

こうして指輪を見ているとあの感覚が再び新鮮に感じられた。

なんで彼女がこれを持っていたんだろうか。

彼女が、あの剣の持ち主なんだろうか。

ならあの剣に似た指輪を持っていた事も納得が行く。

……いや、まだ彼女の物だとは決まったわけじゃない、

ただ彼女と入れ違いのようにあの部屋に落ちていただけじゃないか。

それだけで、彼女と剣と指輪……この3つに関連性があると考えるのは余りにも現実味に欠ける。

ひよっとしたら、あの人形みたいな奴の物かもしれない。

……それも結局同じ事か。

アイツとこの指輪の関連性だつてあるわけじゃない。

脳裏に少女の顔が浮かぶ。

何かを伝えようとしていた顔。

せめて、彼女が生きてさえくれれば。

このもやもやした物を取り除いてくれるきっかけになったかもしれないのに。

だけど、彼女は俺の目の前から消えた……。

例えようの無い無力感をひしひしと感じる。

【-もしかして、俺がもう少し早く下に降りていれば助かったんじゃないのか？】

死ななかつたんじゃないのか？】

……馬鹿らしい。

何の力も無い俺に何が出来るわけでもない。

実際、目の前の出来事に立ちすくんで見ている事だけで精一杯だったじゃないか。

俺は只の傍観者。

傍観者としての役目しか与えられていない。

【 だけど後一分……いや三十秒でも早く彼女に会っていれば、せめて彼女が言いたかった事を聞く事だけでも出来たんじゃないのか？】

……かもしれない。

俺が二階で恐怖でまご付いてさえしていなかったら聞けただろう。

だけど……じれったさに歯噛みする事さえ思い上がっている証拠。

だから、そんな事を考える事すら彼女に失礼だ。

【そつだ、大体俺には関係無い事じゃないか】

彼女の伝えたかった事、彼女の「死」を見届けたのは俺だけなのだから、聞き届ける義務があった筈だ。

【聞いた所で何が出来る？結局俺には何も出来なかったんだよッッ】

わかってる……わかってるけど！

少しでも……彼女の、彼女の

役に立てたかもしれないじゃないか！

「きゃっ！」

小さい悲鳴に、自問自答を遮断される。

周囲の雑踏も蘇ったかのように耳に入ってきた。

ふと声をした方を見ると、

「え？……ああっ！く、日下部さん」

驚いた。そこには日下部さんが居た。

そして更に、彼女の姿を見て驚いた。

いつもの制服姿とは違って、白いワンピースにカーディガンという私服姿……。

格別に可愛いかった。

なんと言つか、来て良かったと素直に思った。

全く沢渡め……ありがとう。

いや、そんな事を考えてる場合じゃない。

「う、ごめん！なんか、驚かせちゃったみたいで……」

考えすぎた為か、思わず声に出してしまったらしい。

そりゃ、挨拶しようとして大きな声を出されたら誰だって驚くよな。

「う、ううんっ。私こそ……ごめんなさい」

「いや、そんな……俺の方こそ」

互いに見合わせたまま気まずい空気が流れる。

「そ、それにしても随分早く来たんだね。待ち合わせまでまだ大分時間があるけど……」

はぐらかすように話題を変えた。

まさか、日下部さんもこんな時間に来るとは思わなかった。

日下部さんの事だ。

集合時間10分前位には来てるだろうなとは思っていたけど、まさか一時間を少し過ぎた位の時間に来るとは思わなかった。

「う、うん……。でも、名後君もこんなに早く来てるなんて、びっくりしました」

日下部さんも随分と驚いた様子だった。

確かに、俺がこんなに早い時間に待つてるなんてどう考えてもおかしいからな。

今日は荷物持ちとして来ているわけなんだから、そんなに早く此処に居る理由も無いだろう。

「あ、ああ。なんか、居ても経つてもいられなくて。

気が付いたらこんな時間から此処に居たって訳で……ははは」

とりあえず本音を伝えて見た……全く、我ながら情けない話だ。

だけど、昨夜みたいな体験をしたら、誰だって出来る事なら現場には居たくないはずだ。

もしそんな事無いって言う奴が居たら、俺は村一番の勇者の称号を献上したい。

日下部さんは、俺の言葉を聞いて何故かはっとした表情を浮かべ

ていた。

「あ、そうなん……ですか？」

「うん、どうにも待ちきれなくなってるさ」

これもまあ、間違いでは無い。

待ちきれなかったのは事実だから。

「……わ、私も」

「ん？今、何か」

周囲の喧騒のせいで日下部さんの声が少し聞き取れなかった。

「い、いえっ！なんでもありませんっ」

慌てたように日下部さんは顔を真っ赤にして首を振り、正面を向きなおした。

全部は聞き取れなかったけど、

【私も】って言ってたな。

……そうだよな、日下部さんも楽しみにしてたって言ってたし。

確かに、ここ最近この辺りは異様なほど色んなモノが建設されたり、開店してたりするから。

沢渡、辻村辺りは一日中いたって飽きやしないだろう。

それだけの物だ、日下部さんだって楽しみにして当然だ。

昨日、俺が行くって事がわかった時には随分と困った顔をしていたけど、どうやら気持ちを切り替わっていたようだ。

俺の横に立って、同じく辻村達を待っている日下部さんは、とても楽しげに見えた。

それにしても

こうして改めて私服姿の日下部さんを見ると、なんと言うか……

「 似合うな……………」

「 え? 」

日下部さんがこちらを不思議そうに見つめる。

「 ん? …… あっ! 」

しまった。また口に出してしまったらしい。

いくら疲れが残ってるからといって、これじゃあ只のアホじゃないか。

…………でも言ってしまった物は仕方が無い、視線を外して続けた。

「 いや…………日下部さんの服…………の事なんだけど。凄くその…………似合ってるから、つい……………」

この程度の言葉を言うだけで、口の中がカラカラになるなんて生まれてこの方あっただろうか。

女の子の服を誉めた事なんて無いから、これが正しいかどうかは
かんないけど、

少なくともこれで失敗したって事は無い…………だろう。

恐る恐る日下部さんの方を見る。

日下部さんは…………俯いていた。

し、失敗したのか? これで失敗する物なのか! ?

俺、言っちゃいけないこと言っちゃったのか…………。

日下部さんは耐えかねたのか、ついに顔を背けてしまった。
肩も微かに震えている。

こ、これは…………まさか!

ごくりと唾を飲み込む。

震える肩、顔を背けた理由……。

間違い無い……

お……

怒らせてしまった……のか。
途端に冷や汗が湧き出る。

ど、どうしよう。

どうすればいいんだ!?

これは……謝った方が良さんだろうか。

謝るべきだよな……いやでも!

謝ったら……まるで似合っていないように聞こえるじゃないか。
そんな事は言えない、事実似合っているんだから。

とはいえ怒らせたのは事実だ。

……ああ〜!もう!

駄目だ、もうどうしたら良いかさっぱりわからない。
頭のキャパシティが限界に達してしまった。

やっぱり、俺はこういうのには向いてないんだな。

下手に背伸びしたって待ち受けているのはお寒い結果だ。
調子に乗ったらこのザマだ。

それに、俺がどう思おうと、

日下部さんに見れば、結局俺は友人のクラスメイトの友人に過

ぎない。

せいぜい顔を会わせたら会話をする程度の仲だ。

だというのに……。

折角面白い物を楽しみにして来たら、

後から同行する事がわかったただけのそんな奴に、気色の悪い事を言われたら誰だって気分を害するだろう。

沢渡の手前、辻村の手前……面と向かって言えないから、ぐっと堪えている。

俺にはそう思えてならなかった。

さっきの無力感とは意味の異なる無力感に苛まれる。

弁解をする為の口を開く機会を失ったまま、時間だけが過ぎて行く。

昨日の疲れと、今の失敗に完全にやられてしまったのか、

手から何かが落ちた感覚が伝わる。

カチツとレンガ造りの舗道にぶつかる音。

それはそのまま日下部さんの下へと転がっていった。

あ……指輪。

持ったままだったのが、手から零れ落ちてしまったようだ。

「……あ」

押し黙っていた日下部さんの視界に指輪が入り、気が付いた。

咄嗟の反応か、しゃがんで拾おうとする。

彼女が指輪に触れた。

その時、

「きゃっ！」

ビシィッ！っという俺の位置からでも聞こえる位の音が鳴った。

日下部さんも、咄嗟に触れた手を離す。

その音に、周りの人間もこの音は何事かと、辺りを見回していた。……だけど、俺には見えた。

日下部さんが触れた途端、ほんの一瞬だったけど、青白い閃光が迸ったのを。

「ッ！日下部さん！」

慌てて彼女に近寄る。

日下部さんは指輪に触れた手を庇い、押さえていた。

「大丈夫か！？ケガは！」

「う、うん……。名後君。い、今の……」

俺は少し警戒して地面に落ちたままの指輪に触れる。

日下部さんが言っていたような事は……起こらない。

拾い上げて見回しても、特に変わった様子は無かった。

「びっくりしました。触った瞬間に……静電気が何かなのかな……」

そう、確かに触った瞬間に起きた。

俺も見えていたから間違い無い。

でもおかしい、俺が触っていた時にはそんな事一切無かったのに。昨日触った時にもだ。

出所が出所だけに、何らかの仕掛けがしてあるのだろうか。

触ってはならない者が触ったときには発動するような【何か】……。

となると、この指輪に似ているあの剣も同じような仕掛けが施されているのだろうか。

剣が抜けないのも、何かの仕掛けだとしたら。

しかし、俺には起こらないで、日下部さんには起きた……。

日下部さんはまだ落ち着かないのか、
今起きた事が信じられないといった顔つきだった。

「あ……ごめんっ！本当に大丈夫か？何処か、悪い所は……」

慌てて、拾った指輪を持ったまま彼女に問う。

もし、今ので彼女に何かあったら……。

俺は悔やんでも悔やみきれない。

「え、そっそんな。私なら大丈夫ですから……それよりも、行きま
しょう名後君」

日下部さんが申し訳無さそうに手を振った後、
何処かへ向かおうとした。

「行くつて、どこへ？」

「交番です。指輪、落とした人もきつと探してると思います。届け
ない」と。

時間もまだありますし、今の内に届けに行った方がいいかも」
腕時計を見ながら、日下部さんが言う。

「落とした人も……探している……」

落とした人

探している筈が無かった。

この指輪の落とし主は、もう居ない。

俺の目の前で消えてしまったのだから。

返そうにも返せない、落し物……。

この指輪が、とても重く感じられた。

俺は、何を考えていたんだ……。

彼女のじゃないとか、関連性が無いからまだわからないとか……。俺は彼女が落とした物じゃないと決め付けていたんじゃない、俺は自分を昨日の夜から切り離して考えようとしていたんだ。

何も出来なかった自分、無力だった自分を誤魔化していただけじゃないか。

正直、彼女達が何故茶の間に居たのかなんてわからない。

だけど、俺は何も出来なかった。

それは、彼女を見殺しにした事と同じじゃないか。

だからこそせめてもの手向けにと、

指輪をこうして持っている事で更に俺は自分を誤魔化していた。

そうする事で俺は彼女の為になる事をやっていると思いついていた。

ただの泥棒となんら変わらない行為を正当化している。

俺がこうして考えているのは、

自分が悲劇のヒーローだと悲観的になって思い上がっている。

ただそれだけじゃないのか？

そう思う事によって、彼女達に介入し、肩を並べ様としているだけじゃないのか？

だとすれば、俺は……。

言葉にならない。

二つの考えが、頭の中で渦を巻く。

俺は…… 一体どうすれば……。

「名後……君？」

気が付くと、日下部さんが俺を心配そうに見つめていた。

「あ、ああ……ごめん。交番は行かなくても大丈夫だよ。これ、俺が持って来た奴なんだ……」

「名後君のなんですか？指輪……ですけど……」

……まさか、馬鹿正直に言う訳にはいかないよな……流石に。

「俺のつてわけじゃないけど、叔父さんの……お土産でさ。お守りみたいな物らしいから、持ってる事にしたんだ……」
適当にウソを見繕った。

「そうだったんですか。叔父さまの……」

日下部さんも納得してくれたのか、頷いていた。

……ウソを付くのは心が痛む。

日下部さんと、彼女に心の中で謝罪をしながら話を続ける。

「だけど、俺が指輪なんておかしいよね。ちゃんと家に帰ったら仕舞っておくよ」

「でも、最近は男の人でも指輪をしている人も居ますし、そんなにおかしく無いと思いますよ？」

「そう、かな……」

「素敵な指輪ですし、名後君に、そ、その……似合うと思います」

似合う……のかな？

そういう事はもっと洒落っ気のある奴がやることだと思っけど……

……
だけど、誉められて悪い気はしない。

それが気になる異性からだと成れば尚更だ。

「……うん、なんというかその。有難う、日下部さん」

「そ、そんな。お礼なんて」

そのまま二人とも黙ってしまふ。

「よおつ、二人とも随分早いじゃないか」
その声に驚いて振り向くと、辻村が居た。

「つ、つつつ辻村っ？」

「つじつ辻村君!？」

「なんだ？二人して変な顔して……」

俺達を交互に見て、辻村も怪訝そうな顔をする。

時計を見ると、約束の時間までもう直ぐという位になっていた。
それは辻村にとって、快拳とも言える所業だった。

「いや……お前が約束の時間にちゃんと来るの、初めて見た」

「はあ？それで、そんな顔してたのか。」

まあ折角の週末に、秋野にぎゃあぎゃあ言われるのはごめんだから
な」

ふあ……と欠伸をする辻村。

「何よ、私が迎えに行くまで寝てたクセに」

その後から沢渡が現れた。

「いいじゃねえか、こうして間に合ってたんだから」

なんだ、沢渡が迎えに行っていたからこんなに早かったのか。

「さてっ、これで皆揃ったわね。よしよし、それじゃあ早速行きま
しょうか」

「げ、もう行くのかよ。もうちょっと落ち着いてから行くこつぜっ。」

「何言ってるの。今日の予定はびっちり詰ってるんだからねっ。」

まずは洋服を見に行くわよ。ほら行こっ、美咲」

と沢渡は日下部さんの腕を引つ張つて我先にと歩いて行く。
「わっ、秋野ちゃん。わわ……」

沢渡の澁刺さにあてられたのか、

「京介……今日はある種正念場だな」

辻村は行く前からげんなりしていた。

恐らく、これからの買い物地獄を想像したのだろう。

「そ、そうかもしれないな」

「ホラホラ、二人ともだらだらしないの。荷物持ってくれたお礼に、今日のお昼は辻村の奢りでいいから」

「ああ、はいはい。わかつたよ。って今すげえ横暴な事言つただろ！」

と辻村は追いかける。

確かに、今物凄い横暴な事言つた気がする。

「ほおらっ、名後君もボヤボヤしないっ」

「あ、ああ……」

俺まで奢らされたら堪らない。

俺は三人に向かって走つて行つた。

斬魔の剣 十畳間にてゝ 4・非日常、訪れたなら

「すいません。どうもありがとうございます。とう御座いました」

玄関先で京介は頭を下げた。

その言葉にならうように初老の業者は帽子を直す。

「いやいや、この天気だからね。もう暫らく続くみたいだし、良かった良かった」

そういつて外の空を見つめる。

外では雨が降り続いていた。

なんと言つても、梅雨真つ盛り。

今年の梅雨前線は余程この島国が気に入ったのか、例年よりも梅

雨明けは長くなるでしょうと、

お天気キャスターが言っていたのを思い出す。

「いやあ。私もこの仕事長いですがね、今回のような事は初めてでしたわ。

一体何が起きたらあんな……いや。まあ、いい勉強になりました」

僅かだが業者の男は歯切れを悪くした。

それはそうだろう。

こんな仕事を何度もやっているようだ、

この街にはしょっちゅう何かが墜落してないといけない。

その話に対して京介は曖昧な表情しか出来なかった。

自分だつて知りたいのだから、答え様が無い。

「ええ………なんと言いますか、あはは………」

適当に誤魔化して笑うしかない京介。

その時、外からクラクションが短く鳴った。

家の前には様々な工具や木材を荷台に積んだ軽トラックが止まっております、

その音に気が付いた業者の男は振り向いて、軽く手を上げる。

「それではまた、何かあったらお電話を。……おー今行くよ」

業者の男は再度会釈をし、トラックへと戻って行く。

京介は玄関から身を乗り出し、トラックに乗りハンドルを握っていた若い男性にも会釈をする。

初老の男の息子なのだろうか、何処となく面立ちが似ていた。

京介は業者を見送った後、戸をしつかりと閉めた。

閉めた途端、少しだけ寂しい気持ちになった。

人当たりの良い人達だったし、親身になって見積もり等行ってくれた事もあってか、

いざまた一人になった時の寂しさは相当くる物があった。

茶の間に戻り、一部分だけだが新しい素材に張り替えた天井を見つめ、

「まず間違いない叔父さんに聞かれるな…これは」と溜め息を吐く。

あれから一週間。

屋根の修理、一階の天井の修理は約六日に渡り、無事に終わった。

そしてこの一週間は公私共にこれと言った事も起きず、随分と平和な物だった。

だがそれは言わば表面的なモノであり、

京介に残ったしこりは取り除かれる事は無かった。

授業中、休み時間問わず、ぼーっとする所や、

考え事をしているような部分が見受けられるようになった。

京介自身もそれを自覚しており、その様子に気が付いた友人達はそれとなく原因を聞き出しそうしたり、

相談に乗ろうとしたが、京介はただ苦笑いをしてやんわりと否定しただけだった。

「っと……この箱も、外さないとな」

茶の間に不自然に置かれたダンボール。

それにゆっくりと手をかける。

慎重に持ち上げると、剣がその姿をゆっくりと現した。

剣は、業者の目を誤魔化す為にカモフラージュをしていた。

流石に、修理をしてもらう際に危険物が刺さっているのを見ながら作業して貰うのは申し訳ない。

作業にも身が入らないだろうと京介が取り合えずの形で隠したのだった。

それでも、業者の訝しげな目は惜しみなくダンボール箱に注がれてはいたが。

その剣の鏢の部分には、銀のチェーンで括られた指輪がかかっていた。

先週、辻村達と買い物に行った際に、ビル内のアクセサリ・ショップで購入したチェーンだった。

京介が羅列していた銀のチェーンを見つめ、

『そつだ、指輪……』

指輪にチェーンを括り、剣に掛けようと考え付いた。

『あ……さっきの指輪ですか？』

ネックレスにしてもいいかも知れませんか。素敵だと思えます』
と脇に居た日下部がそう言った。

京介が頭に「？」をひねり出していると、
そういうアクセサリも存在すると言う旨の説明を頂いた。

日下部のその一言で購入する事を決めたのだ。

京介にそんな趣味があるとは思ひもなかった沢渡と辻村は、
銀のチェーンを会計に持っていく京介を見て、目を丸くして驚いた。
なぜチェーンしか買わないのかと好奇心と猜疑心を含んだ眼で質
問をしている中、

日下部だけは微笑んで頷いていた。

銀のチェーンに括り付けられたその指輪を見て、京介は眉を潜め、
僅かに視線をずらした。

何時までも、気にしたつてしようがない。

自分でも分かっている事だった。

【 そう……時間が解決してくれる 】
随分と便利な言葉である。

人は

辛い出来事に対して、乗り越えるべき力を手に入れる為、
時間を費やさなければならぬと言つ。

だが、それは乗り越えたのでは無い。

その実、その出来事を希薄な物へと変える為に。

その出来事が、乗り越える事が出来るだけの高さになる迄待つて
いるだけの事なのだ。

時間と言つ名の風に晒され、慰めと自己弁護と言つ名の雨に打た
れ、

目の前の巨大な砂山はやがて流され、只の盛砂となる。
そうなってからゆったりと砂場の小山に等しいそれを渡り、
乗り越えたと声高に叫ぶ。

誤魔化しとまやかしとも取れる。

でも、そうしなければ人は何時までも引き摺ってしまい、
引き摺る物が多くなってしまえば、そこから身動きが取れなくなっ
てしまう。

人はそんなに強くは無い、だが時間は有限こそすれ潤沢に存在す
る。

ただ時間が過ぎるのを指を啜えて待つしかない。

だが、京介は待てなかった。

時間が経つにつれ、京介の目の前には高い山が築かれていく。

友人に相談も出来ない、打ち明けられない。

解決できる手管も無い。

得体の知れないジレンマに苛まれていた。

テレビも付けず、雨音と時計が針を刻む音だけが茶の間を包
む。

京介は何も考える事をせず、只、座卓に突っ伏していた。

ふと柱に掛けられた時計を見ると、夕飯の時間を大幅に過ぎてい
た。

時間の経過を知って初めて、自分が空腹だという事を知ったのが
少し面白かった。

「そつだな……夕飯でも、作るか」

剣にでも言ったのか。

腰を上げ、台所に入る。
鍋に水を張り、夕食の支度を始めた。
……包丁の小気味良い音が台所に響く。

『……………』

その背中、茶の間では

京介の知らぬ内に黒いモヤが現れていた。
どこから湧いたのか、それとも最初から此処に居たのか……。
モヤは、集まりながら、散らばりながらを繰り返し、形を作る。
そして次第にモヤは確かな存在感を表し始め、黒色の肉塊へと代わる。

更に隆起と陥没を交互に繰り返し、更に肉感的になっていく。
子供が無邪気に油粘土をこねているかのような、他愛も無い造形。
まるでこれから何を作ろうか、何に成ろうかと悩んでいるかのような動きだった。

肉塊から二本の肉が伸びていく。
決して滑らかでは無く、いびつな動き。

二本の肉は動物の前脚のようなモノを形作った。
続いて、二本の肉が盛り上がり、後ろ足を作る。
前足と、後ろ足の間更に脚を。

脚からは爪と思われる鋭利な形状が作られる。
身体に相当する部分は、隆起と陥没を繰り返しながら随分低い位置まで落ちていく。

最後に、尾を作った。

肉塊は四本足では無く、六本足の犬のような身体になり、完成したようだ。

ただ、身体の大きさは犬のそれではなく、ライオンや虎と言った大型獣よりも大きいサイズである。

そして、顔には真っ白な布が貼られ、奇妙な紋様が描かれていた。

一週間前、この茶の間に現れたあの異形のモノと、見た目こそ異なる物の同様の特徴を持っていた。

「……………」

音もなく現れたそれに、京介は当然の如く気付かない。包丁がまな板と奏でる音は定期的に続く。

ケモノは畳に六本の脚を足踏みをするかのように踏みしめた。まるで、六本の脚が機能するか確かめているようだ。

ケモノは京介の息遣いに耳を傾け、顔を京介の居る台所に向けた。だが、ケモノの位置からは戸がある為京介の存在は確認できない。布の奥にあるであろう眼は、果たして見えているのか。

が、自分が気付かれて居ない事に気が付いたのか、直ぐに顔を剣の方に向けた。

布の奥から、微かにくぐもった笑い声のような音がする。

すると、その獣の肩からまた更に隆起する物が見られる。

その隆起物は肥大し、徐々に犬の顔のような造形を作り出し、くぱぁ…と肉食獣の口のように裂けた。

ゆっくりと剣に近寄る。

今や双頭の獣へと変化を遂げたそれは、エサを喰らうかのように、大口を開け、

茶の間に刺さっている剣に勢い良く齧り付いた。

その時、轟音が響く。

それと同時に剣から発せられた衝撃がケモノに襲い掛かる。

あの時、日下部が指輪に触った時に起きた音。
それよりも更に大きい音だった。

炸裂音にすら聞こえるそれは京介の耳にも入り、
(！……今の……)
すぐさま振り向いた。

衝撃で吹き飛ばされたケモノは身を翻し、開いていた襖に六本の脚をかけ、
頭を下にしてへばりつく。

吹き飛ばされるのを防いだのだろう。

肩にあった頭は、さっきの衝撃の為か、べろりと爆せていた。
引き裂かれた金属のような断面を見せている。

痛みからか、ただの神経反射なのか…。

爆ぜた頭は痙攣を繰り返し、うねり続けていた。

残された布の頭は肩の頭とは感覚や神経が別なのか、
剣を睨み付け、剣に対して威嚇を始めた。

ケモノは剣を、畏怖する存在だと決めたようだ。

だが剣は、その威嚇をもともせず何時ものように佇んでいる。

ケモノは、へばりつく事を止め、ふわりと飛んで座卓の上に降り立った。

座卓はケモノの重みを受け止め、ぎしりと悲鳴を上げる。

それは京介が茶の間と台所の境でそのケモノを発見し、立ち竦んだのとほぼ同時だった。

京介の頭の中は混乱する。

コイツは、この前の奴…なのか？

でも、この前のヤツは死んだはずだ。彼女の手によって。

となると、コイツはこの前の奴とは別のモノ？

コイツは……彼女は

今は電灯もついている為、酷く鮮明にケモノを見る事が出来た。

ケモノの身体は脈動し、鼓動を続けている事が見受けられる。

左肩には爆ぜた頭がまだうねっている。

この前のモノよりも、遥かに恐ろしく、おぞましく感じられる。

確かに、京介があの時見たのモノは、死んでいた。

実際に動いているモノを見るのでは大違いだろう。

京介は一週間振りの再会を果たした。

それが京介の本来望んでいた物では到底無かったが。

混乱の余り、手に持った包丁を、落としてしまう。

茶の間に、包丁が落ちた。とても大きい音とは言えない。

それまでケモノは威嚇をしながらも剣をなめすように見回していたが、

その音がした瞬間、ぱっ！と京介へ顔を向けた。

瞬間、肩の頭も痙攣を止め、再びこぶのような形状に戻り、また先程と同じ頭に戻る。

その頭も又、京介を睨む。

ケモノの目は、真紅に染まっていた。
その目から京介にある種の意味を送る。

『卯うご紅くナ』

ノイズとも、混声とも取れる複雑に入り混じった敵意や害意。
或いは純粹な食の欲求とも取れるそれを浴び、
京介の混乱した頭は、ケモノから送られた意思に対抗するように、
体中の全組織へ向けて一つの命令を伝達させる。

目を

目を合わせてはいけない。

目を合わせたその時、確実に良くない事が起こる。
今までに味わった幸福、今後幾度も訪れるであろう幸福。
その全てを帳消しにしてまでも足りない程の事が。

それは京介が今まで生きてきた中で、
まず第一に優先されていた本能だった。

曰く生存本能とも言われるそれは、
十数年ぶりに己が最大の役目を果たそうと奮起する。

その命令に従い、京介は頑なに目を合わせようとはしなかった。

ケモノは、京介を睨み付けていた。

が、つい…と無視するかのように又剣の方に頭を向けた。

ケモノにとって、京介など路傍の石のような物なのだろう。

京介には何も出来ないと見通したのか、自分の投げつけた意思が
伝わったと考えたのかもしれない。

ケモノは座卓の上で重心を低くして、飛びかかるような姿勢をす

る。

（な、何を……するつもりだ）

京介がそう考えた刹那、ケモノは剣に向かって飛びかかった。放物線では無く、直線に。

再び衝撃とあの音が響き、ケモノは弾き飛ばされ、天井に張り付く。

右前足が皮一枚を残して爆せていた。

だが、そのような事は構わないかのように、すぐさま飛びかかる。その一連の速度は、京介の目には映らない速度だった。

かろうじて、ケモノの姿が黒い風になった後、

剣から発せられる音と衝撃によって、

目の前のケモノが飛びかかり、弾き飛ばされているという事が予想される程度だった。

幾度も、幾度も。

飛び掛っては身体の一部を破壊し、壁、天井問わずにへばり付く、そして飛び掛る。

京介はそれをただ見ているだけだった。

見ている以外、何も出来るわけではない。

……もう、幾度目になるのか。

最早ケモノの身体は一見して獣とは言えない程に変形していた。にも関わらず、剣は一向に動ぜぬままだった。

【ケモノの狙いは……やっぱり、剣なのか。

だが、一見してダメージという物を負っているのはケモノの方で、このまま平行線を辿れば先に絶命するのはケモノの方じゃないのか

……】

京介は冷静にそう考える。

だが、その光景を見ている内に、京介の頭にはあるイメージが浮かび始めていた。

それは……苦悶の表情をするあの少女だった。

ケモノが剣に飛び掛る度、弾き返される度。

心なしか、剣の弾き返す音が弱まった気がした。

ケモノの飽くなき行動が、不幸にも身を結んだのか。

それに反して少女の苦悶の表情が徐々に強まっていくように見える。

そのイメージは、まるで少女が京介に助けを求めているようにさえ思えてきた。

何故……こんなイメージが浮かぶのか。

京介自身の中にある、後ろめたさが作り出したのか。

あの時、出来なかつた事をしるだけでも言っているのか。

今こそ、その時だとしても言うのだろうか。

彼女はもう存在しないというのに。

京介の中に、徐々に暗闇が侵食する。

ケモノの放つた何かが、京介の心にも影響を及ぼしたのか。

だが、その暗闇は京介の心をひどく落ち着かせた。

目の前の光景がばやけていく。

そうだ。

あの剣を抜く者が何時か現れるのかと思っていたが、ひよっとしたら、目の前のコイツなのでは無いか？

目の前のコイツこそが、この剣を抜くべきモノなのでは無いのだろうか。

やっぱり、あの指輪は前に現れた奴が落としていった物なのだ。この剣と関係があるのは、少女じゃなくてコイツだったんだ。

コイツは、この剣をどうにかして動かそうとしている。もしかするならば、ケモノはこの剣を動かす事を可能にするかもしれない。

最悪、抜く事も出来るかもしれない。

それが起きたとして、この家から剣が無くなるだけの事。それだけじゃないか。

例えこの家からこの剣が無くなったとしても、

自分のこれからの人生になんの意味も為さない事かもしれない。

……そうだ、そうに違いない。

平穏な毎日が訪れ、他の人と同じようにこんな考えを持つことも無く。

日常生活を送る事が出来るじゃないか

そう考えた瞬間、京介の身体は楽になった。

その場に京介はへたり込む。

甘美な想像が身を蝕み、気が抜けたのだろうか。

侵食した暗闇は、完全に京介を包み込んだ。

未だケモノは剣に飛びかかり続けている。

少女の苦悶に悶える表情は依然として増していく。

京介は、目の前を直視出来ずに、その叫びを煩わしくさえ思えてきた。

(止めてくれ、そんな顔をしないでくれ。俺は何も出来ないんだ……)

……

……

…

【……何も……出来ない？】

完全に包んだと思われた暗闇の中に、僅かな光明が見られる。その光明だけは暗闇に蝕まれる事は無かった。

【出来ないも何も……俺はまだ、何もしちゃいないじゃないか】

光明は、逆に闇を蝕み始めた。

暗闇は微かに抵抗を見せるが、光明はものともせず、暗闇を包み込んだ。

【コイツにも……彼女にも……何もしてない……していない……】
完全に暗闇を包んだ光明は、更に輝きを増していく。

「もう……あんな思いは……あんな思いだけは……」

京介は、歯を食いしばり、よろよると立ち上がる。

右手には、先程落とした包丁が握られていた。

「二度と……ゴメンだ……」

右手は、未だかつて出したことも無いような力で握り込まれていた。
手が白くなるほどに。

ぼやけていた光景は有りのまま鮮明に映る。

ケモノは、京介の言葉が聞こえたのか、座卓の上に載ったまま京介を見ていた。

包丁を持って、不確かな足並みのまま、京介はがむしゃらに走った。

「いや……めるオオオオ……!!」

包丁をケモノに突き立てようと無我夢中で飛びかかる。

が、ケモノは京介の動きに狼狽する素振りすら見せず、獰猛ながら冷静に見極めていた。

右腕を軽くあげ、京介に向かって薙ぎ払うように振る。

「ぐうッ……!!」

京介はその一撃を喰らいあっけなく吹き飛び、剣に背中を打ち付ける。

だが剣は弾き返す事も無く、京介を優しく受け止めたようにも見えなかった。

包丁は、ケモノの右腕に刺さっていた。

京介の乾坤一擲の一撃と言えた。

だが、京介の必死の一撃も空しく、包丁は不自然にずりりと抜け、床に落ちる。

ケモノ自身にとっても、包丁が刺さった事などなんの意味も無いようだった。

ケモノはゆっくりと、京介に対しにじり寄って行く。

対象を、完全に京介に変えたようだ。

まずは、京介を。

それからゆっくり剣を、とでも考えたのだろうか。

原型を留めていなかった肩の頭は、再びぎこちなく蠢き、元に戻る。

それに合わせて、あれだけ変形していた身体も元に戻ってしまう。

ケモノの目は、京介を睨む。

何処までも深い、獰猛な瞳。

二つの頭、四つの瞳に射すくめられた京介は、

「く……くあ……」

激しい痛みも手伝ってか、呼気と共に喘ぐような声しか出すことが出来ない。

どうにか立ち上がるうとするが、

ケモノの一撃によって京介の身体は感覚を取り戻せずに居た。

上半身のみを剣に預ける形で、京介の動きは止まる。

ケモノの右肩にも瘤が出来、頭を形作る。

異形のモノが、更に異形に変化していく。

ふとケモノの肩に新しく出来上がった顔が、笑ったように見えた。

京介に戦慄が走る。

(でも……一発位は……)

京介は、一つの決意を持った。

自己欺瞞と言われ、鼻で笑われるような行為。

京介は、自らこの剣の盾になる事を選んだ。

あれだけ活躍した生存本能は、何処かへ消えてしまったのか。

今や京介の頭の中には、恐怖心など微塵も無くこの剣を守らなければ

その思いで溢れていた。

(一発位は……アイツの攻撃を……受け止めてやる！)

ぎこちなく動き、剣を庇うような形に身体を動かした。

もし、京介の両親が生きていたのなら、

過剰なまでに京介に自分の命の大切さを説いていたかもしれない。親とはそういう物だ。

何よりも、子供の命を尊重する。大事に思う。

それは親として当たり前的事だ。

そうして人は自分の命を大事にする。

だが、京介の叔父が教えた事は、

「命の使い方は、人それぞれだからな。生きることとも生きること。死ぬ事も生きる事。

でも、死に損なう事と、生き損なう事は、案外辛いんだこれが…。

まあ、後悔だけはするなよ？京介」

これだけだった。

自室の椅子を揺らし、啜え煙草の煙で目を細めながら言っていた事を思い出す。

(結局、よく分かんなかったぞ。叔父さん……)

こんな時になんでこんな事を思い出すのだろうか。

こんな時……だからか。

(でも、後悔だけはしたくないってのは……わかったよ……)

ケモノも、京介の恐怖を煽る事に飽きたのか、

京介の味を想像して我慢出来なくなったのか、

右肩の口が京介に襲い掛かった。

京介は、目を瞑った。

「……………」

（ おかしい ）

京介は眼を瞑ったまま、不可思議に思った。

ケモノはあれだけの勢いで以って自分に襲いかかって来た。

だというのに、何時まで待っても牙が自分に突き刺さる感触や痛みが来ないというのは、

どういう事なのか。

ケモノが自分に襲い掛かる事を止めたのだろうか。

だが、そんな温情があるようには見えなかった。

瞼の裏には、飛びかかって来たあのケモノの顔が刻み込まれている。

それだけでも背筋が凍る。

それならば、もしくは…………

あのケモノは剣にあれだけの速度で体当たりをする事が出来るような奴だ。

死んだ事を実感できない程の時間で、自分は殺されてしまったのだらうか。

その可能性の方が高い。

（俺は…………死んだのか…………？）

ケモノに殴られた時の痛みも身体から綺麗さっぱり無くなっていた。

激痛で声も出ないほどだったというのに。

これも死んだから　なのか。

死んだ……この事実を京介は嫌が応にも受け止めなければならぬと悟る。

それと同時に、自分の友人達や、叔父に対して済まないという心が生まれた。

自分の身体がケモノの牙によってどのような物になったかはわからないが、

正直見るに耐えないような物になっているのは当然だろう。

ひよつとすると、身体はもう一欠片も残っては居ないかもしれない。

鴻神市は、近年珍しく治安は悪くない都市だ。

その中でも京介の住んでいるこの地域では、

血生臭い事件など、京介が引越してから聞いた事がない程だ。

そんな地域でこんな死体が発見されたら、

勿論パニックになるだろう。

となれば、在学学生が死んだのだから学校内にも自ずと話は広がってしまふ。

辻村を含め友人一同にも自分の死が伝えられるだろう。

無論……日下部にもだ。

彼等のショックを受けた顔が目に見えかぶ。

それに、叔父にも済まない事をしたと思う。

放任主義とは言え、幼少の頃から自分を育ててくれたのは叔父だ。

叔父が居たからこそ、自分は親戚をたらい回しにされる事も無く、おかげさまで曲がった事もしない人間に育ててくれた。

なのに、感謝の言葉すら満足に伝えちゃいない。

(こんな事になるってわかってたら、誰とも仲良くなんてしなけりや良かったな……)

叔父の言っていた「後悔だけはするな」という言葉が重くのしかかる。

自分の為に、悲しむ人が居る。

人が自分ごときのせいで悲しい思いをさせてしまうのは…忍びない。

堪らない。辛い。

いつそ嫌われ、死を喜ばれた方がまだマシかもしれないと考えた。

(皆……なんと言うか……「ごめんな……」)

京介は申し訳無さを感じ、静かに思った。

……。

……ふと、聞き覚えのある音が耳に入ってくる。

……雨の音。

それに、柱に掛けていた時計の音。

ここは…間違いなく自分の家、茶の間だ。

気が付けば、背中に剣が当たっている感触もあった。

加えて、自分の心臓の鼓動も感じる。

流石に心臓が動いているのなら、死んではいないだろう。
という事は、自分はまだ生きている。

(生きてる……みたい……だな……)

その事に京介は心底ほつとする反面、
大袈裟に色々考えていた自分が恥ずかしくなった。
顔が熱くなるのがわかる。

その時、耳に入って来る音の中に聞きなれない音が一つ混ざって
いた。

何か、肉を……。
肉を捏ねるような音。

自分が夕食のハンバーグのタネを作っている時に聞いた事がある。
正直、薄気味悪い音だった。
だが、その音も直ぐに止んでしまう。

一体目の前で何が起こっているのか。
京介は眼を開けるのが、少し怖くなった。
ケモノに射すくめられた時に感じた、目を合わせてはならないと
いう予感。

それがふつつつと蘇って来たからだだった。

(どうしよう……下手に目を開けたら……でも……)

開けない方が……怖い。

そう思って、微かに眼を開けようとしたが、
瞼の開け方を忘れてしまったみたいに眼が、開かない。

過度の緊張をしていたため、

身体もすっかり強張っていて、体中が軋む。

普段何気なく行っている無意識的な行動なのに、
どうも意識して行おうとすると、難しい。

眼を開く事くらい、何て事は無いはず。

何時ものように眼を開ければいいだけの事だ。

毎朝、目覚める時のように。

(落ち着け……ほんの少し……目を開けるだけ……)

ゆっくりと一回深呼吸をして、自分を落ち着かせた。

体からどうにか力を抜いて弛緩させようと試みる。

深呼吸で、少し力が抜けた感覚を覚える。

(よし……)

眼前からケモノが居なくなってくれている事を心から願いつつ、
恐る恐る瞼を細目にする。

……目の前は、暗かった。

京介は少し驚いたが、目の前が暗い理由はすぐにわかった。

目と鼻の距離に、ケモノが居た。

ケモノは自分に覆いかかるような形で、止まっていた。

その為、京介は蛍光灯のから見て陰になっていたからだった。

視線を少し上げると、ケモノの中央の顔にある布の下から、大きく開けた口が見える。

口内は真っ赤だった。

その鋭い牙を京介に突き立て、殺し、血を嚼り肉を貪る為に飛びかかった。

それなのに、何故か今は寸手の所で静止している。

どうも、その口は…自分を喰らう為に開けた口では無いように思えた。

京介はふと、視界の左上に見慣れない物がある事に気付く。

それは、腕のように見える。

腕のようには思っただのは、それが枯木のように干からびていたからでもあるし、

反面、手首と思しき部分には藍色の籠手のような物があつた為、腕なのかとも思えたからだ。

その籠手には…見覚えがあつた。

そして、その手には棒のような物が握られている。

今日の当たりになっている物は、京介にとって信じ難い事だった。

(ま……さか……)

もし、自分の記憶が正しければ、今日の前にあるこの腕は

(だって……そんな……)

自分の考えを、実証する為か、それとも否定する為か。

痛む首を動かして、その腕がなんなのか、誰の物かを確かめようとした。

腕は、丁度自分の左肩の上あたりに存在していた。

まずはゆっくりとその棒の先へと目を移すと、

その先はケモノの右肩にある、京介を喰らおうとしていた頭の顔面に埋もれていた。

顔はひしゃげ、埋没し、原型は留めていない。

声にならない叫びを上げているのだろうか、

自分が包丁で刺した時には何のリアクションも取らなかったあのケモノが、

今は口を開けて悶絶している。

今刺さっている何かは、余程そのケモノにとっては効果的なのだろうか。

改めてケモノを見ると、微かにがくがくと震えていた。

それから京介は、ゆっくりと後を振り向く。

ケモノを食い止めているこの腕の正体を知るために。

振り向いた京介の目に入った物は、

腕が、剣にはめ込まれた石の部分から生えていた光景だった。

「え……」

厳密に言えば、石の手前に魔方陣のような物が浮き上がっており、そこから腕が生えている。

魔方陣は青白く輝き、周囲にもそこから漏れる光が発せられていた。

光は螺旋を描きながら、閃光を疾らせる。

京介が目を見開いたと同時に、その光が強まる。

魔方陣もそれに合わせ、大きくなっていく。

すると、腕から肘……肘から肩……肩から上半身。

徐々にその腕だけ出していたモノの全身が魔方陣からゆっくりと、だが確実に現れていく。

その身体に纏っていたのは、藍色の鎧。
鎧の隙間から見えるのは、白い服。
たなびく白い髪。

穿たれた目。

木乃伊のように干からびた顔。

(ウ……ソだろ……)

京介は絶句した。

石から現れたのは、紛れも無く一週間前、京介の前から消え……
もう二度と合う事は無いと思っていた……

……あの少女だった。

石から……出て来た!?

京介が動揺するのも当然の事だった。

しかし、少女はこうして京介の目の前に現れた。

京介の目の前から消えた時と、何一つ変わらない姿で。

少女はケモノに刺した物を離さないように、剣の鐔を足場にして
跳躍した。

その為、ケモノは少女に押しやられるような形で、後ずさる。

少しでも痛みから逃れるように。

少女は器用にふわりと空中で体勢を変え、京介を庇うように降り
立つ。

そして持っていた棒を更にケモノに深く突き立てる。

ジュブブ……と耳障りの悪い肉の裂ける音がケモノの右肩から発
せられた。

ケモノの痙攣が更に強まる。

二つの口から、掠れた「ひゅう」という空気の漏れたような音がする。

少女は更に空いていた手を棒に添え、奥へと深く突き立てた。

ゴパツ！という音と共に、棒は右の頭を貫通した。

貫通した先から見えたのは、特徴的な刀身だった。

少女が持っていた物は、間違いなく一週間前に彼女が持っていた槍だった。

ケモノは、その全身を激しく痙攣させている。

開かれた口からは、唾液が垂れて畳に落ちる。

その身に走っている痛みにも、全神経が悲鳴を上げているのだろうか。

だが、突如ケモノの左肩にある頭が痙攣を止める。

一瞬その頭が霞んだかと思うと、右の頭は根元も含め消失した。

槍がケモノの肩から外される。

その瞬間、ケモノは後に飛び、少女との距離を計る。

少女は槍を両手で中段に構えなおす。

見た目とは反して、実に機敏で華麗な動きだった。

槍の先はそこかしこが黒く滲んでいた。

ケモノの欠片が付いた為か。

座卓を挟んで、少女とケモノは対峙する。

ケモノの左肩の口には、消えたと思われた右肩の大部分が銜えられていた。

槍から逃れる為に、自分で自分を噛み千切ったようだ。

噛み千切ったそれを左肩の口は躊躇う事無く丸呑みにする。

すると、右肩の消失した部分の断面が盛り上がり、肉が伸びて頭

を形作る。

復活した右肩の頭は先程とは少し形状が異なり、歪な作りになっていた。

その頭を二度三度振る。

頭の出来を確かめているのだろうか。

少女はそれにも動じる事無く、槍を構えたまま動かない。常にケモノの様子を伺い、槍を微かに動かすだけだった。自分から仕掛けようとはしないように見える。

ケモノもまた、少女の持っている槍を警戒しているのか、下手に動かず様子見をしている。じれているのか、時折尾が揺れていた。

ケモノと少女は対峙したまま動かない。

ケモノから凄まじい程の害意が放たれる。

少女からもまた、その害意に勝るとも劣らない剃刀にも似た空気をケモノに向けていた。

そのちりつくような緊迫感、少女の後に隠れているようになって京介にも伝わっており、額には知らぬ内に汗が浮かんでいた。

三分程経過した頃だろうか、

睨み合いに痺れを切らしたのはケモノのようで、体勢を低く構える。畳に脚を食い込ませていく。

先程剣に仕掛けていたあの攻撃を、今度は少女に行おうと言うのだろうか。

少女はそれを察知したのか槍を上段に構える。

飛び掛ってくるケモノに対してカウンターを仕掛けるつもりのもりだよだ。

後にいる京介には、少女が構えを変えた事と、微かに脚に力を入れて見えた事から、何かが起こる事を察知して身体を硬直させた。

ケモノは……跳躍した。

その刹那、少女の目の前に凄まじい勢いで飛んできたのはケモノでは無く、

二人の間にあつた座卓だった。

ケモノは、少女に向かって飛んだのではなく、その場で後方宙返りをするかのように回転し、後ろ足を座卓に引っかけ、蹴り上げたのだろう。

相手に虚を作らせ、更に視界を奪う事で、主導権を強引に握る事が出来ると考えたのか、状況を活かした環境利用と言える。

少女の視界は座卓で遮断された。

それでも動揺する事無く、飛んできた座卓の面に槍の柄をあてがい、手首の先を返す。

座卓はその力を全て殺されたかのように、物理法則を無視してゆっくりと方向を変えて畳に落ちる。

座卓をいなし、視界が開けると、ケモノは

居なかった。

先程と同じように凄まじい速度で周囲を飛んでいるわけでも無く、完全に茶の間からケモノという存在自体を取り除いたかのように消

えている。

ケモノは形勢が不利だと思い、逃げたのだろうか。

だが、この家から出て行っただと言っのなら、窓やドア、玄関の戸を開けるか、破らなければ逃げる事は出来ない。

そのような物音は一つたりとも立っていないから、一体どのような手段を用いてこの場から消えたのだろうか。

少女は、槍を構えたまま暫らく様子を見ていたが、

ケモノ自体がこの場から居なくなっている事を悟ったのか、ゆっくりと槍を降ろした。

京介は、事の顛末を見ることは出来なかったが、

少女から発せられていた空気が和らいだ事と、

ケモノが部屋から居なくなった事をなんとなく感じ取った。

戦いが収まった茶の間には、雨の音だけが鳴っている。

京介はおずおずと、様子を伺うように少女に呼びかけた。

「あ……あの……」

少女は京介の呼びかけに答えるようにゆっくりと振り返る。

京介の複雑な感情を含めた目と、

少女の穿たれた目が合う。

だが、少女の口が開く事は無かった。

京介は唾を一つ飲み込んだ。

が、この一連の件について聞かなければと思っていた。

ゆっくりと立ち上がり、全身の身なりを整える素振りをした。

そして、改めて少女と向き合う。

互いに起立した状態だと、少女は京介より頭半分ほど小さかった。

およそ、154〜5センチ位だろうか。

「あの、助けに来てくれて……その、ありがとう」
まずはお礼をと、京介は命を助けてくれた事について感謝を告げて頭を下げた。

聞こえているのか居ないのか、
それとも彼女には言葉が通じないのか……少女は無反応だった。

「えと……その……後……そ、そうだ！これっ！」

京介は慌てたように剣に掛けていた指輪を取り、掌に置いて少女に向ける。

「これ……君が居なくなった時に、見つけたんだけど……これ、君の……だよな？」

少女は、指輪と京介を見比べるように交互に視線を映す。

そして……少女は微かに頷いた。

その瞬間、京介の心に安堵と、なんともいえない嬉しさが込み上げてきた。

(やっぱり……これは彼女のだったんだ！)

少女は剣から現れた。

そして、この剣と似ている指輪の所有者という事がわかった。

ついに剣の手掛かりを手に入れる事が出来たという事と、
彼女にこうして又会えたという事が京介を感無量にさせた。

「良かった！これ、やっぱり君のだったんだ！じゃあこれ、お返しします」

と少女に指輪を返そうと手を差し出した。

少女は、ゆっくりとその枯枝のような指をその指輪へと伸ばす。

彼女が指輪に触れた、と思った瞬間、
指輪の中に嵌めこまれている石が光り輝いた。

「うわぁっ!!」

京介はその眩しさに目が眩む。

京介の掌に置かれた指輪からは魔方陣が現れ、そこから迸る螺旋状の光が少女の身体を包んだ。

螺旋の光は次第に、少女の周りを不規則に周回し、少女の身体へと入って行く。

少女の身体はその光の滲入に反応するかのように、手を指輪に重ねたまま大きく仰け反った。

そして、少女の身体は変貌する。

枯木のような腕は、肉が戻り、瑞々しい肌が表面を覆う。

指の一本一本、爪に到るまでが、新たな命が染み込んでいくかのように、人のそれへと変わって行く。

顔も、木乃伊のような顔から一変する。

張りがあり、艶のある歳相応以上に若々しい顔に変わって行く。
穿った眼窩には、目が現れた。

頬は赤みがさし、彼女の身体に血潮が流れている事を証明させる。
螺旋の光の中、白髪と思われた髪はその量を増し、

その光を反射する艶やかな青みが入った白銀の髪へと変わる。

人が木乃伊になっていく過程を逆回しにしたかのような光景。

つい先ほどまで、木乃伊に等しかった少女は、実に美しい少女へと変貌を遂げた。

京介はその幻想的な一部始終を、光に目が眩みながらも目を離す事が出来なかった。

光の奔流は今だ京介の持つ指輪から放たれ続けられている。次第に螺旋は大輪の華が咲き誇るかのように光を変えた。

光の中、仰け反っていた身体は徐々に戻り、うつすらと少女の目が開く。

双眸に輝く濃藍の目には、おぼろげな中にも高貴な光を秘めていた。

それは京介の16年と言う年月の中で初めて見るような光。彼女の目と、京介の目が再び合う。

次第に、魔方陣から放たれた光は全て少女の中へと吸収された。指輪からも、光の放出は収まったようだった。

茶の間は普段の平穩をようやく取り戻した。

少女は、京介と手を重ね合わせたまま、静かに京介を見つめていた。見抜かれるような視線を受け、京介は動揺した。

「き、君は……一体……」

が、その目はゆっくりと閉じてしまう。

そして、京介に向かって倒れ込む。

「わっ……」

その身体を京介は受け止める形となった。見た目相応の重みを京介は感じる。

少女の綺麗な横顔が丁度京介の胸に埋もれる。

突然の事に、京介は動揺する。

まさか……また消えてしまっくんじゃないのか!?

「き、君！もし！大丈夫か!？」

また、俺の目の前で消えてしまったら……。

「おい！おいつたら！返事を……返事をしてくれよ！」

大声を上げて、少女を呼ぶ。

少女の華奢な両肩を掴んで揺さぶる。

焦る京介の耳に、

「すう〜……すう〜……」

少女の寝息の音が入った。

「……は?」

「すう〜……すう〜……」

「も、もしもし?」

「……すう〜……くう〜……」

良く良く見ると、実に気持ちよさそうな顔をして、少女は眠ってしまった。

「寝てるのか……はあ、驚かさないでくれよ……」

京介の慌てた声も、安堵の声も少女には届いては居ないだろう。
取り合えずは安堵の溜め息を吐く京介。

だが、一週間前と同じように、散らかった茶の間を見て、
さつきとは意味合いの異なる溜め息を、深く、深く吐いた。

斬魔の剣 十畳間にてゝ6・クアン

気が付くと、京介は荒野に立っていた。

どこまでも果てしなく、建物も、道も無い荒野。

空は、血塗られたような紅と、深い紫を混ぜた色に彩られている。その空に反映するかのように、大地も血に染まったような色になっていた。

空に浮かぶ雲は太陽を隠しながら、速く流れて行く。

一刻も早くこの荒野から逃げてしまいたいと思える程に。

地面には草がちらほらとあるだけ。

まばらに生えている木はどれも枯れており、時折風に晒され枝を軋ませる。

生と言う物を微塵も感じさせない虚無の世界。

今空にある太陽が沈んでしまえば、もう二度と朝日として上る事が無いような世界。

その世界に、京介はただ立っていた。

左右を見回しても、何も無い。

京介の足元の草が足を撫でる。風の音が耳に痛い。

突如、京介の後ろから突風が吹いて京介を襲う。

吹き飛ばされ、地面を転がり這いつくばる。

風が止んだ事を感じ、地面に這ったまま目を開ける。

ふと、砂塗れの自分の手に何かを握っていた事に気がつく。

手を開いて握られていた物の正体を見ると、指輪がそこにはあっ

た。

(何で……)

立ち上がるうと顔を上げた京介の目の前に、雪が舞い降りた。舞い降りる雪の数は瞬く間に増え、空を見上げると空一面に雪が降っている。

紅い空に、雪が。

それは京介の肩に、頭に降り注ぎ、触れると同時に仄かに弾け、消える。

地面にも積もる事無く。

京介があの日茶の間で見た光景と、どこか似ている世界。

突風が吹いてきた方向を見ると、小高い丘がある事に気付く。

京介は丘へ向かう事にした。

少しでも高い所に立ち、より遠くを見渡せる場所に移動しようと思っただけだった。

周囲を見回しながら、足早に歩く。

その丘の向こうが見える位置にまで歩くと、この場所から相当離れている向こうに、

何か…巨大な黒い塊が見えた。

京介は脚を早め、丘の天辺に立ち、その塊に向かい目を凝らす。

その塊は、ぞぞと蠢き、時折飛び散っているように見える。

黒い塊の中に、白い物がちらほらと現れては、蠢きによって消え

る。

その塊から飛び散った物が京介には、人間のように見えた。

その黒い塊の中央は円のように空洞になっていた。

その空洞には、一人の人間が立っていた。

整った顔立ち、高貴な光を放つ濃藍の瞳。

白銀の長い髪、藍色の鎧。

それは、見紛う事無くあの少女だった。

この距離でそんな事は判断しようにも無いのに、なぜか京介には彼女だという事がわかった。

さつきからまるで自分の目が望遠鏡にでもなったのかのように、少女の表情すらズームアップされ、見えてくる。

その為、黒い塊の正体も知ることが出来た。

吹き飛んだ人間……その顔には白い布が貼り付けられていた。

奇妙な紋様も見える。

京介は、それがあの異形のモノだという事を知り、

黒い塊は、異形のモノ達が数百、数千という膨大な数で犇んでいる為、そう見えていた事を知る。

人のような形をしたモノ、人とは到底呼べないような形をしたモノ。

大きさ、形問わず、様々なモノが集まり、密集し、塊のようになっていた。

その内の何体かが少女に襲い掛かっている。

少女は、剣を持っていた。

その剣は、茶の間に刺さっているあの剣だった。
抜ける事は無いと思っていたあの剣を、今手に持っている。

少女は鬼気迫る表情でその剣を構え、異形のモノがひしめく一角
に向かって振り下ろす。

少女の一振りで、数十体という異形のモノが切断され、吹き飛
んだ。

吹き飛んだモノは蒼い炎に包まれながら中空で灰へと化する。

それを追いかけるように直ぐに別のモノが吹き飛ばされ、その灰
を飛散させながら自らもまた灰へと変わっていく。

その中空に浮いた灰を掻き分けながら、又別のモノが少女へと襲
い掛かる。

異形のモノ達は手を刃のように、または鋭い針のように変化させ、
少女に攻撃を仕掛けるが、その全てを少女は華麗に避け、反撃を加
えて行く。

少女はその身には扱いつらいであろう長剣を縦横無尽に振り、
襲い掛かる異形のモノを凄まじい速度で

斬り、貫き、薙ぎ払い、抉り、裂き、殺して行った。

少女はたった一人で、尋常では無い数の異形のモノと闘っていた。
雪が降りつづける紅い荒野の中、数千の害意を一人で受け止めな
がら。

京介は固唾を飲んで、ただその戦いに見入っていた。

その為、京介の手に握られた指輪が淡く光っている事にも気が付
かなかった。

塊の中、幾体かのモノが示し合わせたかのように飛び上がり、上から少女に向かって落下する。

少女はそれを察知したかのように見上げ、飛んだモノよりも高く跳躍する。

空高く飛んだ少女は、両手で持った剣を振り上げ、目を閉じる。剣を二度三度振り回すと、剣に蒼く白い光が集まっていく。

地面に居た異形のモノが一斉に彼女を見上げる。

少女は気合と共に、塊へ向かって落下していく。

剣に帯びた白い光は残光となり、京介には流星が落下するように見えた。

その流星を迎え撃つかのように、異形のモノも飛び上がるが、流星の近くに寄っただけで途端に掻き消えた。

更に加速しながら少女は地面に剣を突き立てた。

その瞬間、剣に集まっていた青白い光は地面を反射し、

幾本もの巨大な牙が地面から生えたかのように空高く伸びて行く。

黒い塊は一斉に吹き飛び、蒼い炎に包まれる事無く消失した。

その衝撃は、離れた丘にいる京介にまで及び、京介の前髪がふわと浮いた。

黒い塊は、少女の攻撃によって八割方まで減った。

だが、黒い塊は一度は減ったものの、

直ぐに減った分を補って余りある程に、

地面から、中空から現れ、再び元居た数以上に増えて行く。

剣はまだ光を帯びており、少女が横薙ぎに払うとその方向にいた

大量のモノは消失した。

だが、その逆方向では、少女が今の一撃で殺しただけのモノが増えていた。

例え一振りで数十を殺してたとしても、異形のモノは殺した数以上増え続ける。

少女の一方的な塵殺ちんころが行われているのに、勝利とは程遠いように思える戦い。

ただ少女の体力と精神のみが徐々に、だが確実にすり減らされていく戦い。

それでも少女は必死に剣を振り、襲い掛かる異形のモノを殺していった。

京介は、少女の勝利を願いながらそれを見ているだけしか出来なかった。

ふと、その増え続ける黒い塊の周囲に、異形のモノとは異なる人影を見つけた。

何人が……人が立っている。

性別も、年齢も、服装も分からない。

京介には何故か彼等の姿だけは見えなかった。

だが、少なくとも……三人。

黒い塊を三角形に囲む形で立っていた。

すると、三人の内の一人在らりと優雅に片手を上げた。

その瞬間、京介に未だ嘗て味わった事の無い怖気が襲う。

全身の毛が一瞬で逆立つ。

(危ないッ！逃げろ！！)

京介は少女に向かって叫んだ。

……が、京介の声帯は機能する事を恐れたか、声が出る事は無かった。

京介は何度も、喉から血が出る事も厭わずに叫び続けるが、少女には届かない。

京介の必死の叫びを嘲笑うかのように、上げられた手はゆっくりと下げられる。

その刹那、剣を握っていた少女の手から先が 消失した。

少女が呆気に取りられた表情を浮かべて落ちて行く手を見る。

剣は少女の手を付けたまま、地面に刺さった。

それをもう片方の手で持とうとした瞬間、その手は黒い刃に貫かれていた。

異形のモノ達は、それを見逃さなかった。

一瞬にして黒い塊が少女を覆う。

少女は必死に、自分に襲い掛かるモノに抵抗しようとしたが、それも叶わなかった。

異形のモノ達の刃が、少女に一斉に襲い掛かる。

その刃は少女の、

腕を

掌を

脚を

膝を

肘を

腹を
胸を
肩を
首を

次々に貫いた。

~~~~~ツツツ!!)

京介はその光景を見て、悲鳴を上げる。

心の底から、深い悲しみと絶望を搾り出すかのように。

指輪の光は、握られた京介の指から零れている程強くなっていた。

異形のモノは、全身を貫かれた少女を天に向かって担ぎ上げる。

まるで世界の全てに見せ付けるかのように。

礫にされた少女の目からは光が失われていた。

口からも血が流れている。

貫かれた刃に、少女の鮮血が滴り落ち、異形のモノを染める。

少女の落とした剣を取り囲むようにしていた異形のモノは、

互いに押し合っていて、一本の道を作っていた。

その開けられた道を、一人の人間が悠然とした足取りで剣に向かって歩いていった。

あの三人の内の一人名のだろうか。

その姿は暗く、どのような人間なのか、わからない。

人間は剣の前で立ち止まり、礫にされた少女を見上げる。

暫し少女を見つめた後、その人間は拍手をした。

ゆつくりと、間隔を開けて。  
一回、二回……三回と。  
紅い世界に拍手の音が響く。

死んだ少女を労ってなのか。

だが、彼女の魂すら侮辱しているようにしか思えない礼を欠いた拍手であった。

やがて拍手を止め、その人間は少女の手を剣から引き剥がし、乱雑に投げ捨てた。

少女の手は宙を舞い、荒野に転がる。

そして、ゆつくりと剣の柄に手を掛けたその時、  
少女の目に一瞬光が宿り、口から何かを取り出した。

それは、京介が持っている指輪と全く同一の物だった。

剣から白い閃光が、迸る。

その光は異形のモノを包み、その周りに居た人影を、  
剣に手を掛けた人間を、荒野を、空を、この世界を白く染めた。

京介の手の中ある指輪も、それに同調するように爆発的な光を放つ。

その光の中、京介の網膜に映ったのは、  
徐々にその美しい体から、木乃伊になっていく少女だった

「うああああああああああっつ……！！！！」

京介は叫びながら起き上がった。

「はぁー……はぁー……はぁー……」

体中から大量の汗が流れ落ちている。

シャツも、寝巻きすら雨の中を歩いたかのようにびしょ濡れだった。

心臓が痛い程に動悸を繰り返す。

深呼吸を何度も繰り返して、自分を落ち着かせる。

京介が居た茶の間には朝日が差し込んでいた。

道路には、車の音も聞こえる。通勤に向かう車なのだろう。

「……夢か……」

夢にしても、あそこまで鮮明な夢なんて見たことが無かった。

京介は右手で汗だくになっている自分の顔を拭き、茶の間の一角を見る。

そこには、敷かれた布団に、寝かされていた少女が居た。

鎧等の外し方が分からなかった為、申し訳無いが鎧を着けたまま寝かしている形になっている。

わずかだが寝息も聞こえており、それに合わせて布団が上下に動いていた。

少女が消える事無く、眠ったままなのを確認し、京介は心底安堵した。

だが、脳裏には夢で見た少女が無残にも　な様が浮かんでは消える。

京介は首を振って、  
「たかが夢じゃないか……」  
と呟いた。

そう、夢だ。

きっと、今までの出来事が頭の中でごちゃ混ぜになって、  
わけのわからない夢を自分に見せたんだろう。

京介はそう思うことにした。

よろよろと立ち上がり、台所でコップを手に取り蛇口を捻る。  
コップに並々と注がれた水を、一気に飲み干す。

「んぐ……んぐ……はぁ……」

水分補給が出来た事で、身体も随分と楽になった感じがした。  
……と、自分の左手に握られたコップ越しに、何かが付いている  
のを見つける。

「……ん？」

と左手を見てみると、京介は危うく持っていたコップを落としか  
けた。

左手薬指に、あの指輪が嵌っていたからだった。

「え！？な、何で？」

確か……これは少女の枕元に、槍と一緒に置いた筈。  
置いた事もしっかり覚えている。

それが、なぜか今は自分の指に嵌っている。

寝惚けて……自分で嵌めてしまったのだろうか。

……馬鹿な。

大体、あの指輪は自分の指に収まるサイズでは無いはずだ。

幾らなんでも人様の物を盗もうと言う気は無い。

外そうと指輪に爪をひっかけて、力を込める。

が、一向に外れない。

指輪は隙間無く嵌っているというよりも、収まっているような感じさえ受けた。

その為、指輪が指に嵌っている感覚が一切しなかったのだ。

どうにも外れない事に気付いた京介は、次第に焦り始める。

(昨日、あの少女はこの指輪を自分の物だと頷いていた。

昨日の今日でこれじゃあ…泥棒じゃないか)

「落ち着け……：そういえば、確かセツケンを使って滑らせれば取れるって聞いたな……」

流しに置いてある石鹸を手に取り、左手に擦りつける。

直ぐに泡立ち、すべりが良くなってきた。

「これで……大丈夫かな……」

と、必死に指輪を外そうとしている京介の後ろから

「……もし？」

「うわあっ!？」

呼びかける声があった。

京介がびっくりして振り向く。

すると、何時の間にか起きたのが、台所の入り口に少女が立っていた。

「……」

少女は、妙な声を出した京介を若干訝しげに見つめていた。暫しの沈黙の後、京介は慌てて体裁を取り繕う。

「や、やあ……おはようございます」

ぎこちない笑顔を浮かべながら京介は挨拶をした。

何時の間に？京介は唖然とした。

ふと少女の肩越しに布団を見ると、綺麗にぴっちり畳まれてい

る。あの短時間でそんなことする時間なんてあったらどうか……？

それよりも……彼女が起きてしまった。

なんとかばれない内にコイツを外さなくては

少女の目に映らないよう両手を後手にしながら、どうにか指輪を外そうと京介はもがいていた。

少女は改めて口を開く。

「どうも、有難う御座いました。寝所を用意して頂いた様で」

透き通るような、凜とした声だった。

生真面目さと真摯さを感じられるきりつとした表情で礼を告げる少女。

見た目の感じとは異なるギャップを持った懇切丁寧な口調に、思わず京介も敬語で返してしまふ。

「あ、いえいえ！そ……それより身体の様子は……大丈夫ですか？」  
「ええ、お陰様で」

確かに、昨日の事などまるで無かったかのように、健康その物と言った感じだった。

木乃伊の姿の時から想像もつかない。

とりあえず、少女の身体に悪いところは無い様で、京介は安心した。

「それは良かったです。えと……」

そういえば、少女の名前を聞いていない事に気付いた。

少女もそれを察したのか、

「これは失礼しました。クアン＝リー・リムグラフと申します。以後、よしなに」

と挨拶を付け加えて自己紹介をする。

自らをクアンと名乗った少女。

正体不明の少女から、クアンという名前の少女になっただけでも、京介は大きい安心感を得た。

「どうも、ご丁寧に。えと、こちらこそ宜しくお願いします。リー

リムグラフさん」

「クアンで結構ですよ」

「わかりました、クアンさんですね。えと、俺は名後京介って言います」

「なしり……京介。名後京介……」

少女は口の中で転がすように繰り返した。

発音しづらいのだろうか、やけにゆっくりと京介の名前を呟いている。

「あの、クアンさん？」

「いえ、なんでもありません。所で京介、一つお聞きしても宜しいですか？」

「あーは、はい、なんでしょう!？」

急な質問にどきりとする京介。

「ええ……その指輪、出来る事なら返して頂きたいのですが」

向かい合っているのだから、少女には見えない筈なのに、少女は京介の手を見通しているかのように見つめながら言った。思わず後手にして外そうとしていた両手が止まる。

「……え、あ……その……」

「隠さずとも、見えてますよ」

京介は観念した。

だが、盗人と誤解されるのはたまらない。

左手を恨めしそうに見ながら少女に弁解した。

「す、すいません！取る気なんてこれっぽっちも無くて。

何時の間にか指に嵌って……何故か引っ付きちゃったみたいに取りなくて、その」

どうにか誤解を解こうと四苦八苦する京介に、クアンはすたすたと近づく。

怒られると身体を強張らせた京介の左手を取って、

「ちよつと、宜しいですか？」

とクアンはまじまじと指を調べる。

クアンの、剣を握っているとは思えない程細く、節くれも見られない指が自分の指に絡み、動く様を見て京介は不謹慎にも心臓の鼓動を早める。

どこか気恥ずかしくなり、京介は視線をずらす。

だが、そんな場合じゃない事も重々に承知していた。

クアンは、まるで指輪に語りかけるかのように何か呟いていた。その言葉が不思議な言語だったため、京介にはクアンが何を言っているのかはわからなかった。

「では、ちよつと失礼します……」

「え？あ」

おもむろにクアンは指輪を掴み、力任せに抜かんとする。

「~~~~~ツツツ!!!!!!」

京介は悲鳴を上げた。

「あくだだだだだ!!」

さっきの呟きは一体なんだったのか、見た目の繊細さとは全く異なり、力技を仕掛けてきた。

「うん。やはり、取れませんね。ではもう少し……」

更に力を加える。

「いででで!!取れる!取れる!」

「え?取れますか?それじゃあ……ふっ!」

京介の必死の叫びを、違う意味に捉えたようだった。

「そ、そうじゃなく……あんぎゃあああ!」

指が取れてしまうのではないかという激痛が走る。

あの槍を軽々と持ち上げる程のだから、その筋力たるや……

推して知るべしである。

クアンは、自分の力でも無理という事がわかり、すつと力を抜く。

「……成る程……そういう事ですか……」

しれっとした顔で自己解決したクアンに背を向け、  
京介はやっと開放された傷む指を庇い、目に涙を溜めて少し怯えた  
表情を浮かべる。

(見た目に反して、なんて事をする人なんだ……)

が、続けざまにクアンは信じられない事を言い出した。

「しかたありません……ならば、その指を切り落とすしか無いです  
ね……」

その言葉を背中で聞いて、ぎよっとする京介。

口調からして、恐らく本気なのだろう。

クアンが一步、二歩と此方に近寄って来る。

だが、それから直ぐに、

『ぐう』

というなんとも拍子抜けな音が台所に鳴る。

……きよとんとする京介。

(ん？今は……腹の虫って奴……)

きこちなく京介は振り返る。

クアンは先程までと同じ表情だったが、目を逸らしあさって  
の方向を見ていた。

音の主は方向からして明らかにクアンなのだが。

おずおずと京介は口を開く。

「あの、クアンさんい」

「何か？」

ぴしゃりと締められた。

室内に、気まずい空気が流れる。

「いえ、確かに今お腹の鳴るお」

「聞こえません」

「……」

「……」

京介は、クアンを見ながら妙な親近感を覚えた。

あれだけの化け物相手に一歩も引かずに相手をしていたような人間が、  
人の指を切るうって言った直後に腹の虫を鳴らす。

それを悟られまいと、さも自分は腹の虫なんて鳴らしていないと  
振舞っている事、

それがまたクアンの人間性とも相まって可笑しくなってきた。

京介は一つ咳払いをして、

「えと……クアンさん、ご飯にしてもいいですか？」

とクアンに窺いを立てる。

「……」

クアンは無言のままだった。

「すみません。俺、腹減っちゃって。とりあえず、ご飯を食べてからこの指輪の事とか、

他にも……色んな話を聞く事にしたいんですが、それでも良いですか？」

済まなそうに笑いながら京介はクアンの返事を待った。

「……そうですね、その案には私も賛成します」  
再び口を開き、京介に返事をした時も、  
クアンはまだそっぽを向いていた。

斬魔の剣 十畳間にてゝ 7・取引は、計画的に

「えと、お待ちどうさま」

京介が調理を開始して数十分後。

クアンの目の前に並べられたのは、

朝食としては、しかも食べる人数が二人では些か作りすぎという位の量だった。

勿論、京介自身こんな量を食われる程健啖家ではない。

クアンも、見た目にはどうにも小食の類に入ると思われる。

だが自分以外の人間に料理を振舞うという事が、

去年の盆に叔父が帰ってきた時以来な為、随分と気張ってしまったのだ。

それが、クアンのような少女ならば止む無しだろう。

もしくは、クアンの腹の虫が本当に心の底から食べ物欲しているように、

聞こえたせいかもしれない。

先程まで朝日を覗かせていたのに、今では雨音が少しずつ目立つようになつてきた。

クアンは座卓の前に用意された座布団の上にと座り、ぴしりと正座をしていた。

視線を正面に向け、決して京介の方を見ずに居たその姿は、実際隙の無い印象を受ける。

そして槍は手元にしっかりと置かれていた。

という事は、常に臨戦体勢をと考えているのだろう。

が、ほかほかと湯気を立てる二つのお椀が最も手前に置かれた時、その姿勢は初めて崩された。

片方の瀬戸物には、白い粒状の物が炊き上げられた物がこんもりと盛られている。

一粒一粒が艶を放ち、湯気と共に香る独特の匂いが鼻腔をくすぐる。

もう片方の木製の椀には、薄い赤茶色のスープが入っており、中には白い四角形の固形物と、深緑の海草が浮いていた。

これもまた食欲を刺激する匂いが漂っている。

いわゆる日本人の朝御飯。

中でも最強との呼び声が高いこの二品に立ちふさがれたクアンは、暴れていた空腹感が最高潮に達したのだろう、

背筋を崩しはしなかったものの、目線はしっかりとお椀を捉えていた。

「……なんか、済みませんね」

「？」

クアンと真向かいに座った京介の、申し訳無さそうな言葉に初めて顔を上げるクアン。

その言葉の意図が汲めないようだった。

「いや、出来る事ならパンを用意したかったんですが、生憎切らしちゃってて」

確かに、クアンは外観からして外国人にしか見えない。

髪の色、目の色、顔立ちからもそう見て取れる。

何人かはわからないが、少なくとも日本人ではないだろう。

となれば、米よりはパンの方が好まれるだろう……が、

「いえ、お構いなく」

クアンはやんわりと首を振る。

「では、戴きます……の前に」

クアンは目を閉じ、両手を頭にかけた。

『カチャ……』と頭に被っていたメットを外す。

メットを自分の傍らに置き、少女の顔が露になる。

メットを被っていた時とは違い、戦士然としていた雰囲気から、一人の少女が醸し出す空気へと変わった。

「食事時のマナーとしては不適當でしたね。それでは、戴きます」

改めてクアンは食事を開始した。

京介もそれを追うかのように両手を合わせ、食事を始める。

「……」

クアンはすらりと箸を取る。

箸の持ち方も、驚く事に文句の付け所も無い程に様になっていた。

左手で椀を持ち、右手に持った箸の先端で飯を掬う。

その動作一つとっても綺麗な物だった。

口を開け、飯を口に運ぶ。

……ほど。

「……」

飯は、箸から落ちて再びお椀へと戻ってしまった。  
クアンは表情も変えず、箸の先とご飯を交互に視線を交わす。

「……」

なぜ落ちたのかが理解出来ないのだろうか、  
再び箸を駆使してご飯を掬う。

……ほど。

が、再び落ちてしまう。

「む……」

流石に少し表情を曇らせるクアン。

ふと、向かいに座っている京介を見ると、不安げに自分を見ている事に気付く。

「あ……ちょっと待ってて下さいね」

京介は慌てたように立ち上がり、台所へと向かった。

その姿を何の気なしに見送っていると、

ものの数秒も経たずに戻ってきた京介の手には、スプーンが握られていた。

「すみません、気が付かないで。箸よりも、こっちの方が……」

「いえ、結構です」

折角の京介の施しを丁重に断った。

「だけど、スプーンの方が食べやすいかと」

その言葉に、即座に反論をする。

「元来、この二本の木を削った物で食べるのが慣わしなので無いのですか？」

私に合わせて、慣わしを蔑ろにするのは良くない事だと思います」

「まあ、慣わしってどうか……」

「心配は無用です、私に構わず食事を続けて下さい」

京介は、その言葉に押されおそおそと食事を再開した。

だが、客人が一向に食べれていないのに、自分ばかり食べるというのも申し訳無い物で、なかなか箸が進まない。

一方クアンは、食事をしている京介を見つめていた。

京介が、朝食の献立を一通り食べる様を観察した後、手に持った箸とご飯を交互に見据える。

京介の食べ方を真似するかのように、箸でご飯を持ち、そろそろと口に寄せる。

ようやく、クアンはご飯を口にする事が出来た。

もぐもぐ……とじっくり味わうように口を動かし、「ぐく……と飲み込む。

「……ん」

何かを納得したかのように微かに頷いた。

ほんの僅かだが、顔付きが和らいだようにも見えた。

京介は、無事にクアンがご飯を食べる事が出来たのを見て、安堵して自分の食事に専念する事にした。

静かな食卓に、箸の音だけが響く。

互いに言葉を交わさない物の、何処か居心地の良い時間だと京介は感じられた。

それは多分、このように人と食卓を囲むのが本当に久しぶりだったからなのだろう。

京介が暫し感動をしている、

そんな間も無い内に、クアンの飯茶碗が空になっている事に気付く。

クアンは、只空いた茶碗を見つめていた。

顔は相変わらずだったが、何処か物足りなげに見えた。

「あの……御飯。お代わり、ありますけ  
「戴きます」

クアンは速答し、京介に向かってお椀を差し出した。

そこから先は、凄い物だった。

京介が作りすぎたと思っていた程の量。

二人で食べるには流石に多すぎるだろうという量を、殆どクアンが平らげる形になってしまった。

がつつと食べるわけでもなく、良く噛んでいるように見えるのに、

すっすつと無くなって行くものだから、

京介が気付いた時にはもう……という感じだった。

「ご馳走様でした」

朝食を終え、クアンは満足げに礼を述べた。

京介は、綺麗になった食器を全て流しに運ぶ。

「いえいえ、お粗末様でした」

食器を洗いながら背中では京介は答えた。

綺麗に残さず食べて貰えれば、作った者としてこれ程嬉しい事は無い。

また、残さなかったという事は、少なくとも味的には不満は無かった事が窺える。

京介が洗い物に勤しんでいる時、

クアンは茶の間内を天井、壁の隅から隅まで、見落とす事無く見回していた。

そして最後に剣を見た後、ゆっくりと目を閉じた。

「っと……すいません、お待たせしました」

暫らくしてから京介が茶の間に戻って来る。

「さて、それでは京介の空腹も満たされた事ですし……本題に入りましょうか」

京介が向かいに座った瞬間、クアンがゆっくりと目を開けた。

途端にクアンから放たれる空気が変わる。

朝食時と同じように向かい合ってはいるが、

先程とは打って変わった空気に、京介も佇まいを直した。

一時、室内を雨音のみが占領する時間が出来た。

その中で互いを見つめるばかりだったが、

「まず、約束をして下さい」

口火を切ったのはクアンだった。

「約束、ですか？」

「言えない事は、こちらは言わないという事でも構わないか……それだけです」

「……言えない、とは？」

「話す必要が無い。と言い換えた方が良くも知れませんが、それが嫌だと言うのなら」

話す必要は無い……。

京介はその言葉に納得する反面、少し反感も覚えた。

とどのつまりは、部外者なのだから、知る必要の無い事も当然あるだろう。

とは言え、何一つ肝心な事を教えてくれなかったら、何も解決しない。

だが、反発して何も教わらないよりはマシだった。

この時点で京介は無知にも等しいのだから、対等な条件など望むべくも無い。

「……わかりました」

真っ直ぐクアンを見つめ頷く京介。

クアンもまた、曇り無い眼で京介を見返していた。

さて……一体何を聞けばいいのだろう。

聞きたい事は山ほどある。

剣の事、指輪の事、ケモノの事、目の前の少女の事。

どの話から聞いても、全ては深く絡み合っていると京介は考えている。

だが順位を付けるのなら、名後家に十年という年月の間刺さり続けていたこの剣。

この剣の出自、由来をまず聞いた方が良く判断した。

「そうですね。まずは、剣の事をお願いします」

「あの剣の名は、斬魔刀と言います。嘗てはエスプリンガーと呼ばれたり、隠者の鎧とも呼ばれていたそうですか」

斬魔刀……。

随分と大仰な名前だと京介は思った。

様々な呼ばれ方がある……という事は、この剣は様々な人間の手を渡ってきたという事なのだろうか。

そして、今はこの家に刺さっている。

それは一体どうしてなのか。

京介は一番聞きたかった事を尋ねた。

「じゃあ、その斬魔刀が一体何で俺の家に刺さっているのか……それを教えて下さい」

クアンは……その問いに首を降った。

その無言の返答に、京介は眉を潜める。

「クアン……さん？」

「言う必要は、ありません」

京介の猜疑心を含んだ言葉に対し、クアンは目を瞑ったまま微動だにしない。

「そんな……。クアンさん、これが一番知りたかった事なんですから……教えて下さいよ」

食い下がる京介を、クアンは突き放したかのように頷かない。

つい数十分前まで僅かながらも見せていた人間味は一切消え失せ、高貴な輝きを放つ瞳は閉じられた。

「……………」

京介は、取り付く島は無い事を知ったのか、別の方向からアプロ  
ーチをかける事にした。

他の情報を仕入れて、推測する事も出来ると思ったからだった。  
少しでもきっかけを得る為にも、手辺り次第に問い掛ける。

「……………な、ならクアンさんの事を教えて下さい。それならいいです  
よね……………」

「先程も言った通り、私はクアン＝リーリムグラフです。それ以外  
の何者でもありません」

「いや、そうじゃなくて……………クアンさんは剣から出てきたじゃない  
ですか。それは一体」

「言う必要はありません」

「そ、それなら……………昨日、襲い掛かってきたあのバケモノは何なん  
ですか!？」

あいつ等の狙いは……………斬魔刀じゃないんですか!？」

「言う必要はありません」

クアンは自分の名以外の事は一切口を開かない。

沈黙の為か、雨音がより強くなったように聞こえる。

京介の表情は徐々に曇り、落胆を隠し切れない表情になった。

座卓の上に置かれた手を強く握り締める。

そのまま無言の時間が過ぎていった。

何分か経った頃、重々しく口を開いたのは京介だった。

「クアンさん……。要するに、何も言えないって事ですか……」

「あの剣は斬魔刀だと、話しましたが」

「……そうじゃなくて、肝心な事は何一つ聞けてないんです。さっきは、話をしてくれると言ったじゃないですか」

「京介が聞きたい事と、私が話す必要が無いと判断した事が合致しただけの事です。」

なら仕方が無いでしょう。京介もそれでいいと約束した筈です」

確かに、京介はクアンが話す必要が無い事は話さないという約束を交わした。

だが、まさかここまで全て話してくれないとは流石に思っては居なかった。

「それは……そうかも知れないけど。この家は、俺の家です。」

そして、斬魔刀は十年以上も此処に刺さってるんです。

少なからず、此処に刺さってる理由くらい、俺には聞く権利があるんじゃないんですか？

それこそ……言えない理由でもいい。それ位、教えてくれたっていいじゃないですか！」

苛立ちを押さえ切れず、ついには京介は声を張り上げてクアンを睨む。

京介自身、焦りから来る失態だと気付いていたが、引く訳には行

かなかった。

ようやくくぎつけたこの機会を失ってしまえば、  
二度と自分は真実には近づく事が出来ないという事を感じていた。

「……言う必要は、ありません」

「……ッ！」

京介は立ち上がりかけた。

が、その時……自分の左手に嵌っている物の事を思い出した。  
そして、クアンから情報を聞き出す策も同時に思い付く。

これなら話してくれるだろう。京介は確信を持った。

本気とも冗談とも取れる口調ではあったが、

指を切り落とそうとまで言ってしまうあの様子から見ても、  
京介の思いついた事は的を射ていると思われた。

だが、それは京介にとって気の引ける行為だとも思えた。  
理性と欲求が互いに言い争い、京介を悩ませる。

人として不道德と言える行為をしようとしている自分を、自分が  
貶す。

「どうやら、京介の聞きたい事はこれで終わりのようですね。

では京介、その指輪 返して頂きましょうか」

クアンの口から出た言葉は、京介の予想通りだった。

京介はまだ決めかねていたが、覚悟を決めた。

「聞こえませんでしたか？その指輪を返して頂きたいと言ったので  
すが」

「……………嫌です」

京介は、感情を努めて押し殺しながら、拒否した。

「……………話して貰うまで、これは返しません」

京介が選んだ事は、己の指に嵌っているこの指輪を、事実上自分の切り札として使用する事だった。

「取引、という事ですか？」

クアンは京介の提案に対し軽蔑するでも無く、侮蔑するでも無く、淡々とした物だった。

それがまた京介の中の罪悪感を強めた。

「……………その通りです」

出来る事なら京介だってこんな事はしたくは無かった。

自分が今やるうとしてしている事がどれだけ理不尽なのかという事も十分解っていた。

元々はクアンの所有物だという事が分かっているこの指輪を、理由はどうあれ、今自分の手の内に有るといふ事を利用して情報提供を強制する。

これは理不尽極まりない脅迫だった。

通常なら実行する事はおろか、考えもしない行為だが、それをしてでも京介は真実が知りたかった。

京介はクアンの出方を窺う。

「クアンさんが、話してくれれば、直ぐにでもお返しします。だから……教えて下さい、教えてくれたら」

「……ふう」

クアンは、呆れ果てたような溜め息を一つ吐いて、立ち上がった。その瞬間、京介の目と鼻の先には、何時の間にか座卓があった。そして、左腕に確かな人間の重みを感じる。

「……ッ!」

京介は、驚き、戸惑う。

気付かない内に、座卓の上に組み伏せられていた。

それは丁度、脇固めのような形になっていた。

顔を動かし、左腕の方をみやる。

指輪の嵌っている左手は彼女によって取り押さえられ、

何時の間にかクアンの手には、スプーンが握られていた。

それは京介がクアンの為に持ってきたスプーンだった。

何時の間にかクアンが持っていたらしい。

そのスプーンを逆手に持ち、スプーンの先端を、座卓に置かれた

京介の左手薬指から数センチ上へと置いた。

左手首はクアンに押さえられていた。

握られた部分から感じるひやりとした感触が、京介に鳥肌を立てた。

「……痛いのは、苦手ですか？」

京介の真上から、冷水を浴びせるような言葉が降りかかった。

京介はクアンの言っている事が理解出来ない。  
ただ、自分の左手と、クアンの持っているスプーンに釘付けにな  
っていた。

「ク……クアンさ……これは」

抵抗しようと身体を動かすが、びくともしない。  
体格的な差は、多少なりともあるのに、全くと言っていいほど動  
かない。

「先程も言ったでしょう？指を切り落とすと。」

この指輪は、京介が持っけていても何の意味も為さないので。  
だから返して頂きたいのです。どのような形にせよ」

京介はその時、背筋が凍った。

クアンは、その手に持っているスプーンで京介の指を断つつもり  
のようだった。

「馬鹿な……スプーンじゃ切れるわけ……」

「薄い金属には変わり無いですから、大丈夫ですよ」

まるでご心配なく、とでも言いたげな口調だった。

クアンが言うからには、例えスプーンでも指を切り落とす位は出  
来るのだろう。

「ちょ、ちょっと待って下さい！ほ、本当に切るつもりなんですか  
！？冗談じゃ」

「冗談は好きではありません」

あくまでクアンは冷静だった。

京介の脅しに対しての報復行為としては、やりすぎの範疇に入るだろう。

京介は慌てて、さっきの件を取り下げの事にした。

「そ、それにしても他に方法は有るんじゃないんですか！？さっきの件は無しにしますから！」

改めて方法を考えましようよ！」

「いえ、さっきの件が無くても私はこうするつもりでした。

現状では、最早これ以外に方法は有りません」

クアンは、最初っからこうするつもりだったという。

朝食を食べている時も、京介の指を切り落とす事を考えていたのか。

食事中京介をじろじろと見ていたのは、

左手薬指が無くなっても、食事には支障があるのかを確認していたのだろうか。

その瞬間、クアンという人間がそら恐ろしい人間に思えてきた。

「そんな……クアンさんはそんな事する人じゃ……」

「京介にとって都合の良い印象を私に抱くのは京介の勝手です。

ですが、その印象通りでは無かったと言って私に当たるのは止めて下さい」

確かに、京介はクアンの見た目で彼女を決めてかかっていた事は事実だった。

しかし今クアンが行おうとしている事は、その外見からは想像も

付かないほど残酷な行為と言える。

「くっ……」

京介からは死角になっている為、クアンの表情は窺い知れない。

京介は指に叩き込まれるであろうスプーンの先端の感触を想像して、脂汗が止めどなく流れて来た。

クアンは、そのスプーンで京介の指を切り落とす時はどんな表情をしているのだろうか。

少しは表情を崩すのか、それとも無表情で行うのだろうか。

ただ解っている事は、クアンは必ず京介の指を切り落とす……という事だった。

京介の体から諦めの為か、力が抜ける。

京介は、クアンに対して形はどうあれ、

結果的に助けて貰った事により、彼女をピンチに來た正義のヒーローのように考えていた。

弱きを助け強きを挫く、美しく心優しい聖人君子のような少女だと。

しかし……それは間違いだったのだろうか。

自分を助けてくれたのは、たまたま自分がそこに居ただけで、助けるつもりなど毛頭無かったのかもしれない。

そして今、自分の指を切り落とそうとしている。

指輪を取り戻す為に。

だが、今このような状況に陥ってもまだ、

クアン＝リーリムグラフという人間が悪人だとはとても思えなかった。

悪人が、あのような高貴かつ澄んだ目をしているとは思えない。

とはいっても、親から貰った大事な体の一部を切り落とした人間と、

仲良くするつもりは無い。

京介は、覚悟を決めた。

「……てっきり、泣いて懇願してくると思ったのですが」

京介が無駄な抵抗を止めた事により、クアンの方から話し掛けて来た。

「そうしたら……止めてくれるんですか」

「……」

京介は、最後の抵抗にと、喚くように叫んだ。

「だったら……さっさと指輪を取って、剣と一緒に居なくなってくれッッ！」

その言葉に、京介の左手を掴んでいたクアンの手がびくつとなる。

再び、茶の間に静寂が訪れる。

京介も、それっきり一言も話すことは無かった。

ただ、何時来るかわからない激痛に対し、左手から目を背けて備えていた。

一分……二分……。

京介は、ただ歯を食いしばる。

待っている時間すらも恐怖に感じる為、何も考えずその時を待つ

ていた。

「……これも、京介の為なのです……」

ふと、クアンの声が耳に入る。

さつきと変わらない口調の中に、何処か悲しい響きを含んだ声だった。

「……」

「……京介、今貴方は踏み込んではない場所に居ます。」

そこから突き放し、二度と踏み込むことが出来ないようにするのが、最も優先するべき事なのです」

今の言葉に、京介は違和感を覚えた。

京介には無く、クアン自身に言い聞かせているかのように聞こえたからだった。

それはまるで、指輪の事よりも、京介の身を慮るかのような言葉に。

京介が今の言葉の真意を問い質そうと口を開く前に、

「……服の裾を銜えて下さい。舌を噛み切らないように」

その言葉から数秒後、クアンの手が霞む。

スプーンが、京介の指に打ち込まれた。

## 斬魔の剣 十畳間にてゝ 8 境界 / 世界

……京介は目を見開き、ただ目の前を見ていた。  
その目には光が無くなっていた。

指を切り落とされた激痛が京介の全身を蝕んでいるのだろうか。

しかし、京介の左手…薬指の数ミリ手前で、スプーンは静止していた。

スプーンを持っているクアンの手が震えている。  
スプーンの先端はひしゃげ、折れ曲がっていた。

「……遅かったか」

クアンが呟いたその時、  
京介の心臓は大きくひとつ

『……ドゲン』

と鳴った。

体が大きく撥ねる。

京介の目に映っていた光景がぶれ始める。

自分の中に得体の知れない何かを押し寄せ、体中至る所から入り込んで来る。

それと同時に、自分の中にあつたものが押し出され、全て剥離して行くような感覚に襲われる。

「……………ああ……………ああああ……………」

無意識なのか、掠れたような声を絞り出す京介。

その様子を見たクアンは、スプーンを投げ捨て床に置かれた槍に手を向けた。

槍がクアンの元へと吸い寄せられるように飛び、クアンの手に収まる。

その穂先を京介の指に向け、一切の躊躇いも無く振り下ろそうとしたその刹那

京介の左腕が大きく振られた。

常人には到底出せない程の力だった。

左腕を取り押さえていたクアンは大きく払い飛ばされてしまう。クアンはふわりと空中で姿勢を直し、畳に降り立った。

そして手に持っていた槍を、ゆっくりと京介に向けて構える。

京介は座卓に上半身を預け、仰向けにした状態になっていた。左腕は天井へと向けられ、小刻みに痙攣を繰り返している。

「は……………ぐあっ！」

『……………ドグン』

また一つ大きく心臓が鼓動を起こし、

これ以上ないくらいに身体を仰け反らせる。

クアンは槍を構えたまま、口を開いた。

「……離れなさい。その者は関係の無い人間です。これ迄も、そしてこれからも。決して私達と関わる事は無い者なのです」

あくまで口調は厳しく、辛辣だった。

茶の間には京介から吐き出される苦悶の音が響く。

クアンは、齒を食いしばった。

「っ……離れると、言っているのですッッ!!」

クアンの鬼気迫る声は一体誰に向けられた言葉なのか。

仮に京介に向けた言葉だとしても、京介にはクアンの声が届いては居なかった。

今の京介には、目の前の光景も見えない、クアンの声も聞こえない、

全てが隔離された世界に一人で閉じ込められているような物だった。

やがて、その世界も崩壊し、全てが真っ白な世界へと変わって行く

……

……

…

再び目の前が色付いた時。

京介は、棧橋の上に立っていた。

棧橋は白い木で作られており、どこまでも果てしなく向こうに伸

びている。

板は全てが均等に打ち付けられていて、綺麗な物だった。建付けもしっかりしているのか、足元に不安感は無かった。まるで踏んでいる心地がしないくらいに。

栈橋の周りには、蒼く透き通った海しか見えなかった。

水平線の彼方にまで続いている。

海面を見ると、京介の顔が反射して小波の影響を受けながらも映り込んでいた。

海の深さはそれ程でも無いらしく、海面の奥に白い砂が見える。

海中には小魚一匹さえも居なかった。

ふと見上げると、空は突き抜けるように蒼く広がり、

白い雲が心地よい風と共に流れて行く。

その風は京介を優しく撫でて行った。

思わず、深く息を吸った。

潮の香りが全身を巡る。

不浄な部分を全て洗い流してくれるかのような、心の底から清々しい気持ちになり、

思わず京介は空を見上げて顔を綻ばせた。

自分がここにいる理由さえ、どうでも良くなってくる。

ただ、ここに何時までも居たい。

何かをしなきゃいけない事があったような、

そんなしこりのような物がまだ心の片隅に存在して居たが、

「くすくす」

楽しそうにはしゃぐ声が後から聞こえ、それも無くなった。

その声に反応して後を振り向くと、  
京介から十数メートル程離れた場所に、  
その人物は京介に対し背中を向けている形で棧橋に腰掛けていた。

棧橋は、その人間の腰掛けている辺りで途切れている。

そこが棧橋の終点なのだろうか。

再度京介は周囲を見回す。

この世界は……海と、今自分が立っている棧橋しか無いように思えて来た。

京介は、その人間にゆっくりと近づいて行った。

棧橋に座って居たのは、一人の小柄な少女だった。

純白のワンピースを着て、クセのある黄金色の髪の毛を腰の辺りまで伸ばしている。

その髪は風によってなびき、太陽の反射を受けて煌いていた。

背中を向けているため、顔や表情などは何う事は出来ないが、

この場所と相まってどこか神秘的かつ不思議な印象を受ける少女だった。

少女は、海面に素足を付け、ぱしゃぱしゃと脚で海面を蹴っている。

京介が歩いている間も、ただ海面を蹴っては楽しそうに笑っているだけだった。

だが、少女の傍まで近づいた時、少女の笑い声が止み、両足のつま先が海面に浸かる。

つま先が生み出した小さな波紋は、すぐに消えた。

京介は、少女に話し掛けようかと思ったが、どう話しかけようか  
暫し迷った。

「わからないって、カオしてる」

すると、少女から先に話し掛けて来た。

鈴を鳴らしたような綺麗な声だった。

京介は少女の急な問いかけに狼狽しながらも、

「……わからない？」

と聞き返した。

「うん、なんでココにきたのか。ワタシがダレなのか。ジブンがダ  
レなのか。」

なにもかも、わかんなくってカオ」

一つ頷いた後、からかうように少女は続けた。

少女の顔は京介からは見えなかったが、口調はあくまで無邪気で  
楽しげだった。

少女の言葉は、京介の事を指しているのだと気付いた。

「俺は……京介。名後京介だよ」

京介が答えても、少女は此方を振り向く事は無かった。

「ふうん。よかったね」

「……良かった？」

その問いに、少女は淡々と続けた。

「ジブンがダレなのか、ちゃんとわかってる。それってとってもダイジなコトだよ。でも、キョウスケはホントウにキョウスケなの？」

「……？」

「ジブンはキョウスケだ、っっておもってるだけで、ホントウはチガウかもしれないよ？」

『自分が本当に自分なのか』

京介は少女の言っている事が理解出来なかった。哲学か、禅問答の類でもしようと言っのたろうか。

どう答えようか考えあぐねていると、少女は再び海面を両足で飛び始めた。

ばしゃばしゃ……

ばしゃばしゃ……

幾重にも波紋は生まれ、そして消えて行く。

少女の求めている答えが見つからないまま、とりあえず頭に思い浮かんだ答えを少女に告げた。

「何が言いたいのかわからないけど、少なくとも俺は、名後京介だよ。それだけは確かだ」

「……クイニア」

「は？」

「ワタシのナマエ、クイニア。いいナマエでしょ」

少し得意げな口調で少女は自分の名前を京介に教えた。

「あ、ああ……。良い名前だと思うよ」

「えへへ〜！ジブンでも、いいナマエをつけたっておもっもん」

京介はその言葉に疑問を覚える。

目の前に居る少女は何とも掴み所の無い話をする。

「……自分で、付けたのか？」

そう聞くと、クイニアはまた両足を止めた。

少し顔を俯かせ、さっきまでの無邪気な口調から、少し寂しげな口調になった。

「……うん。ワタシがダレか、ワタシ知らないから。

クイニアってナマエをつけたら……ワタシはクイニアだよって見えるから」

「……」

そのまま二人とも無言になった。

京介もその事を深く追求する事は彼女に失礼だと思い、止めた。

「所でクイーニア、色々聞いてもいいかな」

「あ、うんっ！なあに？」

名前を呼ばれた事が嬉しかったのか、再び無邪気な口調に戻った。

「このさ、棧橋の向こうには何があるんだ？」

棧橋の遥か向こうを指差して京介は質問した。

少なくとも、クイーニアがこの棧橋に居るのなら、

あの棧橋の向こうからここに来たという事になる。

クイーニアは首をふるふると振った。

首の動きに合わせて、黄金色の髪もふわりと舞う。

「わかんないよ。いったコトないから」

予想外の答えだった。

「行った事が無い……か。行こうとは、思わないのか？」

「うん。いまはいいかなって。ここがいちばんだから」

「……そうだな。クイーニアの言う通りかもな」

確かに、此処ほど安らげる場所は無いのかも知れない。  
京介も、何時までもここにいても良いと素直に思った。

「……キョウスケも、そう思う？」

「ああ、そう思うよ。空も海だってこんなに綺麗な蒼色だし、

こんな綺麗な場所は他に知らないよ」

京介の言葉に、満足そうに頷いたクイーニアは、何かを思いついたかのように立ち上がった。

顔を俯かせたまま、両手を胸元の前で合わせる。

そして、そのまま京介の前に歩み寄った。

「それじゃあ、キョウスケにこれ！あげるっ」

細く綺麗な手の平を一度合わせた後、京介の胸元へと手を伸ばす。

大切なモノを見せるかのようにゆっくりと手を広げると、

手の中には青白く透き通った直方体の物があった。

「……これは？」

「ワタシから、キョウスケにプレゼントだよ。キョウスケにひつようなモノだから」

「俺に……必要？」

「ホラホラ、てをだしてっ」

クイーニアが急かす。

京介は促されるままに、両手を差し出した。

クイーニアは京介の両手の上に自分の両手を置いて、ゆっくりと両手を離す。

直方体は、ゆっくりとクイーニアの手から京介の手へと落ち、

京介の手の平より少し上で止まった。

京介は、その直方体を受け取った。

「これは……一体なんに使った？っていうか、これはなんだ？」

直方体は京介の手の平の上で、ゆっくりと回転していた。

「うれしいなあ。キョウスケがうけとってくれてっ」

「いやだから……これを貰って、俺はどうすればいいんだ？」

名称も用途も知れない物を受け取って、困惑する京介。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。ちゃんとキョウスケにもつかえるから」

クイーニアは心から嬉しそうに、

両手を後に回し覗き込んでその直方体を見ている。

「でも、なんで俺にくれるんだ？その……これをさ」

そもそも、目の前の少女から施しを受ける覚えは無い。

なにせ、今此处で出会ったもの同士、貰う理由が見当たらない。

「おちかづきのしるしでしょ？それに、ココをスキっていつてくれ  
たし、

ワタシのナマエほめてくれたし……」

指折り数えながら、様々な理由を述べる、

その理由が多岐に渡り、終いには直接的に関係の無い理由まで持ち出してきた。

だが、その指の一本がぎこちなく折られ、

「アト……おわびも……」

と締めくくって指折りは終わった。

「お詫び、って？」

「うん。キョウスケにイヤなモノみせちゃったから、そのおわび」

「嫌な物……？」

その時、京介の脳裏に何かフラッシュバックする映像が浮かんだが、

それはすぐに消えてしまった。

思い出そうとしても、全く思い出せない。

「あれ……なんだったけな……」

それをどうにか思い出そうとしている京介を、クイニアは黙ったまま見つめていた。

…

……

……

「……京介、しっかりしなさい。気を確かに持つのです」

クアンは、槍を握る力を強めた。

目の前に居る京介の呼吸は荒くなり、過呼吸と呼べる程になっている。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

京介は上半身の力だけで起きあがり、そのまま膝をついて床に崩れた。

左手首を右手で掴み、前方にゆっくりと向ける。

手の平には、青白く光る小さな直方体が現れた。

その直方体はゆっくりと回転している。

「……うっ……ああ……あああ……！」

過呼吸はあえぐような声へと変わって行く。

最早京介の全身は汗まみれになっていた。

次第にその直方体は拡大し、クアンを……斬魔刀を……京介を覆い、

ついには茶の間を覆ってしまう。

茶の間は、青白い世界へと変貌した。

クアンはその事にも動揺する事無く、真っ直ぐ京介を見据えていた。

「はぁっ……はぁっ……うぁ……」

茶の間の天井から、光が舞い降りる。

その光はクアンの肩や、京介の手に触れ、淡く弾けて消えて行く。

「う……ああ……うおあああああああああああッ  
ッッ！！！」

京介は、喉が張り裂けんばかりに絶叫した。

京介の手の平に現れた直立方体は、膨張を続けた。

台所を、縁側を、廊下を通過し、ついには名後家全体を覆いつくす程のサイズになった。

直立方体は留まる事を知らず、更に膨張を続ける。

隣近所、向かいの家、果ては道路を挟んだ隣の地域。

ついには、直立方体は鴻神市の約半分を覆う程になった。

その直立方体が覆った場所は全てが青白い世界へと変わり、光が大量に舞い降りている。

だが、鴻神市民はその事には気が付いていなかった。

市の半分が青白い世界へと変貌したというのに。

通常ならばパニックになってもなんらおかしくはない。

だが、道路を傘を差して歩いている人。

水しぶきを上げて走って行く乗用車。

コンビニで立ち読みをしている若者。

洋服を品定めしている中年女性。

広大な直立方体の中に入った人達は、光が降る前と同様の動きをしている。

その中には、まだ布団の中で眠っている辻村や、

電話で友人と談笑をしている沢渡、ベッドに腰掛けて本を読んでいる日下部も含まれていた。

直方体が現れた事によつての影響は、無いように見える。  
だが、直方体は未だ膨張を続け、町を覆わんとしていた。

自分の手の平から現れた直方体によつて、  
そのような事態になっている事は、当の京介には知る由も無い。

「……がッ……あああああ……ああああああああああ……！」

京介は、まだ無我夢中に叫んでいた。  
収まる様子は依然として見られない。

「京介……」

クアンは、眉を潜め手から槍を離れた。  
槍は堅い音を鳴らして畳に落ちる。

そして、クアンは苦しみ続けている京介に近づいて行った

………

……

…

クイニアは、何かを思い出したかのようにくるりと背を向けて、  
小走りに棧橋の終点に立った。

その背中を京介は見つめる。

直方体はまだゆっくりと回転をしていた。

少し強い風が吹いて、クイーニアのワンピースの裾と、黄金色の髪の毛がたなびく。

「さてっ。あげたかったものもあげたしっ！キョウスケっ。そろそろいかなきゃ」

「ん？やっぱり行くのか？」

京介は棧橋の向こうを見た。

クイーニアは京介に背中を向けたまま首を振る。

「ん〜ん。いくのはキョウスケだよ」

「俺が？俺別にあっちに行くとは……」

「あははっ。あっちじゃなくて、そっちだよ」

と言いながら、棧橋では無く海の向こうを指差した。その方向を京介も見る。

「あれ？……そっちじゃなくてこっちかな？あれ？あそこだったかな？あれ？」

とぼけたように色んな方向に指を差し始める。

次第には空と海を同時に指差していた。

「それじゃあどっちか分からないな」

「とにかくっキョウスケはもういかなきゃなの。

キョウスケがぎゅっつめをつぶって、いち・にの・さん！っでおわ

かれするの」

不思議な物で、通常ならありえないような方法なのだが、目の前の少女に言われると、本当にそれで帰れるような気がしてきた。

むしろそれ以外には方法が無いようにさえ思えてくる。

「そうなのか？それじゃあ」

「だめー！」

早速目を瞑ろうとした京介の瞼を、とっさにむぎゅっと指で抑えるクイーニア。

それは最早サミングとも言える勢이었다。

「あいたたたっ、目が渴くっ！目が渴くっ！」

その手を振り払い、目を抑えて暫し蹲る京介。

「もうっ！いきなりやるなんてひどいよ！ちゃんとおわかれしないとだめですなのっ！」

涙目の京介をよそに、頭上からたしなめる声が響く。

「そ、そうか……それは悪かった」

「いーいっ！？ごういうときは わたしがざんねんそうに

『また、あえるかな……？』

っっていうでしょ？そうしたらキョウスケが」

クイーニアは妙な小芝居を交えつつ別れの方法を指南し始めた。その一部始終を聞いた京介は、小学校の学芸会を思い出すような気恥ずかしい気持ちになり、少し赤面した。

「あの……それ、本当にやんなきゃいけないのか？」

「そうだよ、これをやってからじゃないと、めをつぶってもダメなの」

何故か機嫌を損ねてしまったらしく、急にルール改正になったようだ。

「どうやら、やらないと帰れない、というより、彼女に邪魔されるだろう。」

「しょうがないな……それじゃあ、おほんっ」

気恥ずかしさを紛らわせるように、一つ咳をする京介。そして立ち上がり、クイーニアの前に立つ。

「キョウスケ……また、あえるかな……？」

恥らうような素振りを見せるクイーニアの肩に両手を置き、

「当たり前じゃないか、ぼくは君に寂しい思いをさせてしまうかもしれない。」

「ただ、きつとここに帰ってくるよ……君の笑顔が見たいから」

……棒読みだった。

「……ぷっ……くくく……」

クイーニアは耐え切れず顔を背け、終いには爆笑しだした。

「あのかな……やれっていったのはそっちだろ？」

「きゃはは……そう……そうだったね！ごめんなさ……あははは！  
だって、キョウスケまじめなおして……」

爆笑は、止みそうにも無かった。

「……もういいだろ？」

「うん、ホントウなら、おでこにキスくらいしてほしかったけど、  
キョウスケにはムリだとおもってから、ごうかくにしてあげるっ」

「馬鹿言わないでくれよ……そんな事出来る訳無いだろ？それじゃ  
あ……またな」

京介は目を閉じた。

心の中で3つ数える。

いち……にの

その時、京介の頬に温かい感触を感じた。  
それは一秒も経たずに終わり、惜しむように消えた。  
続いて、ぽそりと呟くような声を聞いた。

「……うん、ゼツタイにまってるから……」

…

…

…

さん。

京介は、ゆっくりと目を開いた。

目を開くと、すぐそこにクアンの顔があった。

知らぬ間に、クアンに上半身を抱きかかえられている体勢になっていたようだ。

「クアン……さん……」

京介の声を聞いて、クアンは安堵の表情を浮かべた。

「やっと戻りましたか」

「戻った……？俺は……」

確か、クアンに抑えられていたはず。

恐らく、気を失っていたのかもしれない。

その間、さっきまで自分はどこかに居たような気がするのだが、思い出す事が出来なかった。

居た事は覚えているのに、それが何処だったかがわからない。誰かに会ったような気もするが、誰かも思い出せない。

「それよりも京介、今は『境界』を鎮める事が先決です。私が介添えをします、私の言う通りにしてください」

クアンの意志の強い言葉に、思考を遮断される。

「…境界？」

そして、茶の間の変化に気がついた。  
青白い世界、降り注ぐ光。

「そうです、説明は後で。立てますか？」

クアンの口調から、京介は現状の打破が最優先だと悟った。  
その問いに頷き、クアンの助けも借りてよろよろと立ち上がる。  
酷く体が疲れている事に気付く。

「まず、目を閉じて下さい。そして、指輪の嵌っている手を前に…  
…安心して下さい。  
もう乱暴はしませんから」

その言葉に無言で頷き、目を閉じて左手を前に出す。  
左手にクアンの手が重ねられる。  
そして、クアンが何か言葉を連ねていた。

すると、京介の頭に青白い直方体が浮かぶ。  
それは巨大な直方体だった。

「……浮かびましたね？」  
クアンの言葉に頷く。

「では、ゆっくりとでいいですから、それを小さくするイメージして下さい。

決して消失させてはいけません。焦らずに、ゆっくりと……」

京介は、それに従い、ゆっくりと直方体を小さくしていく。

それに伴うかのように、

鴻神市を覆っていた直方体がゆっくりと縮小を始めた。

京介の中で、手の平に収まりきらない程の大きさにまで直方体を小さくした時、

「では、目を開けてください」

とクアンが呼びかけた。

京介が目を開けると、未だ茶の間は青白い世界のままだった。

クアンの方を見ると、クアンは一つ頷いて京介の手に重ねていた手を離れた。

「このままにしておきましょう。安定もしているようですし、その方が都合が良いですから」

「安定………?」

「この境界と、私達が生きている境界とが丁度安定しているのですよ。」

京介もこの程度なら、抵抗が無いのではありませんか?」

そう言われると、先程までの疲れが嘘の様に消えかけていた。

酷く安定した気分になっている。

「ええ、確かに。さっきまで凄くだったのがウソみたいですよ」

「これが京介に生み出せる境界の、現状での許容範囲なのでしょう」

「これ……俺が出したんですか!？」

部屋中を見回しながら驚愕の表情を浮かべる。

自分がやった事とはとても思えなかった。

「ええ、そうです。これが、その指輪の力なのです」

その言葉に、はっとした表情を浮かべ、京介はクアンを見た。

「話して……くれるんですか？」

「残念ながら、先程とは事情が変わってしまいましたから、致し方ありません」

クアンは酷く残念そうだった。

だが、その眼には覚悟に近い意志を光らせていた。

それは、京介にしてみたら、棚ぼたも良い所だった。

「話しましょう……全てを」

斬魔の剣 十畳間にてゝ 9 ・ 斬魔の剣、選ばれたのは

青白い世界の中に、京介とクアンの二人が居る。  
降り注ぐ雪のような光を受けながら、話が始まった。

「京介の指に嵌められているそれから発動した物は『境界』と言います。そうですね……」

クアンは、改めて正座をし直した。  
話が長くなる事の隠喩だろう。

京介もそれに合わせるように、畳に胡座をかいた。

「簡単に言えば、京介達の世界から隔離する役目を担う為の箱庭、とでも言いましょうか。」

この境界の中では、あらゆる行為を行っても元の世界には影響を及ぼしません。

あくまでも安定した境界の中であるなら、ですが」

京介は茶の間を見回す。

これで見るのは二回目だが、幻想的な景色の為に心奪われそうになる。

だが、話が中断されようすぐにクアンの方向に向き直す。

「あらゆる行為……ですか？」

「ええ、私達が今境界の中に居るといふ事は承知かと思いますが……例えば、その箱がありますよね」

クアンが指し示した方向には、この家に唯一置かれているテレビ

があった。

一瞬京介には何を示しているのかわからなかったが、テレビを箱と称している事を知り、うろたえながらも肯定した。

「は、箱ですね。箱と言えば箱ですが」

「何か？」

が、クアンの刺すような視線を受けて、慌てて首を振る。

「いえ！紛れも無く箱です」

「ええ、箱です。それでは、失礼します」

クアンは畳に落ちていた槍を手に取り、立ち上がる。

京介が何をするのかと詮索しようとした時、テレビに向かって軽く腕を振った。

「ク、クアンさん？一体何を」

その時、テレビにピシリと一本の筋が入る。

微妙な角度で袈裟に斬られたテレビの上部分が綺麗にスライドし、畳に落下した。

「おやおおッ!？」

京介は驚きのあまり、珍妙な悲鳴をあげた。

クアンの見事な一閃によって、テレビは真っ二つに分断された。

断面は綺麗な物で、もう一度乗せればそのまま元通りにくっついてしまいそうな程だった。

「あ……ど……な……で……！」

京介は、目の前でテレビを叩つ切られた事に動揺を隠し切れない。クアンは到って冷静その物だったが、茶の間に降り注ぐ雪の量が増えている事に気付いて京介を諭す。

「落ち着いて下さい。境界が安定しないと本当にこの箱は切られたままになってしまいますよ」

「あ……え？」

「どうか冷静に。あの箱の行方は境界を縮小させれば分かる事です」  
「でも、しかし……どうやれば」

クアンは困惑する京介に歩み寄り、再び京介の左手に自分の手を重ねた。

「先程と同じように、境界を更に小さくするイメージを試みて下さい。」

私も介添えますから。決して早急に縮めようとはしないで下さい」

クアンのひやりとした手の感触にどきりとする。

京介の心臓は高鳴り、茶の間に降り注ぐ光の量が僅かに増えたように見えた。

「京介、平静を保って下さいと言いましたが」  
「す、すみません！すみません！」

クアンの射抜かれるような視線を受けて、京介は何度も頭を下げた。

そして言われた通りに全神経を集中し、さっきと同じ直方体をイメージする。

程なくして京介の中に現れた直方体は、クアンに止められる寸前の時と同じサイズだった。

(で、出た……)

京介はそれを縮小させていく。

ゆっくりと、確実に。

すると、それに伴うように茶の間を覆っていた青白い世界も縮まって行く。

境界がなくなった事により、茶の間は何時も通りの色彩を取り戻した。

縮小した境界は、京介の左手の平の上でゆっくりと回転している。

切断されたテレビは 不思議な事に元通りになっていた。

「本当だ……直ってる」

元通りになったテレビを見て呆気にとられている京介を尻目に、クアンは続けた。

「後はその手に残っている境界を片付けましょう。

続いて、その境界を指輪の中に入れるようイメージして下さい。

境界を消失させる事が無いように。必ずイメージしたままお願いします」

言われた通りのイメージを思い浮かべる。

クアンは、眼を閉じて何かの聞き慣れない言語の言の葉を紡いでいた。

すると、京介の手の平に魔方陣のような物が浮かぶ。

その魔方陣に境界は吸い寄せられ、一片も残さずに消えてしまった。

「……これが、境界です。境界を具現化たらしめるにはその指輪が必要なのです。」

これがマイセナーフェノムの 京介？」

クアンは訝しげに京介に問い掛ける。

その言葉が聞こえているのかいないのか、京介は何かに見入られたかのように自分の手の平を凝視していた。

「……」

「京介、聞いていますか？」

ぼうつとしていたが、クアンの呼び掛けにはっとした表情を浮かべて向き直る。

「あ……いえ、大丈夫です。でも一体どんな原理でこんな事が……」

掌と指輪を交互に見つめながら京介は疑問に思った。

残念な事にその原理がなんなのか、皆目見当も付かない。

子供用のアニメで青色のロボットが出していた道具の一つにこれと似たような物があつたと思つたが、

そんな事は今は関係無いと思い、即座にその考えを消去した。

「もつと具体的な話をした方が良かったですか？それなら原理をある程度はお教えする事も出来ます。」

難しい話になりますが、京介が望むのなら止むを得ませんね。

……境界とはスリワルド現象認識における確定要素を、触媒とした

「

クアンがつらつらと説明を始めだしたのを速やかに制した。

「いや、その辺りはいいです！聞いてどうにかできる物では無いみたいですから。」

多分俺が理解出来るとも思えないですし。それよりも、境界の中で降っていた雪みたいなのは何ですか」

「あの光は境界が干渉し、侵食しようとする軋轢から生み出された物です。」

これが多ければ多いほど、少なければ少ないほど境界が不安定だという事を表しています。」

境界は常に発動者の精神状態によって左右されるのです」

先程テレビを切断された時と、クアンに手を重ねられた時に降り注ぐ光の量が増えたのは、

境界が発動者の京介の動揺に感応して不安定になったからなのだろう。

「不安定のままだと、どうなるんですか？」

「境界の中で行われた事全てが、そのまま反映されます。」

先程の箱が断たれた状態のままになってしまう、と言えば分かっていただけだと思いますが」

その言葉に頷きながらも、京介は一週間前の茶の間を思い出していた。

あの時も、茶の間は境界の中になっていた。

にも関わらず、茶の間は乱雑としていた物だった。

「でも、この前は境界が消えた後にも座卓とか、天井とかぼろぼろでしたけど……」

「あれは、失念でした。奴等が現れた事をもう少し早く気付いてさえ居れば、あのような事にはならなかったのです。」

境界を作る前に私の一撃によって、天井に穴を開けてしまいました。力の制御を怠った私の過失でした。申し訳ありません」

そう言ってクアンは頭を下げた。

成る程、境界が発生される前に行われた物ならどうしようもないだろう。

結局、天井と床をぶち抜いた原因は、何かが落ちたのでは無く、クアンの一撃によって開いた穴だという事がわかった。

だが、もう少し場所が違っていれば自分があなっていたと思うと、京介は身震いを隠し切れない。

「い、いや！もう直しましたし、もう済んだ事ですから。」

それよりも奴等ってのは、昨日も現れた……あいつの事ですよね」

京介は冷や汗を流しながらも、クアンの口から出た『奴等』という単語に食い付いた。

自然と、クアンの表情が引き締まる。

「……鉄を塵紙くろがねの如く千切り、山を一刻足らずで駆け抜け、闇夜をさも自分の庭園の様に駆け巡りながら、我等の心の鼓動すら聞き分ける。」

その目を深遠の淵に居ながらも輝かせ、我等の首筋を狙い血肉を啜る走狗。

それが奴等 奪還者です」

「奪還者……どう見ても、まるで化け物のようにしか……」

昨日喰らった一撃によるあの痛みが、思い出しただけで蘇ってきた。

わずかに顔をしかめる京介。

「化け物のようでは無く、化け物その物です。生半な方法では傷一つ付ける事も叶いません。

彼らには鍛鉄も、洗礼を行った銀も効きません。

例えその身体に傷を付けたとしても、幾秒もせぬうちに身体は再生を果たすでしょう」

あの獣のような形をした奪還者は、身体を損傷してもたちどころに再生していた。

クアンの言う通り、凄まじい速度で自己再生をしているという事なのだろう。

「それでも熱や光には若干弱いようですが、絶対たる術では無いのです。聖水など嘲笑の域ですらあります。

聖銀の剣が胸に刺さっている事も厭わずに我等に牙を突き立てる、それが奪還者です」

「ま、まるで吸血鬼やゾンビみたいですね……」

京介は、昨夜自分が突き刺した包丁がなんの効果も見せなかった事を思い出した。

銀や光、そして聖水が効かないという意味では、よりタチが悪いのかも知れない。

「そういった通俗的な伝承は、ともすれば奪還者の被害に有った者

達が、  
存在を後世に残そうとしていた物の名残かも知れません」

言わばモンスターというカテゴリーに置かれる者達は、  
現実には実在しないからこそ、映画や怪奇小説等の娯楽と呼ばれ  
る世界の中で愛される物だ。

実在するのなら、世界中の人間が恐れ慄いて当然だろう。

そして、奪還者は確かに実在している。

もしクアンの言う事が本当のなら、伝承として語り継がれる程  
の昔から奪還者は居るといふ事になる。

それだけに、あの異形のモノ達がどれほど恐ろしい存在なのかと  
いふ事を思い知らされる。

「それじゃあ、奴等を倒すにはやっぱり……」

その問いにクアンは力強く頷いた。

「はい、斬魔刀こそが奴等に鉄槌を下す事が出来る、唯一にして絶  
対の力です。」

それ故に、奪還者達は斬魔刀を奪おうとしているのでしょ

「前者の獣の姿をした奪還者は明らかに狙いを斬魔刀に絞っていた。  
となれば、一週間前のあの人型も、やはり狙いは斬魔刀という事  
は疑いようが無い。」

奴等を倒す事が出来るのは、斬魔刀だけ。

だからこそ、奪還者は斬魔刀を奪おうといふ事なのだろう。

自らの絶対的な対抗策を無くす為に。

「斬魔刀と奪還者との戦いは、私がこの剣と出会う遙か前から行わ  
れて来ました。」

様々な人間が斬魔刀の担い手となっっています。

老人が、剣士が、母が、少年が。

斬魔刀を奪いにかかり、油虫の如く人を只捕食せんとする奪還者達から、

家族を護る為、恋人を護る為、国を護る為。そして斬魔刀を護る為に」

「そんな昔から、そんな戦いが……」

京介は、おざなりな言い方しか出来ない自分が情けなかった。

そんな京介をよそに、クアンはあくまで平静だった。

「この世界を生きている人間には、知られてはいけない、知らせる意味も無い戦いです。

ですから、京介が知らなくて当然の事なのですから、気にする事はありません」

「……」

「話を続けましょう。担い手達が戦っている間にも時という物は流れていきます。

彼等が人である以上、志半ばにしながらも剣を持つ事が叶わなくなるのは当然の事。

老いや、死病。或いは奪還者の手にかかってその命を落として逝くのです。

次の所有者が見つかる迄の間、斬魔刀の担い手は居なくなる。

その為、斬魔刀は考えたのです」

クアンはそこで一旦話を区切った。

ゆっくりと息を吐いて、京介を見据える。

「人は所詮、限られた命を生きる者。  
斬魔刀は、永遠とも言える時間の中で奪還者を向かい撃たなければならぬ物。」

己が唯一の対抗手段足りえると言うのなら、新たな所有者を見つけるまでの間、

時の流れなど物ともせず斬魔刀を護る騎士を、そしてその騎士に持たせるべく斬魔の力を備えた物を、  
新たに生めばよい……と」

京介は、呆気に取られた。

クアンの今言った事がもし真実だとしたら、この目の前の少女は

「私は斬魔刀から腑分けされ、生み出されたモノです。  
斬魔刀の担い手となり奪還者と戦っていた少女、クアン＝リーリムグラフとして。」

斬魔刀は、かつて自らを用いて闘い、そして死んでいった担い手の能力、容姿、  
それら全てを記憶し、模倣する事が出来ます。

この槍も又、斬魔の力を持ってして生まれたモノ。  
だからこそこれを持つ事によって私は奪還者に対抗しうる事が出来るのです」

「……ツツ!!」

京介は驚きの余り言葉も出なかった。

目の前の少女は生前のクアン＝リーリムグラフとしてではなく、  
奪還者と渡り合える力を持ったモノに、取り込んだクアンを当てはめた存在という事になる。

最早、彼女は人間と言うには余りにも異質な存在ではあった。

その証拠に彼女は今、かつての自分の死をさも他人事のように語っている。

(これじゃあ、目の前に居るこの人は、クアン＝リーリムグラフの名を借りただけの )

京介は、それ以上考える事を止めた。

今考えた事は、彼女にとって侮辱に他ならない。

そんな京介をよそに、クアンは話を続けた。

「かつての担い手達は、死して尚斬魔刀の騎士となって闘う事を拒みました。残念な事ですが、そして生前の私は彼らとは異なり、斬魔刀を護る騎士となる事を選んだのです」

「ク……クアンさんは何故、斬魔刀の騎士になろうと思ったんですか」

京介はその時『クアン』と呼ぶ事に少し抵抗を覚えた。

それが一体何故なのか、京介にはわからなかった。

「もし奪還者達にこの剣が渡ってしまえば、奪還者に対抗できる手管が無くなります。」

そうなってしまうては全てが紅涙を流す煉獄と化すでしょう。

それを阻止する為にも、私は斬魔刀の騎士として斬魔刀を護り、奪還者を討たねばなりません。

そして、新たな斬魔刀の担い手を見つける為にも。

生前のクアンもそう思ったが為に斬魔刀の騎士となったのでしょう」

クアンは、あくまでも真面目に答えていた。

その時、京介にはなぜ生前のクアンが騎士になる事を選んだのか、その真意が少しだけ見えた気がした。

だが、それを今のクアンに問う事は止めた。

彼女の決意に対して、不浄であると感じたからだった。

かつての自分を「生前の私」と言いながら淡々と話すクアンを見ながら、

京介は胸が詰る思いだった。

奪還者達に斬魔刀を渡すまいと、騎士になる事を決意した少女。

死んだとしても、戦う為に生きる。

それは……なんと云う……地獄なのだろうか

その身を傷つけ、癒す暇も無く更に重ねるように傷つけていく。  
死んでも尚蘇り、勝利の無い戦いに身を投じなければならぬ。

誰だって、そんな戦いをしたくは無いだろう。

何時終わるとも知れない戦いを望むような人間は、

余程の修羅の道を歩く求道者か……只の戦闘狂としか言い様が無い。

ただ……生前のクアンという少女は、実に崇高な正義感を持って  
いたが為に、  
この道を選んだのだろう。

「さて、これで京介が先程聞いていた質問

私の事、斬魔刀の事、奪還者の事には答えられたと思うのですが」

まだ京介には答えて貰っていない質問があった。

その内の一つは、クアンが斬魔刀から出てきた理由。  
だが、あれはなんとかして口を開いて貰おうとして適当に質問した事だった。

それに、これだけの情報を貰った今では、クアンは斬魔刀から生まれたのだから、

昨夜彼女が斬魔刀から出て来た事もなんら不思議では無いと思えた。

それよりも、まだ。

嫌が応にも答えて貰いたい疑問が残っていた。

「いえ、まだ残っています。斬魔刀はこの家の茶の間に十年も前から刺さっているのか。」

それと、なんで俺に全てを話してくれる事にしたのか。教えて下さい」

「……………」

クアンは、押し黙ってしまった。

京介は内心「まさか……………」と思っただが、全てを話すと言ったクアンの言葉を信じる事にした。

「斬魔刀は新たな担い手を求めています。」

担い手になるべき人間を見つけた時、自ら担い手の元へ赴くのです。生前の私の時にもそうでした。となれば……………」

「え……………」

京介は訝しげな表情を浮かべた。

クアンはゆっくりと頷き、口を開いた。

何処にでも居るような高校生、名後京介。

彼は、今度こそ人生最大の驚愕を覚える事になる。

「ここに斬魔刀があると云うのなら、斬魔刀は……」

名後京介こそ新たな担い手に選んだと考えるのが自然なのかもしれません」

斬魔の剣 十畳間にてゝ10 選ばれたゆえの代償

「な……なッ………」

京介はぼかんと口を開けたまま上手く喋る事ができなかった。

クアンの目には確固たる意志が焰の如く燃えているように京介には見えた。

「お、俺が斬魔刀の所有者……ですって？じよ、冗談ですよね……  
はは、ジョークにしてはちょっと洒落が」

引き攣った笑いを浮かべながら京介は平静を装うとした。

だが、クアンは眼光鋭く京介の目を真つ向から見据える。

その眼から、嘘偽りなど言っては居ないと言つ事がひしひしと伝わってくる。

視線に気圧され、京介は胡座を崩して後ずさった。

「冗談は好きではないと言つた筈ですが」

「いや、冗談としか思えませんよ！

大体、さっきは俺には関係の無い話だつて言つてたじゃないですか。

……なのに急に俺が担い手でしたつて言われても」

「今思えば、京介の指に、その指輪が嵌められた時に気付くべきでした。

通常ならば、人であろうと奪還者であろうと、その指輪には触れる事すら叶わないというのにです」

「触る事も、出来ない………」

この前、駅前で落としてしまった指輪を目下部が拾おうとした時には、確か触る事が出来なかった。

その後自分が拾い上げた時には、何も起こらなかった。

それがクアンの言う『触れる事すら叶わない』という意味なのだろうか。

「先程京介が聞きましたね、私がなぜ全てを京介に話そうと思ったのか。

それは、京介が境界さえも発動させてしまったからです。

それこそが、指輪が京介を選んだという事に他なりません。

その前までは、指輪を切り離しさえしてしまえばまだ手遅れにはならないと思っていたのですが……

まさか境界まで発動する事が出来るとは思いませんでした」

「そ、そんな馬鹿な！指輪や、斬魔刀が俺を選んだ？……そんな事は！そんな……」

徐々に消沈して行くかのように声が弱くなって行く京介。

京介はクアンが何を言っているのかは理解していた。

理解はしたが、納得したくはなかった。

自分は奪還者との戦いをする為に…斬魔刀の担い手に選ばれた。

となれば、死神が確実にその身体を覗かせている戦いに臨まなくてはならない、何の力もない自分が。

何の取り得も無い只の高校生の自分が、だ。

そんな事、冗談でも言つて欲しくは無かった。

自分はいくまでも、家に刺さっている剣の事。

そして、その剣を奪おうとしていたあのケモノと、戦っていた少女。

それが一体何なのかを知りたかっただけだ。

その背景にこんな戦いがある事なんて想像もしていなかったし、ましてや自分がその戦いの中心人物になるという事など予想だにしていない。

奪還者に向かって行った事だって、無我夢中だったからこそ出来た事だった。

今改めて奪還者と対峙しろと言われても、あの時と同様の勇気を振り絞る事なんて、出来るわけが無い。

その時、京介は一つ。クアンに対して、まだ見せていない物がある事を思い出した。

これを見せるとなれば、クアンの期待を完全に裏切る事になるが、そんな事には構っていられなかった。

「……クアンさん。俺が斬魔刀の担い手だなんて、そんな訳無いですよ。だって……」

京介は急いで立ち上がり、斬魔刀の前に立つ。

何時ものように、畳に刺さっているだけの斬魔刀。

しかし、こうしてクアンから全てを聞かされた後だと、随分と禍々しく、そして神々しく見えてくる。

京介は目を瞑って大きく息を吸い、斬魔刀の柄を握った。

クアンは、それを黙って見つめていた。

京介はその視線を背中に受けながら、覚悟を決めて全力で引き抜かんと力を込める。

斬魔刀はびくともしなかった。

何度京介が力を入れようとも、斬魔刀はぐらつきもしない。

京介はその事に心の底からほつとして、クアンを見た。

「ご覧の通り、俺には抜く事が出来ません。これじゃあ、とても斬魔刀が選んだとは俺には思えませんよ」

「……」

相変わらずの無表情の中に、僅かな憮然とした表情が見て取れた。

「やっぱり……斬魔刀の担い手は俺じゃないと思うんです。」

ひよつとしたら、斬魔刀が勘違いして此処に来ちゃったのかも知れませんし。

クアンさんの早とちりだったんですよ。きっと」

斬魔刀が選んだのは自分では無かったという安心感。

なるべく声が弾まないように気をつけながら、京介は斬魔刀から手を離して座る。

クアンの返事が聞きたかったのだが、喋る気配が中々見られなかった。

「そうですか。となれば、仕方が無いですね」

暫しの沈黙の後、クアンは残念そうな素振りさえ見せずにそれだけ言うと、すつくと立ち上がった。

京介もやっとわかって貰えたと思いい、安堵の表情を浮かべる。

だが、クアンが考えていた事は全く別の事だった。

「新たな担い手が現れる迄の間は、この地に留まり奪還者と戦わなければなりません。少なくとも、昨夜の奪還者は必ず現れます。次は逃す事が無い様になければ」

京介はその言葉の意味が脳を駆け巡った瞬間、頭がくらくらしてきた。

「大丈夫ですか京介、顔色が優れないようですが」

「い、いえ……そんな事よりもクアンさん！この地ってまさかココの事を言ってるんじゃないですよね!？」

京介は、茶の間の畳を指差した。

無言で頷くクアンを見て、さぁっと血の気が引いて行くのが自分でもわかる。

まさか、この家を奪還者と斬魔刀との戦いの主戦場にでもすると、本気で言っているのだろうか。

「だ、だだだだって、奪還者達は斬魔刀を奪いに来るわけなんですよね!」

「はい、そうですよ」

「そそそそれじゃあ、奪還者は此処に来るって事じゃないですか！」

「でしようね」

「でしょうねって……こゝ、ここは俺の家ですよッッ!？」

「確かに、ここに住んでいるのは京介ですから、京介の家だと思いますが?」

「ここまで温度差の激しい会話はそうそう有る物ではない。」

「そりゃまあ、そうですね。って、ちょ!ちょっと待って下さい!

何もこの家で戦わなくて良いじゃないですか!

斬魔刀をクアンさんが抜けばいいだけの話じゃないんですか!?  
担い手だったんですよ!？」

「それは生前の私です。今の私は斬魔刀を守る騎士に過ぎません。  
斬魔刀を持つことが出来るのは、新たな担い手だけなのです」

「~~~~~!?!」

京介は、思わず叫びたい気分になった。

自分自身相当ヒートアップしている事を自覚しながらも、  
どうにも抑えることが出来ない。

「こんな家が密集しているような所で戦うだなんて!冗談じゃないですよ!」

「私は冗談は好きではな」

クアンが幾度も言っている常套句とも言えるべきそれを遮って、  
京介は続けた。

「知ってます！それでも、冗談じゃない！それこそ、被害が周りにも広がるじゃないですか！  
それ位クアンさんだってわかってるでしょう!？」

何分奪還者はこっちの常識が一切通用しないような化け物なのだから、

名後家の周辺、いやそれどころか鴻神市全てに住んでいる住民の危険。

それだって十二分に危ぶまれる。

「だからこそ、境界があるのではないですか。

境界の意味……忘れたわけではないでしょう?」

その言葉が、沸騰していた京介の頭に浸透する。

「え……た、確か境界の中での破壊行為は反映されない……だったかと」

「ええ、その力があるからこそ、今まで人間の目に付く事を抑える事が出来たのです」

「……」

「この境界は、言わば奪還者を困う為のオリのような物。境界を使えば、この世界に一切傷跡を残す事無く、

奪還者を閉じ込める事が出来、奪還者を討つ事が出来ます。

それには、やはり京介の力が必要なのです」

「……ッッ!」

「兎に角、こうなった以上は致し方ありません。  
京介。是非奪還者を殺す為、手を貸して下さい」

京介はその言葉に身体を強張らせ、俯いた。  
クアンの透き通った綺麗な声が、俯いた京介の頭に降り注ぐ。

「本来なら、これは私達と奪還者だけの戦い。  
京介を巻き込んでしまう事になるのは、本当に不本意だと思っています。  
ます。

ですが、京介の手の元に指輪がある今は、京介の助けが必要なので  
す。

どうか

京介は、答えない。

クアンの言葉の奥にある、自分を待ち受けている運命。  
それを考えていた。

例え斬魔刀の担い手では無いと言えども、

自分は奪還者を境界に閉じ込める役目を果たさなければならない  
と言う。

それは、生半可な心で答えるべき物では無かった。

『やってみよう』

だなんて軽い気持ちで背負うには余りにも大きく重い物。

それだけに、今の自分が受け入れるには、覚悟が足りなかった。

現状において、その言葉はまるで……死刑宣告にも等しい。

「それは……………俺に死ねって事ですか……………」

京介は俯いたまま、やっとならばそとだが口を開いた。

それはとても弱々しい、怯えも含んだような声。

覇気の欠片も無い声だった。

「いえ、そうではありません。護って貰いたいのです。奪還者から

「  
京介は、クアンの言葉を遮った。

「どちらにしたって同じ事じゃないですか……俺に、一体何が出来るって言うんです……？」

俺は、只の高校生なんです……何も……何も出来やしませんよ……」

「境界を作る事が出来ます。現状では京介のみが行える唯一無二の

「  
「そういう事を、言ってるんじゃないんです！」

京介の叫びが茶の間に響いた。

……互いに無言の時間が続く。

雨の音が茶の間に染み入るように鳴っていた。

クアンは目を瞑り、何かを考えているかのように。

京介は俯いたまま黙りこくっていた。

「  
「どうあっても手伝う事は出来ない、と。そう仰りたいのです  
ね」

クアンは暫くの沈黙の後、口を開いた。

「  
「……こんな事言ったら、軽蔑されるかも知れませんが……。死ぬかもしれない……。あんなのと戦うなんて……。俺にはとても」

京介の頭に、昨夜自分に襲い掛かってきた奪還者の貌が浮かぶ。あの時、自分が明らかに喰われる側だという事を思い知らされた。自分程度の力では太刀打ちすら出来るわけが無い。対峙した刹那、その体は奪還者の牙に貫かれ、爪に抉られながら肉塊へと化すだろう。

恐怖心が京介の体を蝕み始める。

その恐怖心は昨夜奪還者に害意を叩きつけられた時と同様か、それ以上だった。

昨夜自分が行った事がよく自分で出来た物だと思える。

あんな化け物に、何の知識も無いと言うのに良く襲いかかれた物だ。

そして、新たな恐怖。

『もし、自分の為に他人に被害を被らせる事になったのなら』

俯いたまま、両腕で自分を掻き抱くようにして身を竦める京介。その体は微かに震えていた。

「そうですか、わかりました」

クアンは目を瞑ったまま、京介の真意を理解したかのように頷いた。

それでも京介は顔を上げなかった。

「無理強いをさせても致し方ありません。

そついった精神状態では、境界を発動させた所で寧ろ危険ですから。無理を言って申し訳ありませんでした」

「……」

クアンの口調は、責めるでもなく非難するでもなく淡々とした物だった。

それがより一層京介を惨めな気分させる。

「さて、奪還者が直ぐにでも現れる可能性は高いと思います。今回は一匹、然程手こずるとは思いませんが、今の内におこななければならぬ事もあるでしょう」

クアンは柱に掛かっている時計を見る。

時計の針は、何時の間にか昼前を指し示していた。

「もう、こんな時間なのですね」

終始無言のまま、俯いている京介の前をクアンはすたすたと歩く。京介は僅かに顔を上げた。

座卓の前でちょこんと正座をしたクアンを京介は黙って見つめるのみだった。

「……………」

座して何かを待っているクアンと目が合う。

『どうしてそこに座っているのか』

京介の目がそう訴えていると思ったのだろう、クアンは口を開いた。

「いえ、もうお昼の時間のようですから。昼餉の時間ですね」

「おひる……………」

「ええ、お昼です」

良く見れば、クアンの座っている場所は、朝食の時と同じ場所だ

った。

つまり、そこに座って昼食が来るのを待っている、という事なのだろう。

しかし、京介は一向に空腹感が無かった。

実際、空腹感はあるのかも知れないが、それでも食欲は減退しきっていた。

冷蔵庫の中身は、朝食に使った為に殆ど残っていない。

となれば、京介が買いに行くしか無いという事になる。

(こんな時まで腹が減るのか……)

京介はクアンのその強靱な精神を呆れる反面、羨ましいと思えた。

「……………わかりました。買って来ます……………」

京介は立ち上がり、二階へと上がって行った。

「ええ、宜しくお願いします」

その背中にクアンは一声かけた。

京介からの返事は無かった。

自室に入り、寝巻きから私服へと着替える。

上着を脱いだ時、視界に左手の指輪が入った。

呆然とその指輪を見つめている内に、京介の中に複雑な感情が生まれる。

「……………くッ！」

思わず、指輪に手を掛けて全力を込めて引つ張った。

それこそ、指が取れても構わないという風に。

それでも、指輪は動かなかった。

「……………」

京介は、一つ大きなため息を吐いて、服を着替えて財布を手にとった。

重々しい足取りで階段を降り、玄関の戸を開ける。

外は曇天の中、依然雨脚が強く降り注いでいた。

只でさえ気が重いというのに、この雨を前にすると尚気が重くなる。

「それじゃあ……行ってきます」

「はい、行ってらっしゃいませ」

傍らの傘差しから傘を取り上げ、雨空に向かって差す。

土砂降りとも言える雨の中、京介は外へと出かけて行った。

茶の間では一人残されたクアンが、京介が出かける前と同じように正座をしていた。

斬魔刀を見据えている。

斬魔刀に嵌っている石が、一つ煌く。

まるでクアンに何かを伝えているように。

そして口を開いた。

「京介、何が貴方をそうさせているのかは分かりませんが、何があっても京介の助けが必要なのです。もし、協力して頂けないとなると……」

と誰もいない茶の間で、まるで此処には居ない京介を窺めるかの  
よう。

## 斬魔の剣 十畳間にてゝ 11・雨と友人、そして

名後家から歩いて15分程の所にスーパー『オリマート』がある。

折りしも近年の原油・小麦原価高騰による煽りを喰らってか、今の今まで手軽に買う事の出来た商品は軒並み値段が底上げされている為、  
客足は遠のき、ここから更に離れた薄利多売を武器とする所謂パワーマーケットと呼ばれる巨大マーケットに、  
客が奪われている事が一目でわかる程だった。

京介の気分は家を出てからも一向に良くならないまま、下降線の一途を辿っているのみだった。  
手に持っている傘は、振り続ける雨を受け止め、手に確かな重みを感じさせた。

京介は、道中水溜りに足を漬ける事もお構いなしに、  
ただぼんやりとそのスーパーの自動ドアに体をぶつけながら潜って行った。

備え付けの買い物籠を手に取り、献立も何も考えず、  
ただ目に付いた食材を買い物籠に入れていく。

実に無計画な買い物だった。  
他の事を考えようにも、その思考はクアンの言葉と奪還者の恐ろしい貌に侵食されて行った。

それを振り払い脳裏からかき消そうにも、より鮮明かつ克明に頭の中を巡って行く。

この週末に起きた出来事で、すっかり京介はやられてしまっていた。

今店内中を走り回りながら、目に付いた客全て助けを請う事をしていないのが自分でも不思議だった。

ただ、例え助けを請うた所で、その人間が何の役にも立たない事が分かっていたからかもしれない。

……無闇に死体を増やす必要は無いのだから。

「……」

ふと、母親に菓子を泣きながらねだっている幼児が視界に入った。服の裾を掴まれている母親の顔は向こうを向いていた為、顔は見ることが出来なかった。

続けざま、京介は店内を見回した。

このスーパーに居る客達、それぞれに人生がある。

客達だけでは無い、鴻神市内だけでも相当な人数の住民が生きている。

平和に、爛れそうなほど穏便に。

誰にもそれをかき乱し、剥奪する権利など持ち合わせては居ない。それが例え人外の域を出、人の理など知らぬ、人の手には負えぬ唯の獣であっても。

それを防ぐのが自分に与えられた役目なのかと思いつながらも、ならば自分の平穏な生活を乱す権利だって、誰にも無いはずなのにと京介は苛立った。

今や名後京介の平穏な生活は乱されようとしている。

いや、確実に乱されている。

見るも美しい騎士と、醜いケモノによって、  
禍々しくも神々しいあの剣と、指輪によって。

店内を呆然と見つめながら、周りにいる人達と自分との間には、  
例えようのない隔たりがあるような気がしていた。

それはもう決して取り除くことの出来ないような、絶対的な壁と  
も言える隔たり。

京介は知らぬ内に、手に持っていたジャガイモを強く握り締めて  
いた。

自然に手に力が入っていたのだろう、手には血の気が失せていた。

「お客さん、お買い上げて貰わないと困るんですがね」

と男性店員と思しき人間から声を掛けられる。

反射的に自分の握っていた芋を見、店員に謝罪しようと振り向い  
た。

「……あ」

振り向き、京介は呆気に取られた。

「こんな日にも買い物とは。主婦の鑑みたいな奴だなしかし」

そこには……辻村が居た。

眠たげな目も、人をからかうような表情も、

何一つ変わっては居ない辻村がそこには居た。

「……」

「いやいや、今姉貴が帰ってきて買って買物頼まれたんだけどさ。折角の休日くらい寝かしてくれりゃいいのに、なんで俺が姉貴の買物をしらないとならんのかね」

やれやれという素振りを見せる辻村に、京介は返事をする事が出来なかった。

久方ぶりと言うには、たかが一日半程度の間隔しか空いていないと言うのに、

京介には数年ぶりと感じられる程長い事会っていないように思えた。

「ん？どした京介。なんとも言えない顔してるけど」

「え……ああ！いや、なんでもない」

無意識に、鼻の奥がつんとしてきたのを誤魔化す京介。

咄嗟に指輪を辻村に気付かれないように、左手をポケットに突っ込んだ。

辻村は京介が左手を隠した事には気付いては居ないようだった。

「……ならいいけどな。さて、さっさと買物済ませるか。

京介、悪いけどカレー粉って何処にあるんだ？」

辻村は姉から渡されたのだろう、メモ紙を手に持っていた。

「ああ。カレー粉なら、こっちだな」

カレー粉のある場所まで誘導した。

両手に持った異なるメーカーのカレー粉を交互に見ながらも、姉に対してまだ悪態を付いている。

京介もその悪態に相槌を打ちながら、自分の買い物始める事にした。

「大体、自分が食うんだから自分で選べって話なんだよな。これで文句を言ってきやがったなら、どうしてやるうかね……ったく。」

……なあ京介。これ、どっちが美味しいんだ？」

「ん？ああ、辛いのが好きならそっちの方が良いんじゃないかな。辻村の姉さんは確か大学生、だったっけか」

「そか。じゃあこれにするかな。」

ああ、来年卒業でさ。もう仕事も決まったもんだから適当に遊んでんだ。

なら俺を買い物に行かすなって話だよ……。さばの水煮は、これか？」

「へえ、何の仕事に決まったんだ？」

……それは味噌煮。水煮はこっちだぞ」

「ん？ああ、ラベルに書いてあったな。悪い悪い。」

就職先、銀行員だってさ。絶対面接官は騙されたんだ、そうとしか思えん」

「はは、そんな事無いんじゃないかな……無いと、思うけど……」

京介は、苦笑いをしながら辻村の姉を思い出した。

人様の姉弟を悪く言うのは京介の意義には反するが、辻村の言う事も分からなくも無い。

そんな人間ではあった。

『見た目はチート、中身もチート』

が辻村のかねてよりの姉評だった。

「ああ、気にすんなよ。そうじゃなくても姉貴は」

辻村の悪態は終わる事が無い。

京介は、そんな悪態をついている辻村を見て、少し羨ましくもあった。

一人っ子にとっては、例えなんであろうと兄弟を持っている人間は羨望の対象になる物だ。

辻村が買い求めようとしていた物の場所は、全て京介が教えてあげる事で完遂する事が出来た。

京介の会計を辻村が待ち、二人並んでスーパーから出て行く。

京介の買い物の量は多く、辻村の持っている量を遥かに凌駕していた。

指輪を隠すために、左腕はズボンのポケットに入れたまま、腕に通す形でビニール袋を持っていた。

それでも左手だけでは足らず、傘を持っている右腕にも袋を通していった。

「おまえ……そんなに食う奴だったっけか？」

「え？ああ……いやいや。殆どは作って冷凍庫で保存しておくんだよ。そっちの方が楽しさ」

本当は家に今居るはずの脅威の健啖家の為なのだが、適当な嘘を見繕った。

辻村はその言葉にやけに納得し、けらけらと笑う。

「ああ、生活のチエって奴か。はははっ、相変わらず所帯じみてるな」

「悪かったな、所帯じみてて」

京介は慥然とした表情をしながら、傘置き場から自分の傘を取り出した。

家から出る時より、その傘は軽く感じられた。

その事に京介が気付く前に、辻村が話を切り出してきた。

「そうだ京介、この後空いてるか？」

「え！？あゝこの後はちょっと無理……だな。無理だ、うん」

兎に角、買い物を終えた以上は早急に自宅へ帰らねばならないだろう。

家ではお腹を空かせた、にん……人間が居るのだから。

だが辻村は京介の言葉を聴いて、深くは言及せずに意外にもあっさりと降りた。

「そか。ならしょうがねえか、まあいいや。ほれ」

そう言って空いた手を差し出した。

「ん？なんだ？」

「途中までなら荷物持ってやるよ。それじゃあ傘も差し難いだろ」

「あ、成る程。悪いな」

と、京介は袋を一つ渡して横並びに歩く。

互いに一言一言交わしながら、それぞれの帰路に向かう。辻村と帰るといふのは、それ程珍しい物ではなかったが、今日だけは何か特別な事に思えた。

月並みな表現だが、この週末に起きた事ですっかり参っていた所に、友人と会えた事が何より嬉しかった。

友人と言う者は本当に有難い物なのだと改めて認識した。

お陰で、陰鬱だった気持ちが幾らか和らいでいた。

そんな気持ちを抱えて歩いていると、さっきまで黙っていた辻村が気だるそうに口を開いた。

「……………なあ、京介」

「ん……………」

京介は辻村の方を向く。

「まだるっこしいの嫌いだから、手っ取り早く言うけどさ。お前……………なんか、あつたんだろ？」

この言葉を聞くのは、学校を含めて4回目だった。

それだけに、京介は三回目までと同じ言葉で返す事にした。

「い、いや？何も」

が、辻村が少しの苛立ちを込めて追い討ちをかけていく。

「はあ……あのなあ、何にもねえ奴つてのは。  
そんな顔もしねえし、そんな声も出さねえもんなんだよ」

「……」

京介は思わずその場で歩くのを止めてしまう。

その為、少し追い越した形になった辻村も足を止め、大きく溜め息を吐いて続けた。

「ここ一週間、ずっと変じゃねえか。

休みに入ったら少しはマシになってると思ってたけどよ。

ま、何があったかは……知らねえけどさ」

「……」

「言いたくないんなら、無理に言えとは言わないさ。

でも、少なくとも明日からは学校じゃぼけっとしないようにしろよ？

そうすりゃ、俺も五月蠅く言われなくて済むからな」

辻村なりに京介の事を慮つての事なのだろうか。

「五月蠅いって……誰にだ？」

京介が問い掛けるが、辻村はその言葉を無視して再び歩き始めた。

「ま、兎に角。お前は何時ものようにアホ面下げてるのほんとして  
るのが良いってこつた」

「……あ、ああ。分かったよ……アホ面って……」

京介も、辻村の後を追うように歩き始める。

……辻村の後ろ姿を見て、京介は一つの疑問を持った。

【もし、辻村が自分のような境遇になったら……果たしてどうするだろうか】

それはもしかしたら聞くまでも無い質問なのかも知れない。

辻村は自分とは違い、普段は飄々としているが、いざと言う時にはやる男だ。

自分が持っていない物を持っている奴と比べてもしょうがないのかもしれない。

が、それでも京介は聞かずにはいられなかった。

「……なあ辻村。一つ聞きたいんだけどさ」

「ん？金なら貸すほどは持ってねえぞ」

「いや。そんなんじゃない、例えば、例えばなんだけどさ……」

その……自分が犠牲になって……皆が助かるって言われたら……」

「ん？良く聞こえ無かった、もう一回言ってくれよ」

京介の声色が弱々しくなってしまった事と、雨音によって、

辻村の耳には聞こえなかったようだった。

辻村はゆっくりと振り向いて、耳を傾けるような素振りを見せた。

京介は煩わしさの為に歯噛みし、堰を切ったように声を上げた。

「自分が死んで、皆が助かるならっ。……皆が……助かるなら……」

そう言われたら辻村……お前、どうする？」

「……はあっ？何だそりゃ、今度やる映画か何かの話か？」

それにしたって余りにもベタな展開だなあ、脚本家の腕が悪いなそりゃ」

辻村の言う事も尤もだった。

確かに、京介の言っている事は普通なら映画か何かの話だと思うだろう。

だが、京介にとってはこれ以上無い程に切迫した質問だった。

例え古くからの付き合いでもある辻村であっても、全てを言うわけには行かなかったからこそ、

最大級のオブラートに包み、要約をした質問をせざるをえなかった。

「頼む！……頼む、答えてくれないか……」

京介の余りに切羽詰った口調に気圧されたのだろう、

辻村も少し考える素振りを見せた。

「しょうがねえなあ……そんで？もし、犠牲にならなかつたらどうなんだ？

皆は死ぬのか？」

「あ、ああ。多分、いやきつと……死ぬ、と思う……」

それだけ言つて、京介は俯いた。

後は辻村の答えを待つだけだった。

が、辻村は京介の思惑とは別に、即答に近い早さで答えた。

「ふうん。ま、考えるまでも無いな。俺は両方だ」

「……………は？」

「聞こえなかったか？もしそんな事になっても、世界も助けるし、俺も死なない。」

「そうすりゃ万事解決。何にも考える必要は無いつて事だな」

と言うだけ言って、再び後ろを振り向いて歩き出した。

「あ……いや、そういう事じゃなくてさ……」

「大体、ああいう映画の0・01パーセントとかって絶対100パーで成功するよな。」

「まあそういうもんだからしょうがないとはしてもなあ……」

京介を置いてけぼりにし、辻村の話はその歩みと共にどんどんと一人歩きを始めた。

京介は一瞬呆気にとられたが、辻村がどんどんと先に行ってしまう為、慌てて追いかける。

「お、おいおい……俺の話はまだ終わって無い」

「ま、何があっても助けてやっから。感謝しろよ」

辻村は京介の前を歩きながら、気だるそうにそんな事を言った。

京介は、その言葉に呆然とし、再び歩みを止める。

「……………」

「そうだな。それじゃあ感謝の印に、京介には毎日コーヒー牛乳でも奢って貰うか。」

上杉の奴は焼きそばパンだな、後は宮井と榎倉と……おっと、沢渡には何をたかってやるのかな」

辻村は、なにやら助けた後に友人連中にたかる算段を始めていた。その背中を見て京介は何か、上手く言葉には出来ないが……。何かわかったような気がした。

空は相変わらずの曇天、雨は強く降り続けている。

が、同じように曇っていた京介の心には一筋の光明が現れた。

それはとても細く、小さな光明だったが、光が差した事は確かだった。

「はは……そうか……。ははは」

京介は、弱々しく濁いた笑いを漏らした。

その笑いの中に含まれた物は複雑だった。

だが、決して負の要素は含んでは居なかった。

辻村の出した答えは実に馬鹿らしい答えだったかも知れない。

だけど、京介が悩んでいた事はその馬鹿らしい答えで解決の糸口を掴んだのだから、

丁度おあいこと言える程の馬鹿らしい悩みだったと言えるだろう。

「それにだ、俺が死んだらクラス中、いや学校中の女生徒が涙に暮れるだろう？」

それだけはしちゃいけないだろうが」

「はは……良く言っよ」

「まさか、お前こんな事で悩んでたんじゃないだろうな」

「いや、そうじゃないよ。ちょっと聞いてみたかっただけだって。

それに、俺は別に何かに悩んでたわけでもないから安心してく

ッ！」

その時、京介は微かな違和感を覚えた。  
ポケットの中に入った左手から、何かちりつくような感覚が伝わって来たからだだった。

それはとても小さな物だったが、気になって仕方がない。  
まるで最大限の不安感を、最小限に凝縮して手に持っているような感覚。

「ん？どした？京介」

「あ、いや。なんでもないよつじむ……ら……！」

誤魔化そうと辻村の顔を見た瞬間、

辻村の頭越しに映ったモノを京介は見てしまった。

辻村の頭越しには、立ち並んでいる民家の屋根が見える。

その中の一軒の屋根の上に、何かが居た。

黒く、大きな………ナニカ。

距離と大きさから言って、大型獣のような大きさだった。

生えている足は四本ではなく、六本足のように見える。

頭は三又になっており、中央の頭には何か白い布のような物が見えた。

そう、それはまるで昨夜見たような

その言葉が京介の思考を支配した時、

トサツツ！

京介の右手に持っていた買い物袋が指から抜け落ちた。

沢山の食材が詰まったビニール袋は直ぐに水浸しになり、雨に晒される。

急に袋を落とした京介に対し、辻村は呆気に取られていたが、ゆっくりと京介に近づいて、京介が落とした袋を拾い上げて中身を確認していた。

「おいおい、何落としてんだよ。全く、玉子とか割れてねえだろうな……」

辻村の慌てた声も、京介には届かない。

京介の全意識は、遠方に居る奪還者に向けられていた。

奪還者の居る場所は、遠い。

だがその距離でも奪還者の眼と、京介の目は絡み合っていた。

京介の見開かれた目には、奪還者が映りこんでいる。

明らかに奪還者は京介を見ている。

奪還者を視認した時から、左手から伝わって来た違和感は消え失せていた。

指輪は、この事を京介に教えたかったのだろうか。

奪還者が近づいている事を教えるリーダー的な役目も持っているのだろうか。

だが、例えそうであっても肝心の京介はすっかり混乱し、思うように動けなかった。

自分は、今どうするべきなのか、それすらも分からない。

直ぐにでもこの場から避難しなければ、二人とも奪還者の餌食になってしまう。

かといって、今この場で避難を勧告してしまえば、それは即ち辻村に奪還者の存在を知られてしまう事になる。

それだけは絶対に避けなければならない事だ。

辻村の為に、日常という誰にとっても掛け替えの無い物を乱さない為に。

(……どつする……どつすればいい……どつしたら！)

とはいえ、この二つを同時に解決出来る方法など、存在するとは

いや、一つだけ存在した。

### 『境界の発動』

京介は、どうにか自分を落ち着かせる為にもポケットの中に入った左手を、強く握り締めた。

僅かだが、冷静さを取り戻すことが出来た気がした。

しかし、今この場で境界を発動する事に、一抹の不安を感じる。

(もし、辻村の目の前で境界を発動してしまったら……どうなるんだ……)

もし境界を発動し、自分が境界の中に入った場合、辻村の目の前に居る自分は一体どうなるのか。

それが分からなかった。

自分が瞬時に消えてしまった場合、それはどう考えても日常起り得ない事だ。

辻村まで巻き添えにしてしまう事と変わらない。

それに、もし辻村も境界の中に入ってしまったら……。

それも同じ事だった。

更に、自分が発動できる境界の範囲は、余り大きくは無いとクアンが言っていた。

その範囲内まで、奪還者をおびき寄せなくてはならない。

そのリスクは、現状においてとてつもなく大きい。

それでも、何があろうと目の前の友人を危険に晒すわけにはいかない。

「……………くっ！」

どうにか喘ぐように声を絞り出す京介。

辻村も急変した京介の態度に不審がってはいたが、

それよりも落としたビニール袋の方が気になっていたようだった。

「どうした京介、大丈夫か？後玉子割れたぞ、どうすんだこれ」

京介がこの状況を打破しようと考えている間にも、奪還者は確実に京介に狙いを定めていた。

そして、重心を低くして飛び掛るような構えを見せる。

それは昨夜見た構えと寸分違わぬ物だった。

「……………ツッ！」

京介は、唾を飲み込んだ。

「京介。何をそんなにびびくった顔してんだ？ずっとあっち見てるしよ。」

何かあんのか？」

辻村は、京介の見つめる方向に何かあるのかと思い、振り向きうとした。

それとほぼ同時に、奪還者は京介に向かって一直線に飛んだ。

辻村が後ろを振り向いたその刹那、右方から何か飛び上がるのを京介は見た。

その何かは、奪還者には劣る物の、尋常ならざる速度で飛来していた。

そして奪還者を空中で迎撃するかのよう衝突する。衝突した瞬間、京介には飛んできた物の正体が見えた。

その何かは藍色の鎧を身に纏い、長い髪をたなびかせていた。

両手にはその者の身長よりも長く、大きい槍を中段に構え持っており、

槍は奪還者の脇腹に深々と貫かれていた。

奪還者へと飛来した物の正体は、間違いなく クアンだった。

クアンは、奪還者を槍で貫いたまま空中で京介の目の前から消えた。

まるで一陣の風が奪還者を攫って行ったかのように。

辻村が後ろを振り向いた時、そこには何も無かった。

全ては辻村が後ろを振り向く間に、終わっていたのだった。何も無いことを確認して、再度京介の方を向く辻村。

その顔は、ずいぶんと拍子抜けした顔だった。

「なんだよ……何にもねえじゃねえか。何かありがたい顔しやがって」

京介はまだ呆けたような顔をしていたが、辻村の声によって我に返った瞬間、

弾かれたように駆け出した。

「お、おい？京介、どした？」

「……辻村っ！それ、姉さんにでもあげてくれ！それじゃ！」

「お、おい！京介！？キョウスケエ！」

辻村は慌てて呼び止めるが、その声を背中で聞きながら別れを告げて京介は走った。

クアンと奪還者が消えていった方向へ、ただ闇雲に。

傘を差している事も煩わしく、京介は傘を閉じる。

そうでなくても、既に京介の全身は傘が無意味と言えるほどに濡れていた。

余りにも必死に走り、傘を大きく振っていた為に、傘は本来の役目を果たさずにいたからだだった。

そうやって全身濡れ鼠になりながら走り、交差点を抜け、大通りに出た。

目の前を数多の車や通行人が通り過ぎる中、必死に目を凝らして辺りを見回す。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

京介の呼吸は荒い。

周囲を見回しても、クアンや奪還者らしき物は見えなかった。

濡れた前髪をかき上げて、再び走り出す。

暫く走っていたその時、

「……ッ!?」

再び、左手に違和感を覚えた。

京介はそれを待っていたかのように、慌てて再度周囲を見回す。

道路を挟んだ向かいにある「鴻神中央公園」という名称の公園の入り口が目に入った。

普段なら、家族連れや、子供達の遊び場に活用されているため休日は実に賑やかな物だが、

こつした天気では活気は微塵も感じられない。

寧ろ、何人たりともこの先へ立ち入らせる事を拒んでいるようにさえ思える。

車道を横切り、急ぎ足で公園の前に立つ。

ちりつくような感覚が増大していく。

京介は手に持っていた傘や、買い物袋を歩道の隅に置き、公園の奥へと目を凝らした。

もしこの感覚が間違いではないのなら、奪還者は此処に居る。

そして、奪還者を迎撃したクアンもこの中に居る筈なのだ。

誰も居ないであろうこの公園の中に。

京介は一つ身震いした。

左手を包むようにぎゅっと握る。

思わず踵を返したくなるが、頭の中で辻村の言葉を繰り返し、

なげなしの勇気を奮い立たせる。

『何があっても、助けなければならぬ』

京介は指輪を見つめ、

「頼むぜ……」

と呟いた。

一体何を頼むのか、京介自身も良くは分かっては居なかった。

京介は覚悟を決め、ぎこちない足取りで公園の中へと入って行った。

京介は、一步、一步周囲を見回しながら公園の中を進んで行った。

雨は依然として止む事を知らない。

京介の体を貫かんばかりに強く叩いては、京介の氣勢を削いでいく。

普段なら、子供達が遊び道具として使っているブランコやシーソー！。

その他の遊具も、こういう時で無ければ子供心をくすぐる楽しい物に見える筈なのだが、

空は依然として曇天、そして降り注ぐ大量の雨。

この仄暗い中では、これらの遊具は楽しい所か気味悪くさえ思えてくる。

その気味悪さは、自分の左手から感じる不安感をより増大させる一端となっていた。

そんな中、公園内をクアンと奪還者の姿を探して歩く。

この鴻神中央公園は、この辺りでも郡を抜いて面積の広い公園である。

それだけに、植樹林等もある為に入り組んだ場所といえる。

公園の中程まで来た頃だろうか。

植樹林の中に、ちらと蒼い物が視界の隅に入った。

「……………」

その方向に目を向け、更に目を凝らす。  
木と木が重なり出来ていた死角を避ける為に少し横に動くと、その蒼い物を確認する事が出来た。

そこには、クアンが立っていた。  
その全身は正に濡れ鼠と言わんばかりに濡れており、所々鎧の下の服が肌張り付いている。

身に纏っている鎧は雨粒を弾き、雨の中であってもその輝きは失われる事は無かった。

(居、居た……)

植樹林に入り、ゆっくりクアンへと近づいていく。  
その度に、左手からくるちりつきは増大していった。

クアンの表情は前髪に隠れ、京介には窺い知る事は出来ない。  
まるで俯いているかの如く地面に視線を落としている。

クアンと京介の間には茂みが有る為、その顔を向けている場所に何があるかは京介からは見えない。

クアンは地面から一向に視線を動かすようには見えない。  
クアンとの距離が更に縮まった時、

「京介」

京介の居る方には顔を向けずに、クアンが口を開いた。  
その声は、周囲の雨音が耳に障る程だというのに、京介の耳へと刺さるように届いた。

その口調は朝となんら変わっては居ないが、京介には一番冷徹な

声色に聴こえた。

まるで悪い事をしているのを咎められたような気分になり、背筋を伸ばし声も上ずってしまう。

「は、はいっ！！」

「何をそんなに怯えているのです。それよりも、来てくれたのですね」

「え、ええ。アレを、クアンさんがこっちへ持っていくのが見えた物ですから。

それで、気になって此处に……」

「心変わりでも、ありましたか。それでも殊勝な心掛けと言えるでしょう」

「そ、それはどうも。所で、アレは……？」

京介は、クアンが槍で貫いた奪還者の行方を問う。

クアンはその問いには答えずに、まだ地面を見続けていた。

雨が幾筋もクアンの頬を、首筋を伝い、下へ流れ落ちていく。

京介もそれに釣られるように茂みを覗き込んで……思わず一歩後ずさった。

少し深いぬかるみに足を踏み込んだらしく、泥水が跳ね上がる。

「！く、クアンさん！こ、こいつ……」

助けを求めるかのように、京介はクアンを見た。

「……………」

京介が見つめる先、即ちクアンが見つめていた所には、先程京介に向かって飛び掛ろうとし、それをクアンに迎撃される形になった奪還者が仰向けに倒れていた。

胴体部には、クアンの槍が刺し貫かれたままになっている。

一見、槍が地面から生えているように見える。

奪還者は、さっきの一撃が致命傷だったのか、身動き一つする様子も見られない。

中央の顔に貼られている白い布から覗かせた顔は、肉食獣のような大口を限界まで開けている。

大きく開かれた両前足も、その槍が与えた激痛を物語っているようだった。

「死んでる……んですか？」

おずおずとクアンに問い掛ける。

「ええ。殺しました」

微塵の感情の揺らぎも無く、クアンは告げた。

余りにも淡々とした言葉に、京介はクアンの横顔を見て寒々しささえ覚える。

「京介が出かけている間に、再び斬魔刀の前に現れたのです。そして交戦している最中、再び逃走を図ったのでこうして追いかけた次第です」

京介は、再び地面に倒れている奪還者に目を向けた。

その身を曇天の下に晒し、雨を全身で受けている。

おぞましい程肉感的な漆黒の身体に水滴は滑り流れ、地面へと落ちる。

紛れも無く奪還者は実在しているという事を実感してしまう。

「さて。京介、境界を発動して下さい」

「……え？」

急な提案に、間抜けな声を出してしまう。

「今この辺りには人の気配がありません。例え刹那の間であろうと、奪還者が此処にいるという事など絶え難いのです。ご理解、頂けますね」

「は、はい。わかりまし あ……れ？」

京介はクアンに気圧され、促されるように境界を発動しようとした。

その時、まだ指輪から発せられる警告のような物が一向に収まっていけない事に気付いた。

咄嗟に視線を奪還者へと向ける。

動く様子は……見られない。

やはり絶命しているのだろうか。

だが、指輪から放たれているこの感覚が収まっていないのはどういう事なのか。

この感覚は、奪還者とは関係ないのだろうか。

それとも、他の何かが……。

「どうしたのです京介。早く境界を」

京介に境界を発動させる事を急かすように、クアンが京介へと視線を移した……その瞬間。

クアンの右腕が霞む。

手前に真つ直ぐ伸ばされたその腕には、

絶命したと思われていた奪還者の右肩にある頭があった。

奪還者の頭の内一つ、右肩にあった頭が歪に伸び、鋭い牙をクアンの右腕に突き立てていた。

肉を抉るような不快な音が腕から発せられた。

クアンの腕からは鮮血が迸り、雨に流されて地面へと落ちる。

「ひっ！？く……く……クアンさん！」

突然の出来事に、京介は狼狽する。

しかし、その京介を無視するかのように自分の腕に噛み付いている奪還者を見ながら呟く。

「……走狗が……」

その声には、怒りと憎悪が込められている様に感じる。

それは腕を噛まれている事など微塵も気にしてなどいないようだった。

腕を振り払いもしなければ、奪還者を引き剥がそうともしない。

「さては、京介をおびき寄せる為に仮死を模したか……」。

この程度で打尽に出来るとも思ったか、全く以って度し難い」

奪還者を嘲るかのような口調でクアンは続けた。

そして、腕を噛まれたまま京介の方を向く。

「どうしたのです京介。早く境界を発動しなさい」

「え……あ……」

京介は、噛み付かれているクアンの腕に釘付けになっていた。目の前で起こっている血生臭い光景に、ショックを隠し切れない。クアンの出血の量は夥しく、一向に止まる事を知らない。

「私の事は構わずに、早くするのです。貴方はその為に来たのではないのですか」

京介は、その言葉にはつとずる。

(そつだ……俺は……俺は……)

自分が一体ここに何をしに来たのか。  
興味本位の物見遊山気分で来た訳じゃない。

自分は、自分が出来る事をする為に。  
己の本分を成し遂げる為に。

(助ける為に……来たんだ)

京介は頷き、目を瞑って境界を発動させることに全神経を集中させた。

左手を前に出し、掌を上に向ける。  
右手は左手首を握り、左手を支えるようにした。

頭の中で、朝の時と同様に直方体を思い浮かべる。

左手に嵌められた指輪が、それに共鳴するように淡く光った。

「ぐ……くう……」

得体の知れぬ力によって精神力が削がれて行く感覚が全身を覆う。思わず呻き声を出してしまう。

……掌に、小さな方陣が現れる。

そして、方陣の上に直方体が現れた。

京介の掌に生まれた境界は、ゆっくりと回転しながら広がっていく。

境界を発動した事を察した奪還者は、もがきだす。

この場から逃げ出そうとでも言うのだろうか。

だが、その身を貫いている槍は幾らもがこうとも外れなかった。

クアンは、自分の腕に噛み付いている奪還者の頭を掴む。

クアンの細く綺麗な指が、奪還者の頭に食い込んでいく。

「……どうした。私を逃がさぬ為に牙を突き立てたのだろうか？」

その言葉は絶対零度の冷たさを持って放たれた。

その間にも、境界は京介を中心として約二十立方メートル程の大きさになり、境界の拡大は収まった。

青白い世界に、淡い光が雪のように降り注ぐ。

その代わり、境界の外では変わらずに降っている雨は、境界の中には入っては来ない。

京介の作り出した境界の中には、京介とクアン、そして奪還者のみが存在していた。

削がれ行く精神の消耗に耐え切れず、京介は膝を付く。

荒く息を吐きながらゆっくりと目を開けると、

青白い光を受けながらクアンは京介を見つめていた。

「上出来です、もう私の介添えは必要なさそうですね。後は私が

」

京介をねぎらう様なその言葉と同時に、クアンは奪還者に噛まれている腕を力任せに振り上げた。

奪還者の体は、頑なに動かぬ槍を支点にしてクアンに引っ張られるままに腹部から下を引き裂かれる。

奪還者は括り付けられた槍から放たれ、ギユヂチツ！と耳障りな音が響く。

そのまま地面に叩きつけようと腕の角度を変えたが、

奪還者は反射的に噛み付いていた口を開けてクアンから離れる。

クアンの血と、その体に付いていた水飛沫によってアーチを描きながら、

空中で姿勢を変えて地面へと降り立った。

奪還者の巨体が降り立った事により、地面のぬかるみは大きく爆ぜた。

淡い光もそれに合わせて宙を大きく舞う。

クアンは血塗れになり、奪還者の牙によって引き裂かれた腕を槍に向かって伸ばす。

槍は地面から抜け、クアンの手に収まるように飛来した。

槍を手にしたクアンは、京介を庇うような位置まで移動し、槍を構え直す。

クアンと奪還者は、互いに身構え対峙する。

まるで昨夜の対峙を再現したかのようにだった。

奪還者の両肩にある四つの目、そして、白い布に覆われた二つの目……。

計六つの目は全てクアンに向けられていた。

右肩の頭は、伸ばしていた首をぎこちなく元に戻しながら、口の周りに付着していた血を長い舌で舐め取る仕草を見せた。

そして、二度三度と咀嚼するかにように顎を動かす。

噛み付き、離れた時にクアンの腕の肉を僅かだが持つていったようだった。

残りの二つの口からは羨ましそうな、獣特有の荒い呼吸音が聞こえている。

右肩の頭は、愉悦に歪んでいた。

奪還者はクアンに対して凄まじいまでの害意をぶつけながらも、裂けた下半身は収縮を繰り返して元に戻る。

その身に生やした六本の足全てを地面に食い込ませ、奪還者は低く身構える。

中央部と後部の足は地面を深く抉り、抉られた地面の周りには土くれの山が出来ていた。

クアンもそれに応じるかのように槍を垂直に振り上げ、深く腰を落とした。

不思議な事に、噛まれたはずの腕からは流血が収まり、

爆ぜたようになっていた腕は徐々に塞がれていく。

京介はまだ呼吸が収まっては居ないようで、片目を瞑りながらも事の一部始終を見ていた。

今は境界を維持する事に神経を集中している為、見守る事しか出来なかった。

「……剣の威を代る騎士の手により、散る事を誉れとするがよい。剣の威を狩る……奪還者よ」

クアンは静かに呟いた刹那、滑るように跳んだ。

それは蒼い風のようにさえ見える。

奪還者もそれに応えるように、周囲のぬかるみを盛大に跳ね上げながら跳んだ。

黒い風と、蒼い風が交錯する瞬間、クアンは正眼に槍を振り下ろした。

その動きは滑らかで、一切の曇りの無い動きと言えた。

ぬかるみを巻揚げながらブレーキをかけ、クアンは静止する。

奪還者は、クアンとは反対に速度を抑える事無く飛び続けた。

奪還者の射線上には……京介が居た。

京介がその事に気付き、体を強張らせようとした瞬間。

奪還者の体に、一本の筋が出来た。

そのまま奪還者の体は正中線から真っ二つに分離する。

それは京介の両脇を通過しながら蒼い炎に包まれ、一瞬にして灰に変わり四散した。

その灰も又、直ぐに掻き消える。

奪還者は、消滅した。

京介は後ろを向く事無く、奪還者が消滅した事を察知した。

その証拠に、左手から伝わっていた感覚が消えていた。

京介は終わった事を思い、一つ安堵の溜息を吐いてから小走りにクアンに近づく。

クアンは槍を地面に突き刺し、近づく京介を迎えるかのように向き直る。

京介はクアンの眼前に立ち、呼吸を整えながらゆっくりと口を開いた。

「はあっ……倒し……ましたね。これで……」

クアンは、無言のまま芝生の一本を抜いた。

そして京介の目の前に持って行く。

「この芝生の草を、一本抜いたからと言ってこの芝生を砂漠と呼ぶ事は出来ません。

それと同じ事です」

クアンは、奪還者を倒した事に何の感慨も無いようだった。

数ある奪還者の内の一人を始末しただけ。

その程度のようにだった。

「奪還者は自ずと現れます、その数は計り知れません」

京介は、僅かに高揚しかけた心を抑えた。

これが、終わりでは無いという事はわかっていた筈なのに。

少しでも喜んでしまった事を恥じた。

「京介。卑怯な事を言うかもしれませんが、境界を張らなければ、人々はこの戦いを知る事になるのです。巻き添えになる事も考えられます。京介、貴方は先程の御友人を

」

京介は、少し視線を落として答えた。

「死ぬのは、やっぱり嫌です」

クアンはその言葉に対し何も言わなかった。

だが、京介は顔を上げて、クアンを真っ直ぐに見つめながら一つ一つの言葉を選んでゆく。

「死ぬのは御免です。

でも、もう指を銜えて見ているだけというのは、もっと嫌なんです。もしさつきもクアンさんが来てくれなかったら、辻村は多分……。だから、俺は……。自分出来る事があるのなら……。それをしないで後悔だけはしたくないです。

……。今はこれくらいしか言えません」

クアンは目を閉じ、少しだけほうと息を吐いて僅かに首を振った。

「いえ、そう言って頂けるだけでも報われます。

ご安心下さい、京介は必ず守ります」

クアンのその言葉に、僅かながらも初めて温かさを感じた京介は、照れたようにびしょ濡れの後頭部をぱりぱりと掻いた。

「はは……有難う、ございます。なるべく足手まといにはならないようにしま」

その時、京介はクアンの腕の怪我を思い出した。  
途端に境界内に降り注ぐ光の量が増えた。

「あ！そつだ、クアンさん、腕！腕は大丈夫ですか！？」

クアンは自分の腕を一瞥し、京介の眼前に持っていく。

その腕には、奪還者に噛まれた傷など跡形も無くなっており、少女特有の弾けるような肌がそこにはあった。

「あ……あれ？」

京介は目を擦って何度も見直した。

あれ程の傷が、モノの数分で治るわけが

「人外を相手にするには、人外になるしかない。そついう事です」

「な、成る程……」

京介は思い出した。

目の前に居るこの少女は、人間では。  
なら致命傷さえたちどころに治ってしまうのだろう。

「京介、大分心乱されてらっしやるようですね。光の量が増えまして」

この境界内では、降り注ぐ光の量で心を知られてしまう。  
それだけに、隠す事など出来なかった。

「そ、それは……まあ……」

「……私が、恐ろしいですか？」

京介は、その問いにしつかりと首を振った。

これだけは、否定の意を伝えなければならない。

「何度も助けて貰っている人を、そんな風に思うわけ無いじゃないですか。」

感謝こそすれ、それを恐れるなんてありえませんよ」

「……そうですか」

京介が更に言葉を続けようとした時、

『ぐきゅるう〜……』

その音は、境界の中に響いた。

そして境界内が沈黙に包まれる。

京介はきょとんとした顔をして、クアンをまじまじと見つめた。

「く、クアンさん？いま」

「何か？」

クアンは、朝のようにあらぬ方向を見ていた。

京介も少し顔を綻ばせ、そっぽを向きながら提案した。

「あ……いえ、なんでもありません。  
とりあえず、家に帰ってメシにしましょうか。なんか腹ぺっこ  
で……」

「そうですね、その件には私も賛同します」

クアンはそっぽを向いたまま、その提案を承諾した。

その言葉を合図にしたかのように、京介は目を閉じて境界をゆっ  
くりと収縮させた。

境界も閉じられ、何もかもが元通りになった。

何時もどおりの鴻神中央公園に、クアンと京介が居る。

何時の間にか雨は止み、雲間から青空を覗かせていた。

その光景が京介にはなんと清清しく見えた。

「何時の間にか、晴れましたね……ふえ、ぶえっくし！」

「京介？」

京介は一つ豪快にくしゃみをした。

思わず体を震わせる。

初夏とは言え、長時間雨に打たれば熱を奪われるのも当然だろ  
う。

びしょびしょになったシャツの裾を絞りながら、鼻声で謝る。

「ず、ずびばべん！ずずつ……流石に、体が冷えちゃって」

「確かに、いささか濡れ過ぎたかもしれませぬ」

そう言いながらクアンは鎧の下のスカートに当たる部分をたくし上げ、

京介と同様に両手で絞った。

ばちやばちやと吸収した雨水が搾り出される。

スカートをたくし上げた際にクアンの滑らかな脚線美が露わになり、

思わず生脚を拝んでしまった京介は顔を赤くして顔を背けた。

「そ、そーかもしねないですね！」

「どうかなさいましたか？京介」

スカートから手を離し、ごわついたスカートをぽんぽんと叩きながらクアンが尋ねる。

「い、いえ！何でもありません！」

と、兎に角。又天氣が崩れない内に帰りましょう。クアンさん」

そう言いながらぎこちない足取りで、公園の出口を目指して歩き始める。

その後ろをクアンは付いて行く。

空は徐々に雲が去って行き、太陽がその姿を覗かせた。

強い日差しが鴻神市を覆う。

それはまるで、天が人知れぬ戦いを終えた二人に対しての、せめてもの計らいのようにすら思えた

斬魔の剣 十畳間にてゝ12(第一話終) ・そして、非日常は加速する(後書き

第一話はこれで終わりです

次は第二話「斬魔の剣 学校にて」へと続きます。

斬魔の剣 学校にて〜1・紅く漆黒の満ちる中で

『少女』は限り無い漆黒の中に居た。

少女の上に広がる『漆黒の空』は何処までも果てしなく、遙か彼方まで続いている。

少女は鳶足の姿勢のまま、その空に押し付けられているようにそこに居た。

少女はその身に何一つ纏ってはいない。

その為、彼女の細く華奢な肢体は露になっており、更に少女は腰の辺りまで液体に浸かっていた。

少女の高貴ささえ感じられる緩やかなウェーブかった長い髪も、その長さからか液体の中に半分以上浸かっている。

液体は所々紅い光を放っており、その反射を受け、少女の顔を、髪を、あどけなさの残る薄い胸を、ほの紅く照らしていた。

その液体も又、『空』と同様に何処までも果てしなく広がり、紅い光も水平線の彼方にまで及んでいた。

漆黒の空の下、真紅に光る海。

生というものがまるで感じられない世界の中、少女は一人佇んでいる。

金色を携えた切れ長の美しい目には輝きや意思……所謂、生氣という物がまるで感じられなかった。

肌も透き通るように白く、まさに抜け殻という表現が合致している。

一体、どれ位の間そうしているのだろうか。  
一時間前か、それとも数百年か。

少女には時間という概念すら存在していないように見えた。  
何者かによってそこに束縛されているのだろうか。

だが、少女を縛る戒めのような物は見当たらなかった。

少女は、僅かに顔を上げた。

その時、少女の前方の液体から、何かがすう……と浮上してくる。  
浮かび上がってきたのは、仄かに紅い直方体だった。

1立米程のそれは、ゆっくりと回転している。

直方体は、丁度少女の目線の高さにまで浮かび上がると、上昇を  
止めた。

(……………)

直方体は仄かに輝き、その中に一人の少年が映り始める。

その少年の左手には、その身に似つかわしくない指輪が嵌められ  
ていた。

少女はその直方体に映った少年の顔を見つめていた。

だが、その目に生気が宿っていない事は変わらず、ただ視線上に  
直方体があるだけにさえ思われる。

(……………)

しかし、少女が直方体の中に映る少年の顔を見続けている間、少  
女の居るこの世界に变革が訪れた。

液体の中の紅い光は増え続けているのだ。

少女の周りだけに飽き足らず、そこかしこで新しい光が生まれ、既に生まれていた光はその光を強めていく。

少女の居る世界は、漆黒から真紅へと次第に変貌せんとしていた。紅い光は世界を覆わんとするが、その光が空へと届くことは無かった。

それでも光が空へとその手を伸ばそうと足掻いている中、水面に……何者かが立っていた。

紅い光はその者の周囲には届かず、闇のままだった。光が届いていないため、その者の姿は見る事は出来ない。

まるで、少女を見守るように、もしくは監視しているかのように、少女とその者との間には、相当の距離が離れていた。

ふとその者はゆっくりと手を上げた。

そして、少女に向かってすっと手を下ろす。

その瞬間、少女の目の前にあった直方体に一筋の亀裂が生じた。続いて直方体に映っていた少年にノイズが走り、テレビのスイッチを切ったかのように少年は消える。

(……………)

直方体はその亀裂をきっかけに二つに割れ、あれだけ闇を侵食しようとしていた紅い光も、

直方体の消失に合わせるかのごとく消えて行く。

直方体が完全に消えた後は、少女の世界は再び漆黒の闇が支配してゆく。

少女は、直方体が切断された事にも動じなかった。  
再び視線を元に戻し、静寂が世界を覆う。

何時の間にか、直方体を切断した者の姿は居なくなっていた。

## 斬魔の剣 学校にて② 人の敵、学生の敵

小雨がぱらつき、道路に小さな波紋が生まれている。朝とは思えない程に空は暗く厚い雲に覆われており、お世辞にも気分が晴れやかになる天気とは言えなかった。

梅雨時特有のじめじめと湿った空気は、そこを歩いている人間一人一人に纏わりついて、実にイヤな気分らせていた。

「ふあ……ふあ……ぶえつくしよツツ!!」

ふと、大きなくしゃみの音が響く。

学校の制服を着ている若い少年少女が、その音のする方をちら見する。

この道は主に公立東雲高校しんうんこうこうへと向かう為の通学路として使われており、

開校から数十年、幾人もの生徒達がこの道を通り学生生活と青春とを謳歌し、そして去っていった。

つまり、この道を歩いているのは必然的に東雲高校の生徒と言える。

その道を、ご他聞に漏れず一人の男子生徒が歩いている。

くしゃみと鼻水、いわゆる総合感冒症の諸症状に悩まされながら、その足取りも僅かに重々しく、目も若干はれぼったくになっており、一目で体調が良くない事がわかる。

この男子生徒は、名後京介と言う名前だった。

この少年は、一見何処にでも居る高校一年生として暮らしている。だが、実の所何処にでも居る高校一年生とは言えなかった。

「ずず……はあ……」

鼻をすすり、溜息を付く。

衣替えの時期なんて物はとうに過ぎている為、上半身は半袖のYシャツだが、実に肌寒そうに身震いをした。

それもこれも、昨日の事が発端だった。

この鴻神市に住む住民約三十万の誰一人として知る事の無い「人外と人外の戦い」の当事者となり、梅雨の豪雨をその身に浴び続けた為だった。

人の理からかけ離れた人外同士の戦いに巻き込まれたその原因は、京介の自宅にある剣だった。

名後家には、どの家にも有り得ないであろう特徴がある。茶の間に一本の剣が刺さっているのである。

その剣は京介が住む前から刺さっており、何をどうやっても抜く事なんて出来なかった。

だが、ある日。

この剣を奪わんとするバケモノが現れた。

そして、同時にそのバケモノを倒す為に一人の少女も現れる。

その少女が言うには、その剣は新たな持ち主が現れるまで名後家から離れる事は出来ないとの事だった。

拳句の果てには、剣を奪わんとするモノとの戦いに不可欠と言えるという指輪が、  
どういうわけか京介の指に嵌められてしまい、どうあっても外れな  
いようになっちゃった。

こうして平凡な高校生『名後京介』は、奪還者と少女の戦いに形  
はどうあれ巻き込まれる事になってしまった。

とは言え、京介自身今まで平々凡々と生きてきた16歳。

人外同士の戦いに本当の意味での一般人が巻き込まれたのだから、  
今こうして歩いている事なんてのは幸運中の幸運と言える。

その身に傷一つ無く、少々の疲労と風邪の諸症状がその代償とい  
うのなら、  
十二分に釣りが来るんじゃないだろうか。

更に、片方の少女が二元論的に言えば善であると言えたのも本当  
の意味での幸運だった。

事実、昨日の戦いはその少女の手によって終息したのだから。

すぐさま自宅でもある名後家に帰ったものの、その命の恩人が体  
調を崩さないようにと先にお風呂に入って貰い、  
当の自分は体を乾かすのも程々に、昼食の準備をしたり、  
その恩人が着替えが無いと言って再度びしょ濡れの服を着ようとし  
た為に、

家中のタンスを引っくり返して着替えを用意したり、  
その際にその少女の半裸に近い格好を目撃して土下座を繰り返した  
りと、実に慌しかった。

落ち着いて京介が体を温める事が出来たのは自宅に着いてから一時  
間以上は経っていた。

いくら初夏とは言え、それでは体調も崩れるというものだ。

「うっうっ……」

大層な脳みそが入っている訳でもないのに、頭が重い。

鼻で呼吸しないとどうも気分が優れない京介にしてみれば、鼻が詰まっているという事は、地味ながらに厳しい物だった。

その時、ふいに後ろから肩を叩かれる感触があった。

「おはよっ名後」

陽気な声に呼びかけられ振り向いたが、

「ふえ……ぶいっくしー！」

返事よりも早くくしゃみが出てしまった。

「わあっ！」

「きゃっ」

京介が振り向いた先に居た二人から、小さな悲鳴が上がった。

「ずず。あ……ぼべん（ごめん）。

ざばだり（さわたり）に、ぐざがべ（くさかべ）ぜん……」

ほぼ全ての発音に濁点を付けながら、京介は挨拶をしてくれた女生徒二名に謝罪した。

自分に対して進んで挨拶してくれるような物好きな女生徒は数が知れていると思っっている為、瞬時に判断できた。

無論その判断は正解で、そこに居たのはくしゃみを避けようと後ろに軽く飛んだクラスメイトの沢渡秋野。

そして方や沢渡が後ろに飛んだ事に面食い、可愛らしい悲鳴を上げたのはD組の日下部美咲だった。

「おはよ……名後。風邪でもひいたの？」

片や呆れながら、片や心配そうな顔を浮かべ京介を見つめている。

「お、おはよう名後君。大丈夫？これ、もし良かったら使って？」

日下部は鞆の中からポケットティッシュを取り出し、京介に差し出した。

京介は申し訳半分、嬉しさ半分の微妙な心持ちだったが、有難く使わせてもらう事にした。

「あ、ありがとう。有難く使わせて貰うよ。」

昨日よりも熱は引いたし、大丈夫だと思うけどな……いっくしっ！

日下部の手前、少し強がって見せようとしたが、その目論見は無駄に終わった。

そのまま三人横並びに近い状態で学校へ向かって歩き出す。

「うん。どうみても大丈夫じゃ無いように思っけど。」

まあとにかく、移さないでくれたまえよ？」

沢渡は困った奴だと言う顔をして京介を見る。

「あ、ああ。成るべく善処はする……つくし！」

日下部から貰ったティッシュで鼻を噛む。

京介の左手薬指には、絆創膏が巻かれていた。

それは指輪を外す事は出来ない為、指輪を隠すせめてものカモフラージュだった。

どうあがいても外れないのなら仕方が無い、  
ならばはいかにして指輪を嵌めている事を誤魔化すか、それを考えた末の策だった。

高校生が貴金属を身に付けているのは何かとまずいし、  
特に風紀委員に目をつけられた、なんて笑い話にもならない。

幸い、絆創膏を貼り付けたらそれ程目立たなくなった。

実際こうして二人の前で見せても、特に気にしているようには見えない。

それに、彼女達は特に自分にそこまでの関心は持っては居ないだろうと京介は踏んでいた。

たかが絆創膏一つ、気にする人間なんて

「名後君。指……ケガしたんですか？」

目の前に居た。

「うえい！？」

予想だにしなかった為、珍妙な返事が口から飛び出てしまった。  
日下部が自分の事を気にかけてくれていたとは……！

とほのかな喜びが頭を占めようとしていたが、その反面冷静に状況を判断しようじゃないかという

最後の牙城とも言わべき理性がそれを押し止めた。

要は、週明けに腕にギブスを巻いている知り合いが登校してきたら、誰だってまず第一にこう聞く物だ。

『それ、どうしたの？』

ある意味朝の風物詩と言えるが、その小規模版だろう。

そうでなくても日下部は気遣いの出来る優しい人間である、過剰な反応はご用心なのだと言京介は自分を制した。

精神的に参っていた先週末、悪友の辻村とスーパーで遭遇しただけで思わず泣きそうになった程なのだから、

その精神的苦痛も京介の小さな決意の為に殆ど和らいだとはいえ、数日振りに会う日下部は心の清涼剤となった。

思わず喜び勇んでしまうのもしようがないと言えた。

無論、その隣に居るクラスメイトも容姿という点では文句のつけ様も無いし、

自宅に居るであろう少女に至っては、これで文句を言う奴は眼科に行くしか無いとさえ言えるのだが、

京介にとって、日下部は違っていた。

なら一体何が違うのか、と聞かれると京介自身答えにくかった。

『違うからだ』としか言えない。

それを明確に心と頭で消化し、誇らしくも恥ずかしがりながらも

他人に口にするには京介には色々足りなかった。

「あ、ホントだ。どしたのそれ？」

日下部に言われて初めて気付いたのだろう、沢渡も聞いてきた。幾らなんでも馬鹿正直に言うわけには行かない為、絆創膏が貼られている理由を適当に誤魔化す事にした。

「こ、これか？実はさ、夕飯を作ってる時なんだけど手が滑って包丁を」

「うわっ……やめてやめてっ。なんか腰の辺りがぞわってするから」

左手を握りこみ、右手を包丁に仕立てて何かを切る仕草をした。その途中に、沢渡は怯えたような顔で身震いをして後ろに少し下がった。

「うん……こつこつ話ってちょっとぞわわってしちゃうかも」

日下部も困ったような笑いを浮かべていた。

心なしかテンションが下がっている様に見えた。

居心地が悪そうにもぞもぞしている。

確かに、タンスの角に小指だの、爪がペリペリと割れただの、紙やダンボールで手を切ったとかそういう話を聞くと、尾てい骨の辺りがぞわぞわとするモノだ。

京介も余り得意なジャンルでは無い為に、早々に話を切り上げた。

「まあ、兎に角そういう事なわけだ」

「でも名後君、大丈夫ですか？結構深く切っちゃったりとか……」

「ああ、そんな酷くないから大丈夫。かすり傷みたいなものさ」

「あ！でもでも、野菜とかスライスする奴あるじゃない？」

あれって人参とかキュウリとか摘んでスライスしている時に、勢い余って指の先まで行っちゃうんじゃないかって考えちゃうんだよねって、うゝわわわ……」

二人に割って入るように沢渡が口を開いたが、自分の言った事を想像してまたぞわっと来たらしい。

再び後ろに下がって行った。

日下部と京介は足を遅め、振り向いた。

「……沢渡。止めてほしいのか話したいのか、どっちなんだ？」

「も、もうその話止めにしない？秋野ちゃん……」

そのような雑談を交わしながら、学校への道歩く。

何気ない日常の一コマだったが、京介にとってはとても有難い物だった。

ともすれば、このような事が二度と起こらない時が昨日訪れても可笑しくなかったからだ。

「それにしても名後、先週どんよりしてると思ったら風邪ひいてるし……ホントに大丈夫？」

その時、京介は先週の自分を振り返った。

確かに、皆が何を聞いても上の空な事が多かった。

そして辻村が言っていた事を思い出すと、友人として心配をかけてしまっていた事を申し訳なく思った。

「……ああ。先週はなんとというか、悪かったよ。もうなんてこと無いから大丈夫だよ。」

日下部さんも、済まなかった」

確か、日下部に話しかけられた時にも、上の空で対応していた事を思い出した。

話しかけているのに、曖昧な答えしか返してこない実に失礼な奴に映っていただろう。

「え？う、ううん！気にしてないから、大丈夫だよ！」

急に謝られた事に動揺したのか、首と手を忙しく振る日下部。

「まあ、先週よりなんかスッキリしてるみたいだから良いけどね」

その言葉に、日下部も微かにうんうんと頷いていた。

京介自身、出来ることなら皆に相談に乗ってもらいたい物だったが、

流石にこの話をするべきか否か位の判断は出来ているつもりだった。

「あ、そうだそうだ。美咲、ちょっといいかな」

突然沢渡が何かを思い出したかのように鞆を開け、中から数学のテキストを取り出した。

青色の付箋が貼り付けられている部分を手繰り、日下部の前へと差し向ける。

再び京介と日下部の間に割って入るようになってきたので、京介は

少し隙間を空けてやった。

「あのね、この問2なんだけどき。どうやって解くんだっけ」

「あ、うん。そこはね」

と、日下部は懇切丁寧に数学の解法を教え始める。

京介は日下部の横顔を見ながら、邪魔をしちゃ悪いとくしゃみを一つ押し殺した。

「で、ここにXを当てはめると、5になるんだよ」

「あ、そっかつ！ありがとー美咲。やっぱり持つべき物は友達だわ」。

それでお礼ついでにもう一問あるんだけど……」

沢渡は心から感謝している顔をしながら、もう一つ催促をし出した。

無事に疑問が全て解消したらしく、テキストを鞆にしまい込んでいる沢渡を見ながら、日下部が口を開く。

「さっきの間、今日の範囲だね。秋野ちゃんは昨日はやっぱり、一夜漬け？」

「土日にかけてだから、二夜漬け。だけどやればやるほど泥沼って感じで……」。

今日有る世界史は竹原センセでしょ？ホントやだよ、中間の時だって変な問題出すしさ」

沢渡は肩を落とし溜息を吐いた。

京介は、二人が何の話をしているのかわからなかった。

「一夜漬け？二人とも、何の話をしてるんだ？」

京介の言葉に、沢渡と日下部は顔を見合わせた。

そして、二人とも不思議そうな顔をして京介を見た。

「何って、今日からの期末テストに決まってるじゃないの」

さも当たり前のように沢渡は言う。

「期末……てすと？」

だが京介にとっては、やけに懐かしい響きに聞こえた。  
きょんとした表情の京介を見ていた日下部と沢渡に、戦慄が走る。

「な、名後君……」

「まさか、名後アンタ……ひょっとして……」

沢渡はごくりと唾を飲み込んだ。

「あのさ、もしかして今日から……期末テスト……なのか？」

絶句している二人を交互に見ながら口をパクパクとさせ、京介は喘ぐ様に声を絞り出した。

「ほ、本当に……忘れてた……の？」

日下部の問いに、実にじっくりと時間をかけて京介は頷く。  
ここ数日、京介の頭の中は

> 茶の間の剣 <

> 剣を奪いに来たモノ <

> 剣を守る少女 <

> 指輪 <

これで占められていた。

本当に、テストがあるなんて事は頭の隅にも無かった。

学生の本分は勉学であり、その勉学の出来如何によって大抵の学生の将来は決まってしまう。

中には、スポーツ・芸術分野において勉学よりも価値のある結果を残す者も居るが、

京介はそのどれにも当てはまるような才能を持ち合わせては居なかった。

幾ら、バケモノと必死に戦ってます！と豪語した所で、それは内申には響かない。

それどころか、そんな事言うわけにも行かない。

ならば、京介は勉学で結果を出さなければならぬ。

だが、結果を出さなければならぬという状況下において、今や京介は最大の危機に陥っていた。

何分、テスト勉強と名の付くモノは何一つやっては居なかったからだ。

沢渡は、京介に同情し顔に手を置いて天を仰いだ。

「残念、名後の夏は終わってしまったみたいね……名後、安らかに眠れ……」

十字を切って黙祷でもしかねない勢いで沢渡は京介に聞こえるように呟く。

京介はその言葉が聞こえているのか居ないのか、黙りこくっていた。

「秋野ちゃん。そ、そんな言い方は……。だ、大丈夫だよ名後君名後、君？」

「……ふふふ……」

京介の口から笑い声が漏れる。

「な、名後？」

「そっかあ……今日テストなんだあ……ふふ、ふふふ……」

「な、名後君……」

沢渡は京介の目の前で手をヒラヒラさせた。

だが、京介が気付いていない今、京介はここではないどこかへ旅立ってしまったようだ。

人の敵は退けることは出来たが、次に控えている学生の敵を退ける事は更に輪をかけて困難と言えた。

この先に待ち受けている踏んだり蹴ったりな自分を想像したのだろっ。

「ねえ、名後。ねえってば！壊れた……わね。これは」

「あ、あの……名後君、名後君っ」

日下部もどうしたらいいかわからずにおろおろしだした。

「……ふう、しょうがないわね」

心の底からしょうがないといった溜息を吐き、  
そう言うなり沢渡は京介の襟をむんずと掴んで、ずるずると引っ張  
っていく。

「あ、秋野ちゃんっ?」

「だって、このままにはしておけないじゃない。  
それに。この後名後に待ち受けている事を考えるとこれくらいはし  
てやらないと……」

京介は、笑いながら泣いていた。

そのまま沢渡に引きずられるままに東雲高校の校門を潜る。

京介を冷ややかな目で見ていた生徒達は、まさかこの少年が自分  
達の平穏な平和を守ってくれた張本人だとは、  
当然の事ながら誰一人思いもしなかった。

「あは……ふはは……あーっはっはっは……はあああ……」

雨音の中に、一つの濁いた笑いが紛れていた。

斬魔の剣 学校にて〜3・雨降らずとも、地は固まる

>キーンコンコンコン……<

時間の終了を告げるチャイムの音が校舎内に響き渡る。

公立東雲高校一年C組の教室内では、教壇の脇に腕組みをして座っていた教師がそのチャイムを聞いてのそりと立ち上がり、目の前の生徒達に喚起する。

黒板には『期末テスト』と大きくチョークで書かれていた。

「おーし。それじゃあ、答案用紙を後ろから前に回してくれ」

その試験監督の教師の声引き金になり、教室が安堵の空気に包まれる。

期末テストの一日目は、滞りなく終了した。

中にはやりきった表情を浮かべている者や、まだ書き終えていない為に最後の足掻きをしている者。

様々な反応をしていた。

集められた答案用紙を机に当てて整えながら、教師は生徒達を見回して軽く釘を刺す。

「おい皆。ほっとしてる所悪いが、今日はまだ一日目だ。今日はホームルームは無いからこのまま終わるが、遊び歩かないで家に帰ってしっかり勉強しとけよ〜」

それだけ言うと、教師は教室から出て行った。

C組に居た生徒達は、教師が出て行った途端に友人達とテストの問題の話をしたり、早々に教室から出て行く。

「名後、出来はどうだった……て、聞くまでも無いか」

メガネをかけた少年が気さくに話しかけてきたが、珍しく机に突っ伏して憤死している京介を見て全てを悟ったらしく、話を切り上げた。

「皆まで言うな雑原。今の京介にしてやれるのは花を一輪手向ける事だけだ」

辻村が言つてやるなという顔をして制した。

雑原と呼ばれた少年はメガネを押し上げ、神妙な顔を浮かべた。

「なきはらかすき雑原和希」彼も又、辻村と同様京介の小学校時代からの友人である。

柔らかな物腰で頭の回転も良く、不可思議な程人望をかき集める人物だった。

線も細く女顔で、京介よりも僅かに背が低い。

本人は余り目立つことを好まないが、何時の間にかクラス委員に任命され、

いやでも人を仕切る立場に立たされる事が多い。

それでも各々の特徴を活かした配役を考える為、リーダーシップという物を生まれもって持ち合わせているのだろう。

「なるほど、じゃあ一つ吊いの意味も込めて校庭でパンジーでも取って来ようかな」

「薙原……人を勝手に殺さないでくれよ。つくし！」

もそりと動いて京介が少し顔を上げる。

その顔はどんよりと曇っていた。

結果から言えば、日頃の学習だけではやはり力及ばず、今日のテストは散々と言えた。

どうにか範囲だけは聞き、テストが始まる前に必死に暗記すべきポイントを押さえたとしても、一夜漬けですら無いのだから、焦りも手伝ってテストが始まる時は頭から消えていた。

ましてや、鼻づまりとくしゃみで思うように思考が覚束ないとなると、良い結果など望むべくも無い。

「お、生きてたね。良かった良かった」

人懐っこい笑顔を浮かべて薙原は頷いた。

「良く無い……それにしても、随分と機嫌が良さそうだな」

「まあ、自分なりに出来たからね」

薙原は、試験の出来などを聞くと何時もこう答えていた。

だが、そういう割には常に上位の成績を収めている為に、謙遜以外の何にも聞こえない。

「そうかい、それは何よりだよ……」

京介は深い溜息を付いて頭を上げた。

「そついや、辻村はどうだったんだい？」

雑原の問いに、辻村は得意げな顔を浮かべ腕を組んで胸を張る。京介は固唾を呑んで次の言葉を待っていた。

「ふふん……………はつきり言って、90以上は堅い」

「う、嘘だろ!？」

危うく京介は立ち上がってしまう所だった。

お世辞にも、辻村は成績面では誉められた物ではない。中間テストの時には京介よりも下位に居た位だった。

それがまさか90以上は堅いと言ってきた。

しかし、辻村の言い方だと嘘とは思えなかった。

「それは凄い。だけど辻村、カンニングは良くないなあ」

「んな事するかよ。あ、ちょっと悪いな 坂城、ちょっといいか」

そう言うと辻村は周囲を見回して何かを確認した後、机の引き出しからノートを取り出して立ち上がり、

自分の後ろを歩いていた女生徒を呼び止める。

辻村に呼び止められた女生徒ははっとした表情を浮かべ、仄かに頬を赤らめた。

坂城は京介達と同じ組のクラスメイトで、一目で才色兼備という印象を持てる少女だった。

「坂城、おかげで助かったよ。本当にどんぴしゃだったよ、サンキ

「コナ」

辻村はにこりと笑いながら坂城にノートを差し出した。恐らく、今日のテストの世界史と科学のノートのようだった。辻村の『90は堅い』宣言の裏づけはこれだったのだろうか。感謝の言葉を述べながら、辻村の十八番と言える殺人スマイルを炸裂させる。

これこそが、辻村の窮地を何度も救ってきた切り札だった。

この効果は同年代の異性に最大級の効果を発揮する。本人もそれを自覚しているからこそ、使い所を弁えている。

その切り札の直撃を喰らった坂城もその例に漏れず、完全に顔を蕩かせていた。

「う、ううん。辻村君の役に立つたんなら、何よりだから」

半オクターブ程声色が上がっている事に、坂城自身気付いているのだろうか。

「そうか、そう言ってくれど助かるよ、本当に悪いな。俺、こんな事坂城以外には頼めなくてさ。……そーいや、明日は物理と数学があつたっけな。」

流星に明日の物理と数学は自分の力でやらなきゃならないか」

辻村の『坂城以外には頼めない』という言葉が坂城に更なる追い討ちをかける。

坂城が辻村の言葉を頭の中で処理しきる前に、

「いや、なんでもない。ノート有難うな、んじゃ」

踵を返そうとする辻村を、坂城は半ば必死に呼び止めた。

「あ、あの！辻村君。もし良かったら、物理と数学のノート貸してあげるよ」

「さ、坂城！？でも、流石にそれは……悪いしさ……」

申し訳なさそうに後ろ頭をかきながらも、神に救いを求める修道者のように坂城を見つめる。

「ううん、大丈夫。私はもう内容覚えちゃってるから、今持つてくるわっ。ちよっと待っててね」

そう言うと坂城は返して貰ったノートをかき抱きながら嬉しそうに自分の机に戻った。

そのやり取りを京介は呆気に取られて見ていた。

「……な、なんという三文芝居だ……」

薙原も、流石に驚いたようだった。

「大体、テスト前なのは坂城も一緒なのに、良いのか……？」

「まあ、本人が良いって言うなら良いんじゃないかな？内容を覚えてるって言うてたし。」

少なくとも、本人がテストで良い点を取る事より優先にしたんだから、僕達がとやかく言うことじゃないよ」

「そういう物か？にしても……辻村、未恐ろしい奴だ」

二人がそんな会話をしている内に、ホクホク顔で辻村が帰ってきた。

机の上に、新しく借りてきたノートを置く。

「さてと。これで明日も90以上は堅いな……どうした二人共、変な顔して」

しれっとした顔で辻村は椅子に座る。

「いや、なんでも」

二人の返答は見事にユニゾンした。

二人の顔と、ノートを見比べて納得したように辻村は頷いた。

「ああ、これか？まあ、貸してくれるって言うからな。人の好意を無下にするわけにはいかないだろ？

さて、これからゲーセンにでも行くか。どうだ、二人も来るだろ？」

「流石にテスト期間中はね、止めておくよ」

薙原はやんわりと断った。

京介は今日のテストの出来を反芻し、顔を青くした。

「行ける訳無いだろ……家に帰って勉強しなきゃ」

そして一つ……ある事を思い出して言葉を切った。

ある事とは、名後家で留守番をしている少女『クアン』の事に他

ならない。

昨日、人外のモノである『奪還者』を倒してからも、少女は名後家に居た。

ごく自然に、ずっと前からそうであつたかのように。

取り合えず昨夜は、余らしていた部屋を彼女の寝室として使つて貰う事にし、布団について軽く説明して京介は鼻をすすりながら床に着いた。

翌朝、ようするに今朝は京介が起床した時にはクアンは既に起きており、茶の間の座卓の前に座っていた。

それが余りにも自然だつた。

というよりもクアン自身が何一つ自分が名後家に居る事について違和感を発していなかつた為に、京介もそのまま朝食の支度をし、重い頭を引きずりながら登校した。

出掛け際にはクアンから「いつてらっしゃいませ」という見送りの言葉すら頂いた。

思考能力が若干鈍っていた為に、肝心の問題点など思い浮かびもしなかつたが、

果たしてクアンはこのまま名後家に居座るのだろうか。

京介自身、クアン＝リーリムグラフという一人の人間が自分の家に住むという事を冷静に考える。

差し当たって彼女が名後家に居なければならぬ、居て欲しい理由ならある。

まず、奪還者が茶の間に刺さりつきりで抜けない剣『斬魔刀』を目的として現れるのなら、奪還者を倒すことが出来るのはクアンだけなのだから、居て貰わないと困る。

京介一人では何も出来るはずはないのだから。

それに、まだまだ知りたい事や教えて貰いたい事もある。

……後、これは居て欲しい理由としては不謹慎かもしれないが、自分が家を出る際に>いつてらっしゃいくという言葉をかけて貰えるのは嬉しいものだった。

この言葉は人の心に働きかける言霊か何かが込められているのではないかと思えるほどだった。

それに陽気な会話や、弾むような会話が望めるとは思えないが、それでも話し相手が自分の家に居る。

一緒に食事をしてくれる人間が居る。

京介にとってそれは奪還者や斬魔刀とは別にしても有難い事だった。

家族、という言葉で括ってしまうのは彼女に失礼かもしれないが、京介もまだ16歳の言わば少年。

人恋しさが無いわけでは無いのだ。

同居人という存在は何につけても有難い、望ましいモノだった。

それが例え 人外の領域に居るモノだとしても。

経済面で見ても、彼女のエンゲル係数は確かに高い。

だが叔父から毎月仕送られる十分な生活費、もし足が出てしまった時に京介の小遣いを充てれば賄える範疇だ。

とどのつまり、クアンリーリムグラフという少女が自分の家に住んでも可か否か、  
という脳内会議はほぼ10:0で可で占められる結果になる。

だが『ほぼ』というのが曲者だった。

クアンは見た目には完璧に京介とほぼ同年代の少女、それも超々  
弩級と言っても差し支えない容姿の持ち主だ。

先の通り、京介はまだ16歳の少年である。  
それが、一つ屋根の下に住む。

というのは果たしてどうなのだろうか。  
無論、そのような間違いが起こるような関係性では無いが、意識  
するなというのもまた無理な話だと言える。

更に、クアンと一つ屋根の下に居るといのは、いわゆるご近所  
さん達にあらぬ誤解を生みかねない。  
また、それがどのような形で友人に広がるか。  
というのも悩みどころだろう。

思い切って友人達に言ってみるかとも思ったが、この愉快的友人  
達に打ち明けた後の事を想像するのは止めた。

そして、彼女という存在が、いかにこの世界にとって非凡である  
かという新たな問題点もまた、  
鎌首をもたげてくる。

何分テレビを箱と言いつ切る程、何も知らない。

今朝、学校に行くと言った時も、学校という物の存在を知らないようだった。

だがまあ、何とかするしかないし、何とかなるだろう。と京介は高を括った。

まだ思考がはっきりしていないのに、あれこれ考えてもいい案は出ないだろう。

取り合えず、この風邪を治してからクアンと相談すればいいだろうと結論付けた。

「名後、ぼっとしてるけど大丈夫かい？」

雑原が少し不安げに聞いてきた。

京介はなんでもないと首を振り、鞆を開けて二日目のテスト勉強に使うノートや教科書を詰め込む。

「んじゃ、先に帰るから」

「ああ、明日はちゃんと勉強してきなよ」

雑原は一つ頷いて自分の机に戻ろうとした。

「そか。じゃあ俺もこれで」

坂城のノートを鞆にしまおうと手を伸ばした刹那、

「あ？」

「ん？」

「おや？」

そのノートの上には、三人の誰でもない別の手が置かれていた。

三人がその腕の正体を探ろうと顔を上げると

「へえ〜……ずいぶんと可愛いノートじゃない。つ・じ・む・ら・く・ん」

何時の間にか、沢渡がにっこりと笑いながら辻村を見ていた。

その微笑みは実に綺麗だったが、発せられている闘気は浮かべている笑顔とは程遠い物だった。

「げえつ、沢渡！」

辻村は驚きの余り危つく椅子から転げ落ちそうになった。

京介も雑原も、沢渡のオーラに圧されて何も言えない。

「お、お前……D組に行つたんじゃないのか？」

「ええ行つたわよ。生憎美咲は用があるって先に帰っちゃったけど。私が居ると何か問題でもあるのかしら？例えばこのノート、とか」

「こ、このノートは俺のだけ？な、なあ京介、雑原」

救いを求めるように二人に呼びかけるが、京介は顔を強張らせて上手く返事できなかった。

「へえ、そうなの？名後、雑原君」

沢渡は笑い顔を固定したまま二人を見る。  
余りの恐ろしさに京介も椅子に座ったまま後ずさり、薙原は京介の机に腰をぶつけた。

「え？あ……いや、まあ……その。な？薙原」

「いつつ……まあ、一応今は辻村の所にあるから、辻村の物でいいんじゃないかな？」

薙原がずれたメガネを直しフォローをするが、それはどう考えても失策にしか思えなかった。

「それじゃあ、辻村は何時の間に坂城って名前になったのかしら？  
おかしいわねえ」

沢渡は二冊のノートの内一冊をひらひらとさせた。  
ノートの裏側には「坂城」としっかり書かれていた。

「い、いや。だからさそれは……」

辻村は徐々に顔が引きつっていく。

その端正な顔には冷や汗が浮かんでいた。

沢渡の顔から笑顔が消え、更に辻村に詰め寄った。

「じゃあこれは辻村のじゃないって事ね。それなら坂城さんに返してくるから」

そう言いながら辻村の机からノートを取り上げる。

辻村は慌てて立ち上がり、沢渡に行かせまいと立ち塞がった。

「お、おい！沢渡、ちょくっと待ってくれよ」

「何よ」

沢渡のぱつちりとした目が細められ、訝しげな表情を作り出す。

「いや、それを坂城に返すのだけはカンベンしてくれないかな」

「あのね、人の勉強の邪魔しちゃいけない事位はわかるでしょ？

それに、テストなのよ？坂城さんの成績が落ちたら辻村のせいだからね！」

びしっと指を差し向けて辻村に忠告する。

辻村はつんのめり、しどろもどろになりながらどうにか現状を打開しようとする。

何分、今ここで沢渡にノートを持って行かれたら、何もかもあがったりだからだ。

「い、いやまあそうだけど　て、いやいや！でもさ、一部を突出させるよりも全体的な兵力の底上げをだな　」

「何わけのわかんない事言ってるの！大体辻村がちゃんとノート取ってれば良いだけの話でしょ！

バカなんだからちゃんと毎日勉強しなさいよ！」

「そ、それは今関係ねえ話だろうが！」

「関係無くないわよ！」

「何だよ！秋野だって俺と対して成績かわらねえだろうが！」

「何よ！生憎郁人より下だった事なんて無いわよ！」

食い下がる辻村と、突っぱねる沢渡という図式だったのが徐々におかしくなっていく。

本人達の意味とは違い、傍から見ると痴話ゲンカのようにしか見えなかった。

徐々にエスカレートしていく喧嘩に、クラスにまだ残っていたクラスメイト達はギャラリと化した。

「ああもう！わくったよ！返せばいいんだろ返せば！」

苛烈してゆく口げんかを、辻村から譲歩した。

苛立たしげに髪をくしゃくしゃと弄る。

珍しい出来事に、ギャラリーから微かに感嘆と、もう終わりかという残念そうな息がない交ぜになって漏れた。

「ふう、やっとわかったのね。じゃあ坂城さんに返して来なさい」

「ち、分かったよ　お前ら見せもんじゃねえ！金取るぞ！」

辻村は渋々と言った感じで見物客達を追い払い、坂城にノートを返しに行った。

見物客達も、残念そうにぞろぞろと教室を出て行った。

沢渡は辻村の後ろ姿を見ながら両手を腰に置いてふんと息を吐く。

「ふん、全く　ん？」

雑原と京介の視線を受けて、沢渡は気まずそうに問い掛ける。

「な、何よ……二人して」

「いやあ、辻村の面倒を見てあげるのも大変だなと思ってね」

「ホント、アイツったら人の迷惑も考えないで……全くのバカね！」

「だけど沢渡さん。どうやら、まだ終わってないみたいだよ」

と雑原は辻村が居る方に顔を向けた。

「……え？」

京介と沢渡もそれに誘導されるかのように視線を向ける。

辻村は素直に頭を下げてノートを差し出していた。

「いや、なんというか悪かったな。騒がせちゃったし。折角貸してくれたけど……これ、返すわ」

「そんなあ、私は別に良いのに……」

酷く残念そうに坂城はノートを受け取った。

「まあ、文句はあその口うるさいのに言ってくれ」

その言葉が耳に入り、沢渡が噴火しかけるのを雑原がまあまあと落착させた。

その時、坂城の周りに居た女子が坂城の背中をぽんと叩く。

そして辻村を見てにやりと笑う。

「ならば、坂城ちゃん家で勉強すればいいんじゃない？」

「な、なっ！？」

沢渡が目丸くして驚きの声を上げた。

そういう話になるとは思っても見なかったらしい。

「俺が……坂城の家に？」

「うん、そうすれば何も問題ないんじゃない？ねえ沢渡さん？」

急に話を振られた為に、沢渡はうろたえ始める。

「な、なんで私に聞くのよ？そんな事、辻村が決めればいい事じゃない！」

沢渡はそう言うつと自分の机に戻り、鞆を奪うように掴み、教科書等を乱暴に入れて教室から出て行った。

「だってさ。坂城ちゃんもOKでしょ？」

その間に坂城は頷いた。

「よし、なら何も問題無いじゃない。ねえ辻村く」

「いや、それはいいわ。遠慮しとく」

辻村はさらりと断った。

ふと、沢渡の手も止まる。

「……え？」

「まあ、気持ちだけ受け取っとくわ。んじゃな」

そういつとあっさりと踵を返した。

坂城とその友人はぽかんと口を開けたまま、一言も発しなかった。

「じゃあな、京介。雑原」

辻村は自分の鞆を持つと、肩に引っ掛けて出て行ってしまった。

「ど、どうしたんだ辻村の奴」

その背中を見送った後、京介が口を開く。

「さあね、そろそろ僕達も帰ろうか。名後も帰ろうとしてたんだろ  
」？」

「あ、ああ。そうだな」

沢渡は、自分の名前が書かれた玄関の靴箱の前に居た。

周囲はまだ下校していない生徒達の姿があり、騒がしくもある。

沢渡の顔には、先程までの氣勢や、何時もの陽気さはどこかに行ってしまったかのように暗い表情を浮かべていた。

一つ力無いため息を吐いて、靴箱を開けて外履きを取り出す。

内履きを脱いで、履き替えようとしたその時。

辻村が現れた。

「……………」

「……………」

互いに無言だった。

無言のままに自分の靴箱へと歩く辻村。

無言でその音を背中であら聞いてる沢渡。

背中合わせのように互いの靴箱とにらめっこをしていた。

辻村が靴箱を開ける音が響く。

「……………沢渡」

その時、辻村が口を開いた。

口調はあくまでも真面目だった。

「……………何よ」

「お前確か、物理得意だったよな。少なくとも俺よりは」

履き替えた靴のつま先を地面に当てながら沢渡は答えた。

「……………少なくともアンタよりはね。それが何よ」

「数学はまだなんとかなるかも知れないんだけどさ。問題は物理なんだよな……………悪いけど、教えてくれないか？」

その言葉に、沢渡の靴箱を閉める手がふと止まった。暫し逡巡しているのだろうか。

「坂城さんは……………どうしたのよ。私が教えるよりずっと良いんじゃないの？」

「教えてくれるのか、くれないのか」

沢渡は溜息を吐いて、靴箱を閉めた。

「ふう……………しょうがないわね……………わかったわよ。教えてあげるわよ」

「ああ、助かるわ。まあ馬鹿同士のよしみでよろしく頼む」

沢渡に背中を向けたまま、礼を言った。

辻村は少しだけ口元をゆるませる。

それは坂城に見せた笑顔とは、全く異なるモノだった。

「それが人にモノを頼む態度？」

「あ、悪い。宜しくお願いいたしますです」

うやうやしく頭を下げる。

「言っとくけど、私は坂城さんみたいに優しくはないわよ。びっしりびし行くからね」

沢渡はえらく意気込んでいた。

「あ、いや……何もそこまで本腰を入れて貰わなくてもいいんだが」

「後、勉強中のジューズ代その他諸々は辻村持ちだからね。

私に勉強してもらおうってんだからそれ位の事はして貰うからね」

「厳しいってそういう意味かよ……」

「ホラホラ、ぼさつとしないで！さつさと行くわよ！」

沢渡はさつさと校舎外へ出て行った。

その後ろを慌てて辻村が追いかけて行く。

その殆どを、玄関の陰で二人の男子生徒が覗き見ていた。

辻村と薙原の二人だった。

「雨降って地固まる……かな。まあ、それ程雨も降ってなかったよ  
うけどね」

「そうか？……降ってるけど」

京介は空に広がる雨雲を見て呟いた。

斬魔の剣 学校にて 4・さらばテスト、ようこそ奪還者(1)

鴻神市内にある閑静な住宅街。

その中に、他の住宅とは少し一線を画した古風な家がある。

外観を見れば、古き良き日本を思わせる年代を重ねた木造の家といえは聞こえは良いが、

柱は傷んでいるし、古びた畳も湿気た匂いを放つ。

くだけた言い方に置き換えれば『ぼろい家』という表現が一番合う家だった。

外見に反して玄関の表札は比較的新しく、そこには名後と書かれている。

紛れも無く、その家は名後京介が一人暮らしをしている名後家である。

唯一の住人である名後京介が学校に行っている為、本来なら無人であるはずなのだが、

茶の間には一人の少女が背筋を正して座っていた。

一片の不備も無く整えられた顔立ち。

腰まで伸ばしている蒼みがかった白銀の髪は一本一本艶のある輝きを持っていた。

その両の目は閉じられ、長い睫毛が微かに揺れる。

こうして身動き一つせずに座していると、まるで神業と魔技の極みを尽くして作られた人形のように、

造形を以ってしてのみ生まれる美しさを思わせる。

神業と魔技　相反する要素を兼ね備えた存在。

人外のモノを殺すが故に人外の者になった少女、クアン＝リーリムグラフィがそこには居た。

だが、その身に纏っていたのは昨日のような鎧や衣では無く、白いレースのブラウスと、グレーのスカートという服装だった。

昨日、京介が家中のタンスを開けて探した服だった。

背丈は近いものがあったが、身幅はクアンの方が少女のそれか僅かに細い為に、ぶかぶかになっていた。

そして、クアンの目の前には一本の剣が刺さっている。

刀身は青白く、柄の部分には装飾が施され、中央には石のような物が嵌っていた。

神々しくも、同時に禍々しくも見える剣だった。

このような古風な木造住宅には到底似つかわしくない物と言える。

クアンはこの剣、斬魔刀を守るために『剣威』として存在している。

剣の威を借る者として、剣を狩る奪還者を殺すために。

ふと、少女の桜色の唇が開き……言の葉を水晶の音色の如き声色に乗せて紡ぐ。

「……………>ヴィクティム<……………」

つい漏れてしまったのか、寝言のように呟いた後、その瞼はゆっくりと開かれる。

濃藍の色をした高貴さと思いを併せ持つ目、その視線は剣へと注がれた。

自らを守らせる為に、自分を創った剣 『斬魔刀』  
互いに見詰め合うかのように居る剣と少女、クアンの胸中はいかばかりか。

しかし、クアンが口を開きかけた刹那、ふと斬魔刀から視線を外し玄関へと合わせた。

『ただいま』

玄関の戸が開けられる音が鳴り、京介の声が名後家に響く。  
すぐに廊下を軋ませる音が近づき、学校から帰ってきた京介が茶の間に顔を出した。

「あ、クアンさん。ただいま、今帰りました」

クアンは静かに京介の方へと向き直し、京介の帰りを迎える。

「……おかえりなさい。ですが今朝方仰っていた時刻よりも大分早いですね。

顔色も余り良くないように見えますが」

今朝方、重い顔をして咳き込みながら学校へ行った事を思い返したのだろう。

京介は心配してくれていた事を少し意外に思い、顔色が悪い原因が他にあるという事に苦笑しながら首を振った。

「いえいえ、そうじゃないです。今日はテストだから早上がりだったんですよ。」

体調は……そうですね、もうちょっとで治ると思いますけど」

「そうですね、それは何より」

相変わらず、感情の起伏を感知できない口調だった。

ともすれば、今の言葉も社交辞令なのかと思えてしまうほどの。

「はは……。あ、そういうえば。お昼はもう済みましたか？」

時計はすでに昼を指していた。

「いえ、これから頂くかと思っていました」

「なら丁度良かった。俺、用意しますんで座って待ってて下さい。

と言っても、作り置きを温め直すだけですけどね。それじゃちょっと着替えてきますんで」

京介はそう言い残すと、着替える為に二階へと上がって行く。

階段を上がる音が終わる前に、クアンは座卓へと場所を移していた。

クアンの視線の先には、斬魔刀がある。

「……………>ヴィクティム<……………」

さっき呟いた言葉を、ゆっくりと。

まるで自分に言い聞かせるかのようになり、もう一度だけ繰り返した。

昼食を終え、洗い物も終えた後。

京介は一息付く間も無く立ち上がり、二階へと上がって行く。

そしてすぐに降りてきた。

その手に持っていたのは物理と数学のテキスト・ノートだった。

クアンも又、京介の持ってきたテキストに視線を移していた。まるで弁解をするように京介は口を開く。

「えっと、明日もテストがあるんですよ。」

だから、ここで勉強させて貰ってもいいですか？

あ、勿論何か入用の時には言ってくれて構わないですから。」

本当なら、二階の自室で勉強をした方が身に入るのだが、

クアンがここに居る以上は茶の間に居た方が良いと判断したのだった。

何か入用になった時も、ここなら対応する事は容易い。

無論、それにはクアンの賛同が必要なのだが、

「ここは京介の家です、気兼ねなどなさらないように。何かある時にはお願いします。」

と快諾してくれた。

早速、座卓の上にテキストをノートを置いて明日の為のテスト勉強を始める。

テスト範囲は、帰りがけに薙原に聞いた為に把握出来ている。

更に、ここは出るんじゃないかと要点も教えてくれた。

しかし、物理と数学というのはとどのつまり、解法と公式、定義の理解に他ならない。

要は問題を解きまくるしか無いのだ。

残念な事に、京介は理系が苦手だった。  
所謂歴史や地理は叔父の影響もあってか、京介自身も不満が出る  
出来だった事は無い。

暫しの間、茶の間には雨音と、柱時計の音、そして京介が走らせて  
いるシャーペンの音が響いていた。

しかし何故か……集中して取り組んでは居る物の、やはり中々ど  
うして身に入って来なかった。

ふと、自分を見る視線を感じる。

顔を上げると、クアンがこちらを見ている事に気付く。

元々鋭い視線の持ち主な為、見据えられるときよっとしてしまっ

「あ、何か入用ですか？お茶か何か……」

「いえ、なんでもありません。お気遣い無く」

お気遣い無く、と言われてもじいと見られたら誰だって気になる。  
当の本人もそう言いながらもまだ京介の方を見ていた。

……恐らくだが、する事が無いのだろうか。

そう思うと、果たして自分が学校に言っている間は目の前の少女  
は何をやっていたのだろうか。

それが気になってきた。

「あの、俺が学校に行っている間はクアンさんは何をしていたんで  
すか？」

「斬魔刀を守っていましたが？」

「ですよ。でも奪還者は来てない……… んですよ？」

「はい、今の所は」

「という事は、ずっとここで座ってた」と

「そういう事になりますね」

……暇の潰し方を知らないのか。

いや、今クアンが置かれている状況を暇の一言で済ませても良いのだろうか。

クアンは何時来るかもわからない敵『奪還者』を待ち受けている。所謂常時臨戦態勢にあるのだから、それを暇と言うのは失礼だろう。

だが、しかし。

安息という物は、どのような事にも、誰にとっても必要不可欠だ。張り詰めている糸は、緩めてやらなければ何時かは切れてしまう。その隙に付け込まれたら、全てが無駄になってしまうからだ。

とはいえ、それは目の前の少女に果たして適応するのだろうか。その目には決して揺るぐ事の無い絶対的な意思の強さを宿しているように思える。

でも、只何もせずにいる人間を目の前にして、自分だけ勉強をしているというのも何となく気が引ける。

ずっつと見つめられたままでは如何せん勉強もし辛い。

「もし、良かったら。本とか、読みますか？」

「本、ですか？」

クアンが聞き返してきた。

「ええ、時間つぶしって言ったら聞こえが悪いかも知れないですけど」

その言葉に、何か逡巡しているように感じられた。だが、十秒も経たぬうちにクアンは小さく頷いた。

「そうですね。貸して頂けるのでしたら」

その言葉に頷いて京介は二階に上がり、自室よりも奥にある襖を開けた。

襖を空けた部屋は、京介の部屋と同じような作りの和室だった。

しかし、京介の部屋とは大いに異なるのが、この部屋の中にある書物の量だった。

古い木製の大きな本棚が並び、全ての棚に本が並べられている。その棚の上にも本が置かれており、本が天井に触れている程だった。

床にも本が積まれ、正に歩くことすらままならない。

本の特徴も様々で、年季の入った物から、そうでない物。

ハードカバーの物から、由来もわからない物。

恐らく時代、国等もバラバラなのだろう。

ここにある全ての本が、京介の叔父である名後基<sup>もとい</sup>の蔵書だった。

厳密に言えば此処だけでは無く、叔父の自室もこの部屋のように本で埋もれている。

一応叔父の言いつけを守り、晴れた日には窓を開けて換気をしているのだが、

流石に梅雨時にはじめじめした空気を発している。

本の海とも言える室内を縫うように歩き、本棚の一角の前に立つ。

京介は、この書齋にある洋書ならクアンも読めるのではないかと考えた。

京介は本棚を睨み、何の気なしに本を一冊選んだ。

分厚いハードカバーの本で、所々解れている。

試しにパラパラと捲る。

恐らく英語なのだと思うが、細かい文字が大量に羅列されており、見ているだけで頭が痛くなってくる。

高一程度の英語力では理解するには乏しい。

「……読めるかな、読めるよな」

ふと、京介に一つの疑問が浮かんだ。

果たしてクアンは何処の国出身なのだろうか。

それでも英語なら、少なくとも読めないという事は無いだろう。

知らぬ内に、京介はクアンを高い知識を有しているという印象を持っていた。

まあクアンさんなら何とかなるだろうと思い、京介は茶の間へと降りて行った。

茶の間には、クアンがやはり身動き一つせずに同じ場所に座っていた。

「取り合えず、こんなのを持ってきましたけど。クアンさんは、英語は読めます……よね」

京介が窺いを立てる。

「お気遣い無く、有難う御座います。それではお借りします」

クアンは京介から分厚い本を受け取ると、座卓の上に置いた。

京介も、自習に戻ろうとシャーペンを持ち、再びノートとテキストと睨みあいを開始した。

程なくして、パラパラ……とページを捲る音がする。

ふと音のする方を見ると、クアンは京介の持ってきた本を凄まじい速度で捲っていた。

いわゆる速読と呼ばれる物　それを何倍にも早送りにしたように見えた。

そして本を閉じ、京介に顔を向けて本を差し出す。

「京介、次の本を貸して頂いても宜しいでしょうか」

「は、はい！？も、もう読んじやったんですか！？」

京介は驚きの声しか出せない。

恐らく、英語に精通した人間でも一日では読みきれない程の文字量がある筈だというのに。

本とクアンを交互に見る。

当のクアンは、少なからず満足したような感じだった。

「はい、大変興味深い本でした。

ですが京介、これは英の言葉ではありませんよ。希臘ギリシアの言葉です」

「あ、はあ。あのくもう少しゆっくり読んだ方が良いんじゃないですかね」

「そうですね？」

「まあ、そうして買った方が助かるというかなんといえますか……」

幾らなんでもあの厚さの本をこれだけの時間で読み終わらねば、時間つぶしにもならない。

他の本を見せたとしても、また一分もしない内に読み終わってしまうだろう。

それじゃあこの家の中にある蔵書は一日もかからずに読破されてしまう。

京介がどうしたものかと考えあぐねていると、

「……これは、何ですか？」

クアンが茶の間に置いてあったラックから一冊の本を手にとった。ラックに入っていたのは、少し前に京介が買った少年漫画雑誌だった。

何時の間にそんな所に入っていたのだろうか。入れたまま忘れてしまっていたのかもしれない。

「えと、漫画本ですよ。文字より絵が多いんです」

京介の言葉をよそに、クアンは雑誌を開きペラペラとページを捲

っていた。

その速度は、さっきの洋書に比べても遙かに遅かった。まるで1ページ1ページじっくりと吟味するかのよう感じられる。

「……………」

「あの、クアンさん？」

「……………」

クアンは、京介の呼びかけには応じなかった。理由はわからないが、これも読みふけている……………というコトになるのだろうか。

京介は、仕方なしに自習を再開した。

それからは、実に静かなものだった。

「……………ふう〜」

京介がふと溜息をついて顔を上げ、首をこきこきと鳴らす。時計を見ると、三時を少し過ぎた位だった。知らぬ間に随分と時間が経っている。自分でも驚くほど集中出来ていた。ふとクアンを見ると、もうすぐ雑誌も読み終わろうという所まで進んでいた。

「あの……………クアンさん、どうですか？」

それとなしに窺う。

「ええ、大変興味深いのですが、急に物語が変わったりするのが少し理解に苦しみますね。  
破綻しているのでしょうか思えません」

「……………」

「最初、敵と戦っているというのに、急に愛を語り始めています。と思えば数人で一つの球を奪い合ったり。  
かと思えばまた別の敵と戦い始めています。しかも人数が増減し、名称も変わっています。  
これを破綻と言わずには……………」

最初はクアンが何を言っているのか理解できなかったが、少し考えたら納得出来た。

「クアンさん。それ……………一冊で一つの話を書いている訳じゃないですよ」

クアンはその言葉を聞いて、雑誌の表紙を暫し見つめ、納得したように微かに頷いた。

「……………通りで」

京介は少し身を乗り出して、雑誌のページを捲る。

「えつとですね、ここからここまでが一つの話で、ここからは別の話なんです。

それぞれ別の話が少しずつ描かれていて、毎週出る次の本を買った

びに話が進んでいくんですよ」

「成る程、そういう仕組みだったのですね」

クアンも、こういった雑誌の仕組みを把握したようだった。

「もし、なんでしたら他にも何冊か持ってきていただけますけど……」

「ええ、お願いしても良いでしょうか。」

しかし、この漫画というのは興味深いですね。この話に至っては全員が超人的な能力を有しています。

このような力があれば、もっと容易に奴らを殺せるのかも知れませんが……」

奴ら……というのは当然奪還者の事だろう。

「ま、まあ。そうですね」

「しかし、所詮は作り話。そのような事は望むべくも無いですが」

その言葉に曖昧に答えながら、京介はこう思った。

貴方も十分に漫画みたいな超人ですよ、と。

斬魔の剣 学校にて(5)・さらばテスト、ようこそ奪還者(2)

「……ふう」

京介は一つ溜息をつき、額に浮かんだ汗を苛立たしげに拭う。

目線の先には、B4サイズ用の紙に数字が羅列されていた物がある。

ふと、その数字達がぐによりと歪むように見えた。

ぎよっとして顔を上げ、思わず教室の時計を見る。

数学のテスト開始の時刻から、まだ15分しか経っては居なかった。

気分を変えようと全開にされた窓の外を見る。

空には一つたりとも雲が見受けられず、突き抜けるような青空が広がっていた。

梅雨前線は依然猛威を奮ってはいるが、それにも飽きたのだろうか暫くはこういった日が続くそうだ。

まだ完全な梅雨明け宣言はなされていないが、この調子ならそれももう直ぐだろう。

その代わり、照り付けるような陽光は余す事無く校舎を照らし、テストへと挑んでいる生徒達の集中力を奪ってゆく。

只でさえ物理と数学という頭を使う科目のテストだというのに、この気温……。

頭の中に詰め込んだ公式や解法が熱で煮沸され、蒸気と化して頭から出て行くような感覚を覚える。

窓際にいるクラスメイトは尚更、地獄のように感じているだろう。生憎、クーラーを全教室に取り付ける程この学校に設備投資をするような余裕はない。申し訳程度の扇風機が、首を振って教室内に暑い空気を送り込んでいるだけだった。

黒板のある方を見ると、試験官役の教師が目を瞑って暑さに耐えていた。

扇子でパタパタと眉をしかめながら仰いでいる。

そのまま教室内を目立たぬように見回す。皆やはりこの熱気に参っているようだった。

薙原は表情に変化は見られず、涼しげな表情をして問題を解いている。

佐渡はこの気温と問題にやられてしまったのか、しかめっ面をしていた。

辻村は自分の後ろに居る為、どういう顔をしているかはわからなかった。

「……」

と、こうしてあらぬ想像に耽っていても、目の前のテスト用紙に答えが書き込まれるわけではない。

京介は再び目の前の大敵に立ち向かう事にした。

が、解答欄に答えを記入せぬ内にシャーペンを持つ手が再び止まる。

左手薬指……指輪が、微かに疼くような感覚を覚えたからだった。

(……そういえば、クアンさんはどうしてるかな……)

少しの胸騒ぎと共に、自宅に居るだろう美しい留守番係の事を考えた。

彼女が留守番をきちんとしているかどうかよりも、気遣っていたのはその安否だった。

こうしている間にも、奴らはもしかしたらやって来ているかもしれない。

時や都合などを選ぶような相手では無いだろうから。

とはいえ、彼女が奪還者に遅れを取る様には思えなかった。

まるで空気中に漂う原子すら寸断しかねない、クアンの銀閃が迸った一撃。

およそ武道という物に触れた機会が無いに等しい京介にも、あの一撃がどれだけの物かは分かった。

奪還者とクアンの力の差は歴然だろう。

1対1なら、負ける要素は無いはずだ。

……1対1なら？

ふと、脳裏に映像がよぎる。

紅い空。

死の息吹を感じさせる広大な荒野。

まるで獲物を見つけた軍隊蟻のように群がり、蠢いている奪還者。

切り落とされる少女の腕。  
そして全身を黒い刃に貫かれ、軀から溢れ出る紅。  
濃藍の瞳から、光が徐々に失われ

京介は僅かな吐き気を覚え、映像を頭から消した。  
そして馬鹿な話だと自嘲した。

あれは、夢だ。  
自分が見ただけの、なんの関係の無い夢。

だが、そう思ったとしても拭いきれない何か京介の中に残っていた。  
一つの単語が頭から離れない。

> 軍隊蟻 <

一匹では踏み潰されるだけの蟻であっても、それが数百、数千数万と群れを為せば……象であろうとも仕留める事が出来る。

奪還者が、一体どれほどの数居るのかはわからない。  
が、奪還者が夥しい数で現れ、一同に襲い掛かった来たら……。  
幾らクアンと言えども只では済まないのではないだろうか。

今迄が、運が良かっただけではいけないのか。  
たまたま、一体だから勝てた。  
たまたま、一体だから被害も無く殺すことが出来た。  
なら、複数体現れた時には……。

そう考えると、奪還者とは一体何なのか。  
京介は奪還者の情報が少ない事に改めて気付く。

なんとなくクアンに聞く機会を逃していたのもあったが、敵の情報を持たないで立ち向かうというのは、  
どう考えても此方が不利だろう。

< 敵を知り、己を知れば百戦危うからず >

先人の有難い言葉からも、知るといふ事がどれだけ大事かが分かる。

情報を手に入れる事によって、何らかの形で活路を見出せることが出来るかもしれない。

そして自分が使う事の出来るこの力……『境界』をより効果的に使う事が出来るのではないか。

そんな事を考えていると、

「しり……名後。名後っ」

「っ！……あ……」

自分と呼ぶ声が耳に入り、京介ははっとして顔を上げた。

視線の先には、試験監督が額に汗を浮かべながら京介の机の横に立っていた。

それで京介は、テスト中だったという事を思い出した。

「名後……ぼーっと外を見てたって問題は解けんぞ」

試験監督のたしなめるような口調に、クラスに微かな笑いが漏れ、京介は気まずそうに苦笑しながらテスト用紙に顔を向けた。

斬魔の剣 学校にて 6・さらばテスト、ようこそ奪還者(3)

ほぼ時を同じくして。名後家では

クアンが茶の間で名目上の留守番をしていた。

昨日と同様、『斬魔刀』の前に座っている。

傍らには同様に新聞紙が何日分か纏めて置かれていた。

京介の狙いとしては、時間つぶしという名目の他に、

新聞等から今の世俗や風俗を理解して貰おうという考えも入っていた。

「……」

そんな京介の意図を知ってか知らずか、クアンは表情一つ変えずに新聞を読んでいた。

面白いのか詰まらないのか、それすらも図りかねる。

時折、内容を把握しかねているのか暫し視線が止まるが、それも一瞬の事で直ぐに新聞を捲る。

「……」

名後家の建築構造上、風通しが良く涼しく過ごす事が出来るとは言ってもこの日差しと熱気である。

窓という窓を全開にした所で、むんとした熱気は容赦なく進入して室内の温度を不快指数と共に上昇させてゆく。

というのにも関わらずクアンは、首筋にも額にも汗一つかく事無く平然とした顔で新聞を読んでいた。

そんなクアンの背後に、音も立てずに現れた物があった。

最初は、埃のように宙に浮いていたそれは次第に集まりながら、散らばりながらを繰り返す。

そして徐々に集結し黒い塊となった。

更に、黒い塊からは奇妙な紋様が浮かび上がっている白い布が伸びる。

塊は、己の形成されるべき形もままならない内に、クアンへと向かった。

居ても経っても居られなくなったのだろうか、その様は実にもどかしそうだった。

だが、それよりも早くクアンの手が霞み、ヒュッ！という風を切る音が鳴る。

黒い塊は、四散した。

何時の間にか、クアンの手には槍が握られていた。

片手には、新聞を持ったまま。

目は、新聞のスポーツ欄を見つめたまま。

散っていく黒い塵に見え隠れしながら、また別の黒い塊が現れ、続けじとクアンに襲い掛かる。

それをクアンは切り裂き続けた。

槍を器用に扱い、縦に、横に、袈裟にと、無尽の銀閃を描く。

やがて、槍を持つ手の動きが止まる。

茶の間に、蝉の声が染み入る。

奪還者だった大量の黒い塵が、畳に積もった。するとそれはクアンの周囲に砂嵐のように吹き荒れた。

クアンの視界は黒に染まる。手に持っていた新聞は宙に舞い、砂嵐に飲まれ散り散りになる。

「……小賢しい事を」

クアンは、到って冷静に黒い嵐を見据えていた。それも数秒の事で、塵はやがて蒼く燃えて消えた。

「ッ！」

その途端、クアンは跳躍した。長く揃えた白銀の髪が舞い、真円を描く。

塵の嵐が去り、クアンの座っていた場所の前には何時の間にか一体の奪還者が存在していた。

巨大な体躯であり、一見すると2メートル前後だろうか。二本の足で立っているため、人のように見えた。

クアンを仕留めようと伸ばされた腕の片方は、肘から先が刃物のように変化しており、撫でられるだけでも人間の皮膚位なら容易く裂けてしまうように見えた。

クアンは、宙に浮いた体勢のまま体を捻り、奪還者に向かって槍を振り下ろす。

槍の先端は、銀閃を伴い確実に奪還者の体を袈裟に裂いた。

腰を起点に二つに枝分かれしたと言ってもいい奪還者。

だが、奪還者の体はクアンの槍へと巻きついた。

「ッ!？」

わずかながらの想定外が招いた油断が、クアンに槍を手放す隙を与えなかった。

奪還者の体はぐにやりと軟化し、槍からクアンの手へ、さらに腕へと伸びてクアンの自由を奪う。

更に脚部だった部分も、クアンの足へと絡みつき、四肢の自由を奪う。

頭部は、クアンの肩口まで巻き付き彼女の顔から数十センチという所にあった。

クアンが力を込めようとしても、僅かに動くだけで、振り払うのは困難に見えた。

奪還者に捕らえられる形になったが、それ以降奪還者の動きが止まる。

止めを刺す動きも見せず、奪還者の口が「がばあ………」と開き、紅い口腔を覗かせる。

『……束マエ他……』

奪還者の口から、不快感しか感じられないような不協和音が放たれた。

クアンは一切動じず、奪還者を睨んだ。

「……………エ……………だけで……………」

何か言いたい事があるのだろうか。

だが、不鮮明な声の為、聞き取る事が不可能に近い。

「言いたい事があるのなら、はっきりと言え」

クアンは自分の肩口にいる顔に向かって冷たく言い放つ。

その言葉に答えるかのように奪還者の腕の一部が伸び、ビキビキと大きく痙攣する。

それはクアンの目の前で再び鋭利な刃へと形を変えた。

ビュンツ！という音と共に、その刃がクアンに迫る。

だが、その刃は不思議な事に奪還者自身の顔に突き刺さっていた。

ガクガク……………と小刻みに痙攣をする奪還者。

ラジオのチューニングのように奪還者の口から零れる音が変わ化する。

時折、微かな悲鳴のような物が聞こえたのは気のせいだろうか。

奪還者は暫く己で己の顔面をかき回していたが、その動きがぴたりと止まる。

そして再び口から声が聞こえる。

『あー、あー……失敬。聞こえるかね？』

先程の不鮮明な声とは違い、やけにクリアに届いた声。声質は初老の男性とも思えるし、若くも思える。

「！」

その声に、クアンの目の色が変わる。

「貴……！！」

正に噛み付かんばかりに肩口の顔に迫る。

だが、奪還者の体から伸びた刃に首を貫かれ、クアンの口から血が零れる。

その刃は名後家の床に刺さり、四肢に加え、首まで自由を奪われる形になった。

『……おっと、そんなに近づかないでくれ給え。照れてしまって話しままならんよ』

そんな様子は微塵も感じられない口調で、声は続けた。

クアンの口からは、唸るような声が漏れ続けている。

『本来なら声だけではなく、私の元気な姿もお見せしたい所なんだがね。』

残念ながらもう少しお時間を頂戴したい。君のお陰で色々と手間取っていてね。

再び出会った時に不完全な状態でお目にかけるのは此方としても不

本意なのだよ。

今はこれを使って君と会話をするのが精一杯だね。

……所で、ご機嫌如何かな？ 剣威殿。

ああ、聞くまでも無かった。

何処であるうとも君は君のままだろう。

こうして四肢の自由を奪われようと、首を貫かれようと、

君の価値は一向に変わらない。

例えその身を穢され、塵に塗れた路傍に朽ち捨てられたとしてもだ。

微塵も、一縷も変わらない。

実に羨ましい……私もそうありたい物だ』

「……べらべらと良く動く舌だな。余程切り取って貰いたいと見える」

クアンも冷静を取り戻したのか、静かに返す。

だが、目には確かな怒りの炎が燃えていた。

奪還者の口を使い言葉を伝達していたモノは暫しの沈黙の後、非礼を詫びた。

『はははは……これは失敬した。』

久方ぶりに言葉を発したのでね、喜びの余り抑え切れなかったのだよ』

「……」

クアンは奪還者の顔を睨み続ける。

奪還者の顔……というよりも、その向こうに居るであろうモノに向かつて。

『さて、これ等も何分出来立てなモノで、さほど時間も無い。』

本題に入らせて貰おうか。剣を渡しては貰え 』

「断る」

クアンは、声に被さる様に否定した。

『…………ふむ』

「断る。二度は言わん。この言葉も意思も、裏返る事は無い。何が  
あるつともな」

『だろつね。構わんよ、君は其の儘で良い。寧ろ、其の儘が良いと  
も言えるが』

端から己の申し出など意味を為さないという事を知っていたのだ  
ろつ、

声は残念がる様子も無い。

『とはいえ、此方としても剣を渡して頂きたい事は変わらない。  
これを変えるつもりも無い。君の言葉を借りる事になるがね』

「ならば言葉など意味は無い。さつさと来い…………」

クアンは、最早これ以上会話を続ける気は無いようだ。

クアンから発せられている殺気は全て奪還者に注がれていた。

『ふつ…………ならば、此方も少し考えがある。』

…………あの少年にお伺いを立てようか』

少年…………京介に他ならないだろう。

『あの指輪………どういつ訳かあの少年の手元にある。私としても気になるところでね………』

「貴様等の狙いは、剣だろう。無関係な者を巻き込むな」

『無関係………それもそうだ。なら手助けをして差し上げよう』

声は奇妙な提案をした。

それはクアンにとって思っても見ない提案だったようだ。

「手助け、だと？」

『少年には早々にこの舞台から去ってもらおうという事だよ。』

そうすれば君は何も心配する事は無いだろう？

なに、君に煩わしい思いはさせたくないのね、安心したまえ。

少年には大人しく去って頂く。

それから我らの本懐は遂げさせて貰うとしよう』

その言葉の意味するのは、京介にも狙いを定めるといふ事なのだろう。

クアンの危惧していた事が俄かに現実になろうとしていた。

「………やってみる」

クアンは絞り出すような声を出す。

その声を皮切りに、クアンの目は見開かれた。

槍が凄まじい勢いで回転する。

槍はその回転を保ったまま、クアンの足に巻きついていていた奪還者を切り離れた。

そして、更にクアンの両腕から奪還者を切り離す。

『ほう』

感嘆する声を漏らした奪還者の体を突き飛ばした。

クアンの首に刺さっていた刃は強引に引き剥がされた為に、首の約3分の1程を完全に切り裂いた。

それを一切気にすることも無くクアンは槍を掴み、奪還者に向かって構える。

散り散りになった奪還者の体は、互いに結合し合い、再び元の人型に戻った。

屋内のクアンと、名後家の庭にいる奪還者。

クアンの首からは大量の出血が見られる。

世辞にも軽傷とは言い難い。

だが、好機とも見られるこの事態においても、奪還者が再び襲い掛かってくる様子は見られない。

『……ふむ、まあこれ位か。さて、あつちは上手くやっているといのだがね』

「……何の話だ」

『ん？言っただろっ？】【これ等】とね』

「！貴様……」

クアンの手が僅かに震える。

『さあどうする剣威殿、少年に加勢しに行くかね？それも良いだろう。』

だが、その間に私が本懐を遂げる事も考えられるのでは無いかね？

少年を大人しく【犠牲者】<sup>ヴィクティム</sup>にするもよし、

少年を助けに行つて剣を【犠牲者】<sup>ヴィクティム</sup>にするもよし。

考えたまえ剣威。クアン＝リーリムグラフ。

……君にはその理由がある』

「……」

クアンは、黙っていた。

『時間という物は、存外と、無慈悲に我等以外には等しく流れているモノなのだよ。』

さて、これを始末してから少年の元に向かうかね？

それとも、少年を助けてからこれと決着を付けるとするかね？』

「……」

『これとて、私が手がけたモノだ。十二分に時間を稼がせて貰えるぞ。』

無論、少年の元に向かわせたモノとて同じ事だ』

「……」

『出来るわけがない、人も、剣も見捨てることなど出来はしない。少年を助ければ、君の今までやって来た事は水泡に帰す。剣を守れば、少年は肉の塊と化す……ははは』

奪還者は、揺れながら笑う。  
状況を楽しんでいるように。

クアンは、静かに口を開いた。

「……それがどうした」

『……』

「言った筈だ、意思も、言葉も裏返る事は無いと。京介を引き合いに出した所で同じだ。京介だけでは無い、何があるかと私は剣を護る。それは全てに優先される事だ」

槍が軋む。

クアンが槍の柄を強く握り締めていた。

『ほう……少年を裏切るか。』

君のその科白を聞いた少年はどんな顔をするか……想像するだけで、同情せざるを得。』

奪還者が言い終える前に、奪還者に向かってクアンは跳躍した。

奪還者は刃と化した腕を、クアンに向けて振り下ろす。

だが、クアンは槍でそれを受け止めてから、奪還者の口に手を突っ込んだ。

「知った事か」

ベリベリ、と何かを剥ぎ取る嫌な音が響く。

クアンは、素早く奪還者の口から腕を抜いた。

手には、50センチほどの赤黒い物が握られていた。  
奪還者の舌だろうか。

クアンは、すぐさまそれを投げ捨てた。

「安心しろ、再生する度に引き抜く」

『……………ソ……………それは……………楽しみだ。実に……………楽しみだ』

奪還者は、口元を醜く歪め、笑った。

クアンも、槍を構え直す。

クアンは、剣を選んだ。

斬魔の剣 学校にて 7 発動

「痛っ……!!」

京介は顔をしかめる。

そして、睨むように左手を見つめた。

左手の薬指……絆創膏に隠された指輪。

そこから、波動を感じた。

京介に何かを訴えるような、そんな風に。

「名後、どうかした？」

自分への呼び掛けにはっとし、微かに心配げな表情を浮かべた雑原を見る。

「あ、ああ……いや、何でもない」

「まあ、しょうがねえよ。次のテストは物理だし、憂鬱にもなるって」

後ろの席の辻村が机に突っ伏していた顔を上げて続けた。

「大体、数学と物理を同じ日にするなんてなにかの嫌がらせとしか思えん」

「まあまあ辻村。テストも折り返しだし、もう少しで夏休みじゃない

いか」

「んな事言われたってなあ」

雑原と辻村の雑談に耳を傾けながらも、京介は不安感を拭いきれずにいた。

この感じは、あの時と同じ。

奪還者と共に消えたクアンを探していた時。公園の前にたどり着いた時。

その時と同じ感覚。

指輪はあの時と同じ様に警告しているのだろうか。奪還者が来る、とでも言うのか。

此処に……来るとでも。

まさか、それは考えにくい。

来るわけがない、奴等の狙いは剣なのだと言っていた。彼女も言っていた。だから、此処に来る訳が無い。

万が一だろうと、そんな事は……考えたくない。

「おい、京介。本当に大丈夫か？生きてるか？」

「具合、悪そうだね。辛かったら無理しないで帰った方が良いんじゃないか？」

さつきよりも、更に心配げな顔を浮かべる薙原。辻村も、僅かにからかう口調が抑えられていた。

「あ、ああ……そう……かな」

学生の本分として、ここに居なければならぬ事は解っていた。しかし、今現在名後京介という人間は、それよりも優先すべき事が出来てしまっている。

自分が『そこ』に居たところで、役に立つとは思っていない。しかしながら、何もせずに指を銜えているままでは居られなかった。

「まあ、テストも追試受けりゃあ済む事だしな。大人しく家で寝てろよ」

「そうだね、先生には言っておくから」

「そう……だな。じゃ、じゃあ悪いけど今日はこれで帰……」

京介は軽く挨拶をして鞆を取り、立ち上がろうとした

「……………」

その顔は驚愕に満ち、さあっと血の気が引いていく。

今……自分の目が正常に機能しているのなら。

今日の前に現れ、薙原の肩に舞い降りた一片の白く、淡い光は真実という事になる。

それが一体何を物語っているのか。  
何を意味するのか。

京介は戦慄を覚える。

なんで……『これ』が『ここ』に……！

焦燥と、混乱で心臓の鼓動が一気に加速する。

呼吸が荒くなる。

『これ』の意味する事は、京介には一つしか思い浮かばなかった。  
境界が、発生しようとしているのか。

だが、京介は境界を発生させるつもりなど毛頭無い。

こんな所で、境界を張ろうものなら一体どうなることか。

京介には想像も付かない。

現状、自分でも把握し切れていない事に、何も知らない人間を巻き添えにしてしまったら  
どうすることも出来ない。

だとすると……指輪が強制的に発生させようとしているとでも言うのか。

だとしたら……何故!?

指輪から発している警戒とも取れるようなじくりとした感覚は、一定の周期を保ちながら京介に対して送られていた。

「おい京介、ホントに大丈夫か？おい……よう……」

思考は澱み、辻村の声も遠ざかる。

やはり、当然というか、そうであって欲しいとも言えるが辻村達には『光』は見えないらしい。

京介にだけ見ることの出来る一見神秘的とも言える現象は、さらに増して行く。

目の前に……また一片の光が落ちた。

「っ！」

京介は息を吐き、弾かれた様に立ち上がった。

休み時間とはいえ、テスト前で微かにざわついているだけの教室には、

京介の椅子を引く音は響き渡って当然であった。

不思議そうに京介を見る辻村、薙原。

クラスメイト達も驚きと迷惑交じりの視線を京介に向けていた。

その視線を即座に感じ取る京介。

呼吸は整えられず、周囲をわずかに見回す。

「あ……いや……今日はこれで……帰らせてもらつよ……」

喘ぐようにそう言うしか出来なかった。

顔色の悪さが、その言葉に説得力を持たせた。

血の気は引き尽くし、今にも倒れそうにさえ見える。

何か言おうと口を開いた辻村達を無視するかのようによろけそうになりながらも教室を出て、ドアを閉めた。

廊下にも、すでに一片という表現では足りないほど、光が降っていた。

京介は左手の薬指を見る。

指輪から感じる波動はその周期が早まっているように思える。

「くっ……」

幻想的とも言える光景の廊下を、急ぎ足で歩く。

左手は、無意識の内にシャツの左胸辺りを握り締めていた。

心臓の鼓動が早い。痛い。

(待ってくれ……!)

京介は懇願した。  
心から。

誰と言つわけでなく。

(此処じゃ……駄目だ……！)

廊下を曲がると、急ぎ足は小走りになる。

呼吸は途切れ途切れになり、酸素が満足に送られていないのか気が痛む。

(此処がっこうじゃ……)

小走りから、全力疾走に変わる。

自分の担当する教室に向かう途中なのか、教師の一人が京介を見、注意しようと呼びかけるが、京介にはその声は届かなかった。

ふと、廊下に見知った人影がいた。

その人を見て、京介の歩みは僅かに緩む。だが、心臓は更に鐘打つ。

(！)

「あつ、名後　くん？」

それは、日下部だった。

最初は京介を見つけて表情を明るくしたが、京介の様子が異常に見えたのか、心から心配そうな表情を浮かべた。

「はあ……はあっ……く……さかべ……」

確かに顔は土気色になり、冷や汗を流しながら歩いている京介は、普段の京介から余りにもかけ離れていた。

日下部は京介に駆け寄ろうとしたが、京介はそれよりも早く、走る方向を変えた。

「あ、あのっ  
」

慌てた日下部の声を背中に聞きながら、京介は走る。

日下部を見た瞬間、爆発的に光の量が増えたのだ。

もしあのままだったら、日下部も巻き添えにしてしまっかもしれない。なかつた。

……それだけは、避けたかつた。

日下部だけじゃない、この学校に居る人間。

誰一人としても巻き添えになる理由なんてなかつた。

(頼む……頼む……頼む……！)

京介は走つた。

だが、何処へ行つたら良いかわからない。

混乱

焦燥

それらが正常な判断を阻み、刻一刻と迫っているその時を前に翻弄されるばかりだった。

その為、極めて当然と言える結論に辿り付くのに時間がかかった。

この状況を頼るに唯一の存在を。

自宅に居るであろう、白銀髪の少女を。

彼女ならば、きっと何とかしてくれるであろう。

この状況を把握し、万全の対処法を考え出してくれるだろうと。

京介は安堵に包まれる。

だが、その刹那、舞い落ちる光は爆発的に増した。

（頼む頼むクアンさんクアンさん頼む頼む頼む頼む頼む頼む頼むクアンさん頼むクア頼む頼む……）

ドグン……！

一つ大きく心臓が鳴った瞬間。

（ぐっううああああああっっ！……！）

指輪から、蒼が迸った。

.....

.....

.....

『ほづ』

「ッ！」

クアンと奪還者は、同時に学校の有る方角を見た。

名後家の位置からでは、学校を見る事は出来ない。

だが、境界は着実に空に伸び、地を這いずり、その姿を表す。

境界は、両者を見下ろす。

両者はそれを見ていた。

境界は完全に学校を街から、この世界から隔離させた。

だが、やはりそれは誰にも見えては居なかった。

鴻神市に住んでいる『人間』には。

通常このような物が見えているのなら、俄かに街は混乱を起こし騒動へと発展するはずだろう。

クアンの貫かれた首は、既に出血は止まっており、毛筋程の傷跡も見られない。

奪還者は、左腕を切り落とされていたが、切断面から徐々に肉が盛り上がり、再生しかかっていた。

そんな事もお構いなしに、両者は境界を見つめる。

「…………ツク…………」

クアンの微かに呻く声が耳に入り、奪還者はゆっくりと視線を戻した。

『中々良い境界を造るのだな少年は。』

『とはいえ…………造ったか、造らされたか…………。』

『まあ、それはさしたる問題ではない。そうだろうか？剣威殿』

奪還者と、クアンの視線が交錯する。

「…………」

『部屋に閉じこもり堅牢な鍵を閉め、部屋の隅で震えていればさぞや安心だろうが』

つらつらと喋る間にも、奪還者の左腕は再び刃と化していった。

『…………その実、その部屋の中にこそ闇は潜んでいた事も知らずにいる。』

そして、堅牢な鍵は開ける事も叶わない…………助けに来た隣人も…………鍵をかけた本人にもだ』

「……」

『はははは。実に可愛い物だ、全くもって可愛い物だ。まるで何も知らない初心うぶな力ニヤカのような。無知ゆえに、純真ゆえに撫で回したくなる。首がもぎり取れそうになるほどにだ』

愉悦の表情を浮かべた奪還者の両手が唸り、二本の刃はクアンに迫った。

『だからこそ 我等には要らない。実に不必要だ』

クアンは槍の柄で振り下ろされる二本の刃を受け止めた。クアンの体が僅かに沈む。

表情一つ変えず、クアンは静かに奪還者を睨む。

奪還者の顔が迫り、より刃に力を込めた。

『その点、君は実に良い選択をした。君の選んだ結果はこれだ。少年は居なくなり、我等は存分に本懐の遂げあいが出る』

奪還者は息を吐く。実に心地良さそうに。それは陶醉しているようにも見えた。

『素晴らしい、実に素晴らしい。あの時と同じだ』

「…」

その言葉に、刃を受け止めていたクアンが固まる。

濃藍の瞳は、微かながらも確実に狼狽の色を見せていた。

『そつだ、あの時もそうだった。君はいつも素晴らしい選択をしてきた』

「……黙れ……」

『悔やむことなど無い。その必要も無い。結果には必ず理由がある。……だからこそ彼等は物言わぬ肉と化す』

「……黙れ……黙れ……黙れ……！」

クアンは苛立ちを抑えられず、言葉を繰り返した。

『だからこそ……彼女の前でも、胸が張れようさ』

その言葉に、クアンの目の色が変わる。  
跳躍し、槍を横薙ぎに払う。

奪還者は身をかがめるが、銀閃が奪還者の顔を横一線に<sup>はし</sup>迅る。

その顔の中央より上は、クアンの一撃により、噴き飛んだ。

切断面を覗かせながらも、奪還者の声は続けた。

『例え私が黙したとしても、彼奴等が肉と化した事には変わらんよ。そして今少年も肉と化す』

ふわりと着地したクアンの目は、凍るような蒼を湛えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4593d/>

---

斬魔の剣 十畳間にて

2010年10月8日14時11分発行